

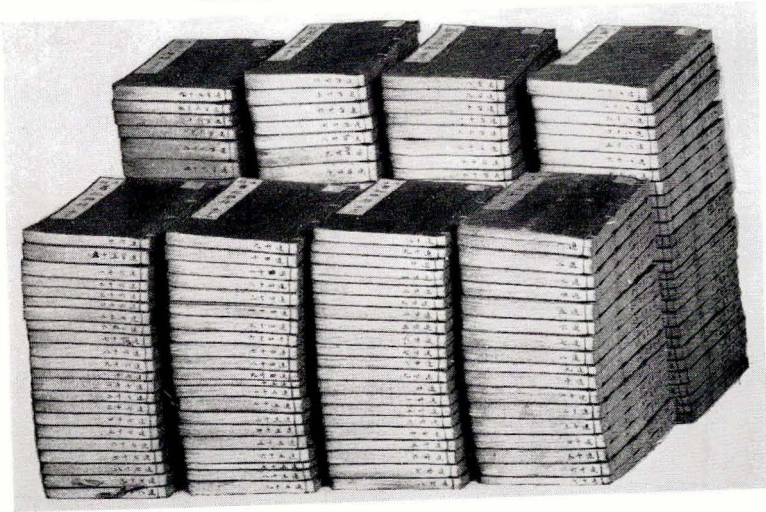
鹿兒島県史料

旧記雑録追録

一



薩藩舊記雑録追録の表紙・本文



薩藩舊記雑録追録 全182巻

序

本県には、戦前発刊され、さらに先年増補復刊した「鹿児島県史」はありますが、いまだ史料集がなく、早くからの刊行が望まれておりました。ところで昭和四十三年は、時あたかも明治百年にあたり、本県にとりましては、まことに記念すべき年でありました。この明治百年をさらに意義あるものとするために、県では明治百年記念事業委員会を設立し、各種の記念事業を企画いたしました。

史料刊行もその一つであり、すでに昭和四十二年度より県明治百年記念事業事務局によって、薩藩旧記雑録や忠義公史料などの基本史料が収集されたのであります。

県は記念事業委員会の要請に基づき、昭和四十三年九月、鹿児島県維新史料編さん所を設置し、史料の収集を継続するとともに、史料集刊行の準備を進め「鹿児島県史料」第一巻として「旧記雑録巻一」の刊行に至ったのであります。

本書は、わが薩摩藩の基本史料であり「鹿児島県史」とともに、本県地方史の研究と、ひいてはわが国の学術史料としてご活用いただけるならば、わたくしの喜びこれに過ぎるものではありません。

この記念発刊にあたり、出版を許諾された東京大学史料編纂所、また終始本書の編集にご助言、ご指導いただきました顧問・委員の先生方に深く謝意を表します。

昭和四十六年二月

鹿児島県知事 金丸三郎

解題 伊地知季安・季通と薩藩旧記雜録

薩藩旧記雜録は、幕末薩藩の生んだ史学者伊地知季安・季通親子が、数十年にわたり、島津家文書をはじめ、薩藩領内において収集した文書・記録を編年順に集大成した薩藩関係史料集である。本書成立の経緯は、鹿児島県立図書館本薩藩旧記雜録前編第一巻巻頭の明治十三年十月付、伊地知季通の自序によって明らかである。全文を左に掲げよう。

「国史ヲ編輯スルニ考拠トスヘキ者ハ古実録ナリ、余カ亡父季安性古ヲ好ミ、薩隅日旧古ノ記録文書ヲ探討スルコト数十年、余モ亦之ヲ集メテ以テ大成スルノ志アリト雖、固ヨリ至愚ニシテ編纂ノ道ヲ知ラス、普ク探リ広ク求メ纂輯スルニ若干冊トナル、旧記雜録ト名ク、前後兩編ニ分チ惣計六十八卷トス、長久二年^{星霜八百四十年}ヲ以テ始トス、元和元年^{星霜二百六十余年}ヲ以テ終トス、此中間五百七十余年ノ歴世治乱沿革ヲ見ル証拠トスルニ足レリ、初メ筆ヲ弘化ニ起シ嘉永中ニ至リ勤務暇アラスシテ停止ス、其後匿藏スルコト殆ト三十年、而テ他書ハ皆近歳ノ災ニ罹ル、惟是ノ一書災ヲ免ル幸ト云ヘシ、該書載スル所ノ原文既ニ亡失スルモノ多シ、就中寺院所藏ノ如キハ廢寺ノ際悉皆官庫ニ收藏セシニ亦兵災ニ罹ル、嗟乎惜哉、曩ニ偶横川三等属ヲ訪ヒ該書ノ存在セシ話ニ及ヘリ、乃需ニ応シ五六卷ヲ遺ス、日ナラスシテ同氏京ニ齎シ往テ巖谷編修官ノ展閱ニ供セラル、是ニ於テ該館監事三浦安、書ヲ本県渡辺大書記官ニ寄せ該書ヲ謄写シテ以テ送スヘキノ倚頼アリ、即旨ヲ余ニ伝ヘラル、余以為ラク、此独余カ幸ノミニアラス、将来ニ保存スルニ至テハ豈本県ノ幸ト言ハサルヲ得ンヤ、退テ拙纂ノ体裁無キヲ思惟スルニ大ニ額ニ汗スルニ至レリ、伏テ願クハ再調審査ヲ經、脱漏ヲ増補シ、且醜拙ヲ删除セント欲ト雖モ、公務ノ寸暇偷ミ難ク笑ヲ永世ニ貽ス、実ニ是遺憾ト云ヘシ、今全卷謄写成ル、近日將ニ通送セントス、概閱スルニ恐クハ伝写ノ誤アランコトヲ、因テ按スルニ旧古ノ文章時世ノ

沿革ニ随ヒ各其体ヲ異ニシテ其行ノ文辞ニ至テハ解シ得サル者最多シ、識者ヲ俟ニ如カス、今該卷披閱ノ便ヲ要シ更ニ目錄ヲ卷端ニ載セ概由ヲ叙ス」

これによれば明治十三年十月、季通が編纂し修史局に提出したのは六十八卷であることをしる。これは現在鹿児島県立図書館所蔵本前編三十六卷（長久三年より天文二十三年まで）と後編三十二卷（天文二十四年より元和元年まで）を合わせたものと同じ内容であろう。その後追補として卷三十三（元和二年）より卷三十五（寛永二十一年）までの三卷と附録として卷一（年紀未考）より卷五（朝鮮日々記・朝鮮軍聞書）までの五卷を合わせて八卷が付加されたのである。以上総計七十六卷の県立図書館本は修史局に浄写提出したものの原本であろうが、その筆者は県史局の数人で分担したものと思われる。しかし所蔵者名、註記の書入れ、貼付挿入文書に季通の筆が散見するので全体として季通が編纂の上、筆写を統轄したことは間違ひなからう。

県立図書館本とは別に島津家旧蔵、東大史料編纂所現蔵の旧記雑録がある。表題は薩藩を略しそれぞれ前編旧記雑録・後編旧記雑録・附録旧記雑録・追録旧記雑録とする。卷数は前編四十八卷、後編百二卷、附録三十卷、追録百八十二卷の計三百六十二卷の尨大なもので内容も前者に比し、はるかに豊富で所収文書の点数も著しく増大している。ことに追録は県立図書館本になく新たに加えられた分である。前・後編は季安の自筆写もかなり含まれるが、追録・附録はほとんど季通の自筆で占められている。また卷仕立の方法、付箋の付け方などからみて、同本ははじめ季安等の筆写した文書草稿を編年順に配列し、それに季通の自ら書写した分を挿入し、合わせて編成したものであると思われる。同本は一般に薩藩旧記雑録の原本又は季安・季通自筆本とよばれ、前記県立図書館本より良質のものとされる。

今回刊行に当って、はじめにとりあげた追録旧記雑録は、同後編の後をうけつぎ正保二（一六四五）年より明治二十八

(一八九五)年に至る二百五十一年間の文書・記事を編年順に収録する。島津氏歴代でいえば光久代より忠重代に至る。前述の如く若干の挿入文書を除きそのほとんどが伊地知季通自筆写本であり、追録が前後編と異なり全く季通一人の筆写、編集なることを示している。このように薩藩旧記雑録は県立図書館本、島津家旧蔵本共現在の如き形にまとめられたのはほとんど季通の手によるものといえるであろう。しかし漠然とであってもその構想が季安の代に生まれ、その骨格をなす文書、記録の収集、筆写、整理の仕事が既に手がけられていたことは事実である。また季通が父季安の教育、指導をうけ、その学風と共に歴史編纂の事業を忠実に継承したことは疑いない。季安が歿するまで長年の間季通はその協力者として精勵し、その遺志と遺業を十二分にくみとっていたのである。かくみると、やはり薩藩旧記雑録は伊地知父子の手によって集大成されたとする定義が妥当のように思われる。

旧記雑録収録の文書は、それまでに何回か整理され修補され、そして写しとられた御文庫の文書のほか、藩記録所で長年にわたり藩内の寺社旧家等から提出させ、写しとった写本や、時には原本によって採録したものであった。藩内の目ぼしい古文書は大部分網羅されたといつてよい(もつとも禰寝文書、二階堂文書の如く収録もれのものも若干ある)。しかし季通も前記序文でのべているようにその後幕末維新期の廢仏毀釈、西南の役等のため原本の失われたものも多く、さらに社会の変動、戦災等による原本の散佚、焼失もこれに加わって、現在旧記雑録による以外内容を知りえぬ文書は相当な数に達している。これによつても旧記雑録が薩藩史の研究にとつて、必須の史料集であることが明らかであろう。勿論多数の文書を筆写するわけであるから若干の誤写脱漏はさけられない。しかし季安・季通の写本についてみればその数は極めて少なく、不明字は原本に忠実に写す等、その正確度の高さは評価されてよい。また年代の推定、人名の比定についても完全とはいひ難い。しかし何よりも尨大な史料を、つとめて正確に書写、且つ編年順に編集し、研

究に利用し易い形で後世に伝えてくれた功績に対し、我々後学者は深く謝意を表すべきであろう。

さて伊地知父子の中、父の季安は多作の人であった。彼は数十種に上る多数の史料集、著書、考証を残している。またその履歴も季通らの手によって比較的明らかにされているといつてよい。しかし子の季通については季安より後代の人であるにもかかわらず、かえって不明の部分が多い。また作品も薩藩旧記雑録の集成のほか慶明雑録、西藩名臣録、両院古雑徴等史料編纂のほかは、一、二を除き著書、考証等ほとんど残されていない。

「両院古雑徴」は安政三年から六年にかけて父季安の考証や自ら収集書写した文書を加えて編纂したもので、彼が大
口郷地頭代在任中の仕事であった。「伊地知季安日記秘要」によれば万延元年九月十四日季安の提出した高書上では持
高百五拾五石四斗壹升八合五夕四才の中、「百石者喜十郎地頭代御役料高ニ候」とある。同じく「日記秘要」弘化四年二
月十八日条では島津斎彬にその業績を認められた季安が子の季通についても下問のあったことを感激して記している
が、その中で「当分御作事方下目付相動罷在候」とある。そして三月十三日条で著述の提出を命ぜられた際「小十郎悱^(季通)
不相替数寄ニ而心掛罷在ものニ御座候間、美濃紙式三束も御戴せ被置候ハ、此品立之内書写させ差上」るように取計ら
うとあり、同五月十八日条では季通が家老調所広郷趣法方用人海老原清熙より高麗町橋並びに吉野橋掛替の作事方を命
ぜられ、毎朝六ツより暮六ツ過まで精動していたが、その際海老原清熙は「名高キ小十郎悱^(季通)ニ候得者何角可辨達」との
意向であったとある。党禍に連坐してはじめ逆境にあった季安も情勢の変化でようやくその学識が認められると共に「
寛永軍徴」をはじめとする著作が、当局者の求めるところとなってきたのである。以後季安はさらに記録奉行という彼
としてはもっとも所を得た官につくが、この間季通は職務のかたわら父の助力者、協力者として史料の書写、整理、収
集に当り、やがて自らも史料編纂の抱負を強く持つようになったのであろう。

季通の履歴については明治九年十二月改の「鹿児島県職員録」（県立図書館蔵）によれば札紙に「明治九年丙子一月三十一日補 租税課 伊地知季通 五十六年四ヶ月、文政二年己卯九月生」とあり、また台紙に「少属 日給 上等廿五円 下等廿三円 十二等出仕」と記載がある。しかし生年月日については興国寺墓地にある伊地知季通の墓には「明治三十四年三月十九日死 文政元年九月廿二日生」と刻まれてあり、さらに墓碑銘には

「君諱季通、通称喜十郎、又改小十郎、母季伴之女、文政元年九月生于上原、資性剛直、学問渊博擊劍弓術復極、時蘆嘉永六年為大口地頭、及期滿、郷人咸曰、有惠於我、乞再任、留任八年、治績有可視者云爾、後為郡奉行、復出仕于軍務所・知政所、乃廢藩至明治^{九年}丙子執掌于公務、無有遐逸、丁丑之變後以歴史編修官于鹿児島県庁、既而為磯邸古文書調方、卒之前二年而罷、明治三十四年三月暴疾卒、享年八十有四」

とある。おそらくこの方が正しいものと考えられる。

季通が先祖の招魂墓碑二基をたて、その碑名を委嘱し、また自ら記したのは、明治九年および明治二十二年のことである。

一つは、伊地知氏祖先招魂之塚で、「始祖民部少輔重眞」、「二世小次郎重之」、「三世民部少輔重照」、「四世民部少輔重辰」、「五世美作守重常」とあり、つづけて

「伊地知氏始祖民部少輔重眞、伊地知彈正忠季隨第三子、民部少輔季弘第三子也、季隨始事島津氏、忠死著名、重眞分族亦事島津氏、第二世曰島津松元小次郎重之、食邑隅州姫木之松元因氏焉、島津蓋賜族也、第三世曰民部少輔重照、松元氏或称本姓、食邑姫木居松元、第四世曰民部少輔重辰、主貴久命為帖佐新城地頭守其城、享祿二年正月廿二日祢答院重武率多兵来攻、重辰与衆奮戰而死、第五世曰美作守重常、復本姓、為油須木地頭所、守接敵境、数有戦功、賜

市来皆田代村及伊作田村陣園門、因居焉、食邑凡十二町、永祿十三年十一月十八日歿、年六十三、以上五世皆失墳墓所在、第十五世孫伊地知季通乞余曰、吾父季安嘗欲建招魂墓以合祀其靈、未果而歿、吾今繼遺志而建一石於塋域、子為誌之、余乃拋家譜錄其梗概云、明治九年四月、児玉利彰謹誌」

とある。

二には、伊地知氏先祖之招魂墓で、「六世備後守重康」、「七世民部少輔重堅」、「重堅妻阿多氏」、「重康二男弥右衛門重高」、「八世左右衛門重政」、「重政妻最上氏」、「重政長男小吉」とあり、つづけて

「重康慶長十三年卒於大口、月日不詳、重堅慶長三年十一月十八日戦死于朝鮮、重堅妻寛永廿年十二月二日卒於日州加久藤、重高慶長五年九月十五日戦死于関原、重政正保三年十一月四日卒於江戸、重政妻寛永十七年八月十二日卒、葬正建寺最上氏墓地、小吉正保二年七月六日卒於江戸、今失其墓、明治廿二年二月招靈魂祠於此地、十五世孫伊地知

季通誌」

とある。

彼のこの挙は歴史学者として彼の面目の一端を示す一事といつてよいであろう。また著名な事実として慶応三年、父季安の死後、漢文でその伝記「伊地知季安小伝」を作成し、「先考伊地知府君之墓」をたて、その碑銘に父季安の業績を簡単な文章で要約した。季安の業績を紹介する意味で左に挙示しておこう。

「先考諱季安、字子静、号潜隠、通称小十郎、世本府人、本姓伊勢氏、八之進諱貞休次子、妣亦伊勢氏、年二十出嗣伊地知氏、実為小十郎諱季伴後、而娶其女、乃先妣也、四男二女、男長天、次季通、次嗣黒田氏、次季敦分族、女長適本田親賢、次天、先考為人、淳朴寡慾、自少嗜学、既長好為文章、最精古先事、仕為横目、年廿七連坐党籍、禁錮

凡四十年、常覽思古事、博搜群籍、遍質旧典、貴門士族請撰譜牒者多、或紀述答質問、或纂衆籍、著書若詩若文、凡數十百篇、其方編撰也、惟患事実不精・徵拠不明、深稽博証、日夜孜孜無倦無息、至忘寢食、齡踰六旬、特恩遭赦、舉御徒目付、歷御記録方添役・御軍賦役等、遷御記録奉行、時年七十一、順聖公私命撰 太祖得仏公譜図、又命先考及同僚、查檢公室所出伝古文帖、以新加裝潢、分軸凡數百卷、先考為之總裁、其拜呈譜図也、進官為御使番、以賞其功、其文帖之成也、今公賜物件以嘉賞之、後歷物頭・町奉行格至御用人、皆奉史事如故、更增職田、賞其老而益勵職務、実可謂強而不已竭其職矣、今茲六月罹疾、竟以八月三日没、享年八十六、葬太平山笠、法諡高顯院殿子静楽道居士、今建石記行事、事猶多文不逮意、舉其概略以伝不朽、銘曰、

恬淡好古 不慕浮榮 勉勵晨夕 史筆研精 遺編在笥 永伝芳聲 仰止罔極 鬱乎佳城

慶応三年丁卯仲冬不肖男平季通泣血謹誌」

また季安・季通の墓とならんで季通の長男季成の墓がある。季成は幕末維新期に際会し、多感な青春時代を軍人として送り、遂に西南戦争で落命したのであった。季通は父季安の死を見送り、今度は頼みとする息子に先立たれたのである。その墓碑銘の末尾に「父伊地知季通涙を揮って誌す」とあるのは彼の深い感慨を如実に示しているものといつてよいであろう。

「長男諱季成、初季柄、幼字小次郎、称李右衛門、世氏伊地知、列鹿兒島士、弘化四年九月四日生、母大橋氏、文久三年撃英艦於鹿兒島海、季成列砲台士、元治元年討長賊巖下、亦列藩兵、慶応三年自伏見戰至上州梁田・奥州白川二本松・棚倉・会津等、列藩兵第四隊分隊長、明治二年応徵上京、四年再応徵上京、七月挙親兵軍曹、転権曹長、八月任陸軍少尉、六年帝行幸箱根従之、十一月任中尉、七年征佐賀賊、命抵兵庫聞既平賊、八月任大尉、十一月叙正七位、

九年六月帝巡幸奥羽亦從焉、九月命入学戸山学校、十年二月十九日命征西役、更拜近衛兵歩第二聯隊副官、廿日發東京、廿七日抵久留米、自肥後南関進軍山鹿方、是時賊勢甚盛我聯隊尉官多死傷、於是自率第一大隊、振勇勵兵拒戰數日、遂中銃丸死於山鹿郡城村、実三月十二日也、乃揚骸於南関、十三日葬西宗寺、追凱陣第二聯隊長国司中佐送状於本県、以報告家族、嗚呼惜哉、命乎、娶市来氏有一女、官賜月金十五円、扶助寡婦、季成年僅三十、而屢勞軍務、是職之靈遂以致身、其勲功偉績豈可不記以伝乎、因招魂建石勒其概略爾、十一年六月父伊地知季通揮涙誌」

このほか彼の数少い著述の中に「愚意」がある。これは彼が明治十年の役後、郷土の地に開化と称して実は輕薄の風潮が流行するのを慨嘆し、青年はすべからく文武兩道兼備に意を用うべきことを説いた警世の書である。彼が薩藩旧記雑録編纂の畢生の大業を成就したのもかかる警世の情熱が根底にあつたればこそであろう。

薩藩旧記雑録追録の刊行に當って、まず同書全体の成立の事情と、その編纂に着手し完成した伊地知季安・季通父子、とくに季通の履歴の概略を紹介した。些少なりとも読者の参考の資に供しうるなら幸いこれに過ぐるものはない。

例言

- 一 本書は、東京大学史料編纂所蔵本「薩藩舊記雜録」を底本とし、そのうち追録卷一より卷二十一までを収めて、「鹿児島県史料 舊記雜録 追録卷一」として刊行するものである。年代は正保二年より元禄九年までの五十二年間であり、以下底本の追録卷百八十二、明治二十六年までを、更に約七卷に分けて刊行しようとするものである。
- 一 文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に附した。また卷末に文書・記事目録を掲げた。
- 一 文書、または記事が数種の内容に分れる場合には、小番号を附した。
- 一 刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。
- イ 文書の所在などを示す原註は、一字下げて首部に附した。
- ロ 猶々書は、二字下げにした。
- ハ 文書・記事には適宜読点「、」および並列点「・」を附した。
- ニ 附(付記)、但(但し書)は改行した。
- ホ 文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にあわせて、ある程度の統一をした。
- ヘ 書状は底本の体裁に従うが、包紙の封じ目は「メ」に統一し、包紙への註記は底本にならった。
- ト 花押は(花押_{No}X)と番号を附し、人名を傍註するほか、卷末に花押集を附した。
- 一 漢字は原則として底本に従ったが、文意や文書の体裁をそこなわないものは、適宜当用漢字に改めた。
- 一 異・略・俗体文字は大部分を普通の字に改めたが、次のような字は特にこれを残した。

尔(爾) 早(畢) 吳(異) 珎(珍) 弥(彌)

日雇 (烈) 列 (咲止) 笑止 (騷働) 騷働 (會尺) 會尺 (誦方) 誦方 (麿) 麿 (船) 船

相摸 (相模) 訴詔 (訴訟) 飛彈 (飛驒)

一文字および文書を原文書で補正する場合には、(○○)によって補う)と補註した。

一訂正された文字には、左傍に「、」を附し、訂正文字を右側に附した。

舊記雜錄 追録卷一 目次

題字 鹿兒島県知事 金丸三郎

卷一〇 寛文二―同 四(光久公・綱久公) 網貴公)……………四四七

卷一一 寛文四―同 七(光久公・綱久公) 網貴公)……………四九四

卷一二 寛文八―同 一(光久公・綱久公) 網貴公)……………五四三

卷一三 寛文二―延宝二(光久公・綱久公) 網貴公)……………五八九

卷一四 延宝三―同 六(光久公・綱貴公)……………六四三

卷一五 延宝七―貞享二(光久公・綱貴公)……………六九〇

卷一六 貞享二―同 三(光久公・綱貴公)……………七三八

卷一七 貞享四―同 五(光久公・綱貴公)……………七八七

卷一八 貞享五―元禄二(光久公・綱貴公)……………八一七

卷一九 元禄三―同 五(光久公・綱貴公) 網貴公)……………八五二

卷二〇 元禄六―同 七(綱貴公・吉貴公)……………八八八

卷二一 元禄八―同 九(綱貴公・吉貴公)……………九二五

花押集……………九七九

文書・記事目録……………九八五

口 繪……………一

序 文……………一

解 題……………二

例 言……………一〇

目 次……………一三

卷 一 正保二―同 三(光久公・綱久公)……………一

卷 二 正保四―慶安一(光久公)……………六三

卷 三 慶安一―同 二(光久公・綱久公)……………一二三

卷 四 慶安三―同 四(光久公・綱久公)……………一六七

卷 五 承応一―同 四(光久公・綱久公)……………二一〇

卷 六 明暦一―同 二(光久公・綱久公)……………二七一

卷 七 明暦三 (光久公・綱久公)……………三一七

卷 八 萬治一―同 二(光久公・綱貴公)……………三六五

綱久公)……………三六五

卷 九 萬治三―寛文一(光久公・綱久公)……………四一八

(表紙)

光久公

自 正保二年
至 同 三年

綱久公

追
録
舊
記
雜
録
卷
一

(原寸縦二四・三センチ 横一六・六センチ)

正保四

慶安四

承應三

明曆三

萬治三

寛文十二

延宝八

天和三

寛陽公御在世中

自正保二年

至全 三年

綱久公

寛文十三年
逝去

雑抄

猶(縁)ふち不残相替立木も悪敷所ハ可被替(縁)ハ、已上、

急度令申(縁)ハ、然者金山外垣繩ゆひふち木朽(縁)ハ由申来ハ間、

来廿日を限ニ可有修理ハ、大事成番所之儀ハ間、延引有

間敷ハ、子細之段者定番衆へ申越ハ間、下知次第普請可

被相調ハ、普請衆追々ニ不参様ニ然々之主衆被相付、垣

手堅被入念肝要たるへ(取脱力)ハ、爰元方檢者相廻、大方之普

請場者鹿兒嶋江可被披露ハ、聊以緩有間敷ハ、恐々謹言、

正保二酉 正月十日

新納加賀守(念)

山野 羽月 曾木 馬越 湯尾 吉田 馬關田

加久藤 飯野 吉松 栗野 横川 踊 日當山

溝邊

暖衆中

此状同十二日参候、飯野江則持せ申候、以上、

御文庫式拾番箱四拾卷巻中 光久公御譜中ニ在リ

態令啓入ハ、

一来ル四月 若君様御元服之由ハ、左様ハハ、此方も

御奉行衆御振舞可有之ハ、就其中西弥左衛門尉能可仕

ハ之条、伊尻覺兵衛・玉利佐渡守・上村九郎兵衛・舟

木惣次郎可召寄之由 御意ニテハ、早々被仰渡急度罷

上ハ様可被仰付ハ事、

一先日灘谷如兵衛にて被仰上ハ秋目地頭之儀、和田讚岐

相カ
守物談被申外通具申上外、秋目之儀者肝要之津にて外

処、大寺喜左衛門手前堪忍不罷成ニ付、田舎へ引入、

地頭所之下知も不仕之由外間、先喜左衛門地頭被指置、

海江田仲左衛門尉へ秋目之地頭被仰付へく外間、萬事

念を入致下知御奉公申外様可被申付之旨 御意にて外

事、

一此中者高三百石より上之衆乗馬にて御奉公被仕外へと

も、自今以後者式百石より可為乗馬、百石より上者小

荷駄たるへき由被 仰出外、其段早々被仰渡尤候、恐

惶謹言、

朱カキ

正保二年 正月十八日

新納右衛門佐

久詮判

北郷佐渡守

久加判

山田民部少輔様

穎娃左馬頭様

川上因幡守様

嶋津圖書頭様

人々御中

末ニ左ノ如シ、封面ノ名略

酉ノ正月十八日之状二月八日ニ飛脚持下候、

一伊尻覺兵衛・玉利佐渡介・上村九郎兵衛・舟木宗次郎上落之由候、

一秋目地頭海江田仲左衛門へ被仰付由候、

一式百石より乗馬たるへき由候、百石より上ハ小荷駄たるへき由候、

3 御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

今度就 若君様御着袴始、為御祝儀明日御能被 仰付外

間、可致見物旨 上意外、被存其趣、辰刻登城尤存外、

恐々謹言、

朱カキ

正保二年 正月廿七日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

(島津光久)
松平薩广守殿

4 光久公御譜中

猶以物沙汰無用にて外、可有其心得外、又筑前福岡

へも長崎・嶋原・伊与同前ニ注進可被申外、

其後者不申通外、爰許弥天下鬼利志端宗衆今度我等へも

被仰聞外間、其元無油断様ニ分國中之者共ニも右之宗衆

可有之儀も外ハん哉可有聞立外、此由上り前ニ其方ニ申

置外間由断有間敷外、今度天川船日本へ差渡外ニ付御談

合共り、我等事及御談合ニ相加り、色々之様子共在之事
 二外、先天川船御詔詔ニ日本へ渡り、就其薩摩分國中へ
 も可致着岸外間、長崎・嶋原・伊与へ早々注進申りて少
 表所之者共かまひ不申、さハかしき様子無之様ニ申付可
 為肝要外、縦船参り共御詔詔船にて外ハ、如長崎参り
 様ニ被申聞、長崎へ可遣り、若しハらく其元へ召置り
 様ニと申りハ、如其たるへくり、自然かけ出も仕りハ、
 少もかまひなく其由を右之三ヶ所へ注進可申り、又彼詔
 詔船着岸りて水食物之類用所申りハ、可遣り、少表ノ
 船之上ニ人数を催、鉄炮なとうちかけ船をとめ^(マ)ふり曾
 り有間敷り、左様之儀者從長崎可有御下知り間、其時者
 各別にてり、又船参りの人をおろし置船かけ出りハ、
 其人をとらへ長崎へ可遣り、吳國船之儀鬼利志端宗之儀
 者彈正へ申渡り間、其方頭取にて余之老中へ相談り、
 船参りハ、十人衆へ其方前々被申付、右之様子細々申
 合被遣り、少も無由断調儀專要り、我等も定御暇可被下
 外間、令帰国期面り、先餘之儀者かまひなく此儀を題目
 二被心懸可然り、謹言、

朱力キ

正保二年 二月二日

光久御在判

5

嶋津彈正大弼殿 ^(久慶)

光久公御譜中

猶以巨細之儀者北郷佐渡守・新納右衛門佐所方可中
 越り、乍重言船参りハ、其日中ニ不移時右之四ヶ所
 へ早々注進可被申り、いつものことく被延延々ニ外
 て手筈をくれニ成りハ、咲止千万之儀外間、返々申
 外、早晚談合々々として事延り間、何事も差置り
 船之儀題目ニ可被仕り、以上、

追り申り、異國船之儀今度別り被仰付儀外間、如連々大
 形被存、緩々としてハ事延成立筈ニ合間敷り、船参り
 ハ、早速長崎・嶋原・伊与・筑前へ注進可被申り、様子
 次第何ヶ度も可申進儀肝心外、右ニ如申り吳國船之儀其
 方一人之役たるへくり間、自然手筈ニ違儀外ハ、手前之
 越度ニ可成り、能々心懸可被申付り、巨細者別紙書載り、
 弥為可被入念如此外、乍重言船着岸り共少表さハきりハ
 ぬ様ニと津々浦々へも堅可被申付り、為心得り、謹言、

朱力キ

正保二年

二月三日

光久御在判

嶋津彈正大弼殿

御文庫拾一番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

吳國船領内之浦江令到来、訴詔之儀於申者、船中之者氣遣無之様致挨拶、到長崎以奉行人可遂訴詔旨相含之、差副案内者彼地へ可被越之候、若在其所る訴詔仕度と申外ハ、番之者を付置、其趣大坂定番衆・同町奉行・長崎奉行人并高力攝津守迄早々注進尤外、自然長崎江不相越、又者湊へ船を不入、沖に有之る、はし船を以於令申者、湊へ本船を不入、船成者をも不差越外之間、江戸へ可及注進様なく、其上當所にハ通事無之り、長崎へ罷越義不成りハ、可帰帆之旨含之、被相構間敷外、菟角日本へ可為商船渡海訴詔外間、彼輩不氣遣之様可被心得外、恐々謹言、

朱カキ

正保二年 二月十二日

阿部對馬守

重次判

四年二月十二日付書云トアレハ
正保二年ナラン歟考

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩广守殿

昔年吉利支丹之宗徒、渡日本往々住居久矣、我君 義弘知ニ彼宗化之僻ニ而、國內毀三所建立之寺堂ニ、預禁禦以有ニ遠慮ニ、今觀ニ其所ニレ為 義弘之思慮如レ合ニ符節ニ也、其後黒船渡来 大樹家康公不レ善ニ蠻馱之風ニ、且復後來怒レ為ニ日本之冠仇ニ、以慶長十九年行人山口駿河守殿下ニ肥前國ニ、於ニ長崎湊口福田ニ有馬修理亮殿受ニ釣命ニ攻ニ七彼船ニ、若下決ニ江河ニ潮上レ爛ニ火、夫以レ義誅レ不義也、然後便ニ餓流陀商ニ船ニ而伴天連復渡也、日本甚有レ禁度、然乘レ釣ニ船来テ隱ニ處乎東口磯邊ニ、或為レ便レ唐ニ船渡不レ已、是故寛永十四年冬十月二十四日、卒尔肥之有馬嶋原門ニ徒者蜂ニ起、山登レ旗ニ旗川回レ組ニ練攻ニ天草寺澤之迷職地ニ、或困ニ有馬春ノ城ニ、凡旅卒三萬餘而闘ニ戰数月、於レ是 大樹家光公運ニ帷籌、板倉内膳正殿、石貝十藏殿受レ台命、同十一月十二日出ニ東武樞府ニ、下レ関西大集ニ豊筑前後・肥之前後軍卒ニ攻レ之乎、各雖レ盡ニ奇正謀ニ不レ能レ勝、却以將内膳正殿正月朔旦戰而死レ之、十藏殿防而被レ疵俱与空ニ手也、内膳正戰没、達ニ大樹上聞ニ、松平伊豆守殿為ニ大將ニ戸田左衛門尉殿為レ副將、同十二月三日出レ府下レ西國、加之諸侯細川・立花・鍋島。

有馬・小笠原・水野・黒田等得_レ二官一暇_レ至_レ彼地_ニ成_ニ三十重
 圍_ニ、都_テ其驍勇勢_ノ二十餘萬騎、我主 光久_ニ獨同_ニ十五年正
 月十二日夜出_ニ東武_一、直_ニ飯_一國矣、士卒五千餘承_レ鉤命、
 落_ニ離_レ乎_ニ天草嶋_一、或深入_ニ嶋原對_一陣之地_ニ、聞死者數人
 也、彼徒恃_ニ城_一郭堅_一、轉_ニ權_一謀機_ニ而禦恰_レ如_ニ兵家者得_レ
 其道者_一、諸侯輒_レ不能_レ舉_レ挫_ニ、依_レ之_ニ五畿中國四境之地_ニ
 設_ニ藩籬_一衛武_ニ以欲_レ防矣、都鄙騷亂_レ不安_レ席者也、雖然
 未_レ聞_レ下用_レ夏變_ニ於夷_一者_上、終殃速_ニ其身_一、有_ニ城主大
 矢四郎大夫者_一、細川討_ニ捕_一之_ニ、無_レ貴_レ无_レ賤_レ屍填_ニ巨港
 之岸_一、血滿_ニ長城之窟_一、曾子_レ曰_レ出_ニ乎爾_一者反_ニ乎爾_一者
 也、夫今_ニ而後得_レ反_レ之_ニ、是之謂_レ乎、大將伊豆守殿巡_ニ平戶
 蘆屋海邊_一視_ニ要害險易之地_一飯去矣、然島原荒茫之迹遷_ニ
 高力攝津守殿_一具_ニ衛武_一、天草雖_レ為_ニ寺澤舊領_一改_メ封_ニ山
 崎甲斐守殿_一一切治_レ之、僅經_ニ三三五年_一為_ニ天下領_一、備_ニ
 蠻船之禦_一、或時阿蘭陀來告曰、彼陰謀浸以欲_レ掠_ニ取_レ扶
 桑國_一以為_レ吾有、然後十六年餓流陀渡來、即行人大田
 備中守殿下_レ長崎彼船人悉陸地_ニ擄捕_一、或斬戮、或市磔、
 以_レ骨暴_レ沙磧_ニ、而其徒_ニ三五人_一擒囚而飯_ニ蠻國_一、喻_レ示_ニ告_ニ
 誅罰_一酷_一、以_レ再_レ不上_レ可_レ渡來_ニ、當_レ此時_ニ從_ニ中國九州_一諸侯
 各家老一人_ニ下_ニ集_ニ長崎_一、愈有_ニ三所_一禁禦之命令_一、自_レ我國

川上因幡守久國承_ニ其命令_一、其時於_ニ唐人_一亦以_レ私計渡_レ
 彼徒來者有_ニ可_レ罪_レ之制令_一、然又同十七年餓流陀渡來、
 雖_レ成_レ訴_レ不_レ許_レ容、即加_ニ々爪_一民部少輔殿・野々山新兵衛
 尉殿下_ニ長崎_一、運_ニ可_レ破_レ其船之霧_一而於_ニ中國_一・四國并
 長崎・嶋原・豊前小倉・九州_ニ重有_レ命令_一、自_レ我國正使
 三原左衛門尉、副使町田勘解由次官至_レ嶋原受_ニ其命令_一、
 其後筑前國大嶋伴天連扁舟漂_ニ洋上_一波上_ニ至_ニ江城_一、所_レ
 強問、不_レ得_レ遁、發_ニ其陰謀_一曰、掠_ニ把_レ日本_一二分而自_ニ
 攝津大坂_一東為_レ一派、西為_レ一派、都謂_レ成_ニ我所有_一、
 又曰阿蘭陀亦演_レ有_ニ襲_レ取_レ日本_一之志_一、然後正保元年十
 二月二十四日自_レ呂宋伴天連便_レ唐船來_レ長崎唐人告焉、
 又自_レ天川渡_レ使者欲_レ遂_レ訴_レ詔_レ而饜_ニ三船_一二艘、一石火矢
 廿四五及三十一丁_ニ皆軍船也_一、而告_レ順_ニ西南風_一渡來待_ニ北
 風_一可_レ飯之密計_上、達_ニ大樹上聞_一、同二年正月二十四
 五六之三日有_レ細評、一日於松平隱岐守殿館、一日黒田
 右門佐殿館、一日 我君光久之館、井上筑後守殿為_レ上使、
 彼船渡來時可_レ禦之權謀被_レ決斷、又嶋津領内者諸浦依_レ
 有_レ之詳密受_ニ其制令_一、因_レ茲嶋津彈正久慶・川上因幡
 守久國・顯娃左馬頭久政為頭司、澁谷四郎左衛門尉・喜
 入吉兵衛尉・二階堂阿波・海江田仲左衛門尉為_レ司隸、

可_レ禦_レ彼_レ船國務之條理又有_二我君命令_一、二階堂阿波二月二日出_レ江城、三月九日曉更來_二魔府_一、逐一述_二其_レ飯趣_一、各承_二其_レ條理_一、夙興夜寤以盡_レ力焉、其時追_レ之羽檄二月十二記日之奉書亦自_二大坂_一阿波持來、姑徵_二其_レ大槩_一傳_レ之、以詔_二後世_一爾來次序記如_レ左者也、

御文庫甘番箱四拾二卷中 光久公御詔中ニ在リ

以上

態令啓達候、

一去年新納_二右衛門尉_一被罷上_レ刻、嶋津圖書頭殿加判役

之儀并繼目之儀被得御意_レ、此度被 仰出_レ外_一、(島津久元)下野

御奉公如被申_レ外不相替加判も被仕_レ外_一由 御意_二

外_一事、

一嶋津_二兵庫頭殿_一假屋を客屋ニ被召成_レりて、當時之客屋を

兵庫頭殿假屋ニ可被成御給_レ之由_一、然者當時之客屋へ

在之藏長屋者御解_レせ被成_レりて客屋ニ可直_レり、其外之家

者何も其儘可被為給_レ之由_一、當時之兵庫頭殿御假屋之

家者可被召上_レ由_一外、双方共ニ屋敷家迄之指圖被成、

家之直成付被成_レりて急度可被指上候事、

一御分國生來之子殺_レり儀、從前々御法度之旨雖被 仰出

候于今隠_レころしりもの共在之由被 聞召及_レり條、自今以後者從_レ頭欄被相糺、知行取_レ科物銀子壹枚宛、一ヶ所衆・又内・百姓・町人者錢壹貫文宛可被申付由候事、猶期後音時_レ外、恐惶謹言、

朱カキ

正保二年 三月二日

新納右衛門佐

久詮判

北郷佐渡守

久加判

山口民部少輔様

穎娃左馬頭様

川上因幡守様

嶋津圖書頭様

人々御中

(封函)

一圖書頭殿御家老役御繼目下野殿

如御給公たるへき由御意之由候、

一兵庫頭殿假屋被召上客屋ニ被成

此中ノ客屋ヲ兵庫頭殿へ御給被成由

之事、

一御國中生來之字

殺ましきノ由候事、

嶋津圖書頭様

川上因幡守様

穎娃左馬頭様

西三月二日ノ状同十九日
飛脚持下候、

久加

額娃左馬頭印

川上因幡守

嶋津彈正大弼

光久公御譜中

覚

一異國船見得来りハ、不移時刻可申上之由弥浦、江被仰

渡り、就其常々次飛脚老遅り間、吳國船之左右可申来

時老、所次ニ侍衆可被次渡り、如何にもかन्छう成早

道かけ(斷)の衆を撰、連々拾人も拾五人も被申付置、次飛

脚之状可參時老慥ニ時付之下ニ其所より必判被押り

可被次渡り、雖為少時遅くの所老曖衆之可為越度事、

一吳國船着岸之浦へ老爰許より即刻可被相越檢使御儀定

從江戸被仰下早被仰付置り間、夜白不嫌可被罷越り、

御傳馬馬遅出中途滞在りハ、其所之役人・町別當・

庄屋へ深々鋪曲事之段可被仰付之由り間、今度之儀老

別る其心得被仕、早々可被申付置り事、

一其所々暫時之延引も御國之御越度ニ成儀ニ、是老天

下事ニり間、尋常之儀之事(マ)ニ大方ニ被存ましくり、

衆中之儀老不及申此時之御舉土ニ、不依町在郷之者

に遅々り輩へ老曲事之段可被仰付り、内々各可被承置

り事、

10 全御譜中

都之城

曖衆中

殿役奉行

薩广・大隅・日向へ被 仰出條書之写

此度從江戸被 仰下條々

一浦々へ吳國船着岸りて對日本訴詔之儀於申老、其舟中

之者氣遣無之様ニ致挨拶、不移時刻次飛脚・通飛脚二

通被申付、此方へ可有注進り、長崎御奉行其外方々へ

可申通手筈ニり条少も油断有間敷り事、

一此方よりハ右之船於着岸老、到長崎可遂訴詔之旨申含、

案内者差添彼地へ送可申由り事、

一若其元へ致逗留、訴詔仕度と申りハ、番を付置、大

坂御定番衆・同町御奉行・長崎御奉行并嶋原迄早々御

注進可申上筈ニ御座り事、

一自然長崎へ不相越、又者^欠□へ船を不入、沖ニ有之るは

し舟を以於令申者、湊へ本船を不入、鎗成者とも不指

越^{側カ}り^カる當所ニハ通事無之り、長崎へ其段も不成りハ、

可帰帆之旨申合、被相構問敷儀定之事、

一日本へ商船渡海仕度との訴詔之由り間、彼輩万事不氣

遣様ニ可被心得事、

一吳國船ニ鉄鉋などを^欠□^欠□^欠かけ^欠儀必無用之由被仰下り

事、

一自然陸ニ水取ニおりりハ、無吳儀水を可為取り、

但夜者水取ニ船よりおりり儀可被致停止事、

付水を取仕廻りハ、急ニ船乗り様ニ可申付之由、江

戸より被仰下り事、

一早晚之事之様ニ^欠存^被間敷^カり、此度者能く浦々の衆も精

を入、此儀可被心掛り事、

一少も商買ふり之儀并一色も吳國人之道具を取^カり者有之

者各曲事通問敷り間、可有其心得事、

一是非共此方を頼存訴詔可申と申、致逗留りハ、追々

早飛脚を以可被申越り事、

一右之船着岸の時みたりニ見物不仕様ニ可被申付り事、

一右之船着岸之時、所さハかさるやうに可被申付事、

此等之趣堅可申渡之段、二階堂阿波守を以被 仰下り、
以上、

正保二年三月十二日

顯娃左馬頭

川上因幡守

鳴津圖書頭

鳴津彈正大弼

諏方左衛門尉殿

三司官

金武王子

11 正保元年甲申

三月二十七日中村茂吉^{島津豊後久曾臣にて殉死}年十八 鮫島少左衛門^{同上年五十三}

12 正保二年乙酉

三月十八日篠原平左衛門宗次^{喜入撰津守忠繼臣にて殉死} 田代助左衛門

^{上に同じく}
殉死

十二月二日山之内伊右衛門^{相長半右衛門頼屋臣にて殉死}

13 喜入忠繼譜中

正保二年之酉三月十八日卒、年七十五、法號快寛忠慶、

日置方山川迄

暖衆中

14 鹿竈廻文留

猶々右之儀ニ付長崎表へ被罷越り衆賦飯米彼是之儀
ハ追ゝ算用次第可被遣り間、可有其心得り、將又此
状参りハ、其所之吳国舟之番衆被罷居り方へ、委此
旨被申入尤ニり、乍不申此状其所へ被写置、不移時
日可被相廻り、以上、

15 圖書頭久通譜中

正保二年乙酉三月十九日有ニ脚力之持レ書簡自レ江戸至レ
鷹島、公用數條之中久通之有レ要用曰、

去年新納二右衛門尉被罷上り刻、嶋津圖書殿加判役之儀
并継目之儀被得御意り、此度被仰出り者、下野御奉公如
被申り不相替加判も被仕り尤之由御意にて外事、

右者北郷佐渡守・新納右衛門佐兩老之狀也、

○同月廿日川上因幡守・穎娃左馬頭兩老使ニ平田狩野介ウシノ

達二曰、久通之継目及加判役辭退之儀、舊冬上ニ達于江

戸二矣、今度有ニ太守之答命一、継目安堵無レ有レ口能、

加判役亦不レ達ニ父之時一、所ニ以補任ニ敢勿レ固辭云

云、由レ是不レ得レ已而受レ大任勤レ其役矣、

謹言、

正保二年 酉三月十七日

穎穎娃久政 左馬頭

川川上久國 因幡守

嶋嶋津久通 圖書頭

16

御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

家来水野甚左衛門・遠山三郎左衛門方迄被入御念預御飛
札り、則令披見り、先以其地弥無別条之由珍重存り、御

紙面之通此度我等儀長崎吳国船為御仕置俄ニ御暇被下、

去比此地へ令帰所外、於江戸薩摩殿切(守腕カ)御相談申事外、

自然かりうた舟御国元へ致着岸外者、薩广守殿外被仰遣

外通無相違様ニ萬事可被仰付外、内々ハ自是以書状可申

入と存外得共、何角取紛乍存延引、所存之外外、委細者

兩人之者かた方可申入外間不具外、恐々謹言、

尚々薩广守殿御堅固ニ在府被成外、可御心安外、其

地御国元へ自然吳国舟於着岸者、万事被入御念可有

御裁判外、此方へも早々可被仰聞外、猶期後音之時

外、已上、

朱カキ
正保二年 卯月五日

松平隱岐守
判ナシ

頼娃左馬頭殿

川上因幡守殿

鳴津圖書頭殿

鳴津彈正大殿(マ)

末紙ニ

ノ

松 隱岐守

定行

四人宛略

写トアリ

17 川上十郎左衛門久慶譜中

正保二年乙酉四月七日 太守光久主於三武州江都芝之宅

地、執三行犬追物、招三太老及旗下之貴士、而備二

日見物、芳安為レ檢見、別記載レ之、

18 光久公御譜中

正保二乙酉年四月二十三日

竹千代君於三白書院二元服加冠、叙三任正二位大納言一號ニ

家綱公、救使菊亭前大納言・飛鳥井前大納言

院使園前中納言、

新院使清水谷中納言也、同二十六日光久及適嗣又三郎久

平與三諸侯ニ俱登ニ 高城ニ奉レ賀レ之、獻以三御太刀・馬代、

猩猩皮廿間一

家綱公出三御于大廣間一見レ之也、同二十九日任官之慶宴

興三行猿樂一饗ニ

院使、院使、光久依レ徵登レ營、

19 御文庫廿三番箱廿一卷中

朱カキ

正保二年

卯月廿三日写

光久公御譜中ニ在リ

若君様御白書院へ出御、御元服加冠并伊掃部殿、理髮

保科肥後殿、泔坏持出役人 松平和泉殿、打乱箱 酒井

日向守殿、御烏帽子持出 牧野内匠殿、若君様御廣問出

御、勅使御對顔、則從三位大納言御任叙、正二位大納言

二(被カ)成候、宣旨・御位記從 禁中被進、終テ御一門方諸

大名御旗本衆御目見、入御以後紅葉山へ御社參、還御之

上御黒書院ニ(差副脱カ)三献也、御祝從 公方様若君様へ 紀新

大夫御太刀、新身藤四郎被進、

公方様江 若君様より

御太刀 長光 御拾 弍十

銀子 三百枚 御鞍置馬

若君様江 井伊掃部殿方

御太刀銘 御鋧

御弓 征矢

御鞍置馬 進上

若君様江 保科肥後殿方

御太刀銘 御鞍置馬進上

若君様ヨリ 掃部殿へ

御太刀銘 正宗之脇指被下、

若君様ヨリ 肥後殿へ

御腰物被下、

公方様へも一腰宛進上、

又一腰宛拜領、

御宮へ御鞍置馬御進納、

20 新納氏家蔵

武藏守忠元軍勞之覺

(凡カ)一伯圍様伊集院に御座之時、郡山へ入來院殿格護之処に、

(天文十四カ)年号ハ不相知り八月七日之夜、神殿より伊牟田左衛門

藏之城迄忍入、敵つよきニより其城一ヶ所にとり籠居

トを伊集院衆二番衆にて被見積、但南郷四郎殿・市

來小四郎殿・拙齋次郎四郎と申時、闇の夜ニ走こみ、

くらの城戸之前のたれニ少鎧、鎧疵一ヶ所すり手

なるゆへ同心衆拙齋くらの城戸三重、本城戸以上四重

取破、春山越中殿被追付同前に被仕、内城さしこた

へト処ニ伯圍様被成御出被遊上矢を御詰させ、後川

上十郎左衛門殿・前大爲阿弥・野村民部少輔殿・拙齋

庭中ニて心々の合戦被仕、山口名字之者刀ニて拙齋と

暫切合、とも、終こかの山口、拙齋討取、首を

伯圍様被懸御目、

(天文十八)一六年弓箭と申へ入來院殿・祁答院殿・東郷殿・蒲生殿・

肝付越前入道殿、加治木・溝邊を被侍り時御敵被申、

吉田難成り時分、三原遠江殿・山田藏人殿・宮原筑前

殿・長野兵部殿・拙齋若背之時、此五人被召移数年辛

勞被申り、其中三月十七日終日軍つれとも鎧ハ無

之り、各手をくたかれり、同四月八日大合戦にあり、

興慶寺之前脇にて馬場名字之人太刀始、拙齋にあらそ

ハれりへとも翌日敵方太刀始ハ太刀持たる人と申

り、拙齋も殊ニ太刀為持人無御座り故太刀始に成り、

其後敵追詰合戦有之り、上原長門殿・拙齋兩人にて被

仕り、

一吉田之鎧を破、たれこしに数度合戦り、一度も拙齋は

つれす被閉目り、馬場中ニ有馬右衛門立合にて殿同

被仕り、有馬其場にて敵打取り、

一岩劍御陳之時屋世五郎之下ニ有合戦、伊作衆宮原右衛

門弟源太左衛門登跡殿同仕り、

一北原帰忠之時 伯圍様御太刀を御持せり處にしつハら

ひ可仕由以 御意其首尾仕り、龍伯様御手をくたかれ

御存之前り、

一横川召崩之時 詰の於城戸伊集院(久信)元巢同心申り有鎧仕

り、伯圍様溝邊に御滞留之間に兩人御遣之時、

一武藏殿同度数拾九度、是者同心立合之證跡有分、此外

無證跡殿同たれかし屏越除、

一牛根之城逆瀬川豊前・久留半五左衛門・本村筑前此三

人同道仕惣陳に罷出申り時、牛根相さへり、何とか

可有行之由

龍伯様御定り趣承、右三人に談合仕する、城之事に

間、夜しやくに岸を切て見度り、三人於同心者頼入由

申、此衆者無吳儀仕り見可申由被申、先岸を切見りへ

者夜も明り、直御陳參申上り、上様御大慶之御定り、

又岸を切せり行を敵見申、夫より和談に罷成り、地頭

之弟安樂名字之者人質出り、此方拙齋息刑部太輔人

質出り、

一肝付をくりハリ可申由依

上意り、伊集院下野殿・上原長門殿・拙齋龍波、根占

殿談合仕成就申り、

一馬越於城一度ハ新納江州・宮内之葉波田同心仕り、又

伊集院作州其後飯野衆有馬奉膳兵衛此人とは兩度寄合

仕り、拙齋二之肢に狩俣にて手を負りつれとも、そこ

をはつさず被相閉目り、於彼城殿同四度、馬越被召崩

りへ共、大口之城持こたへ、求广衆三百程入番仕り、

其時大口之地頭菱刈大膳殿市山之城市來・伊集院・田
 布施・川邊衆御番難成之由被申ニ付、武藏守御番可仕
 之由於馬越 伯圍様以御意御番仕、其刻於蒲生知行
 被下り、大口御手ニ参りハ、武藏守ニ地頭可被仰付之
 由 御定御座り、以其首尾多年地頭被相勤り、

一軍為御談合馬越より市山(高津忠長)に紹益御若衆之時肝付彈正殿

以同心御出り、其晚小苗代之葉師へ被為参り、武藏も
 同道申り處ニ大口方多勢打出、小苗代原にていからみ
 始市山被退入り、武藏跡を閉目見申りへハ南方衆合戦
 場を被取居り、爰にてハ合戦罷成間敷り、罷通と申り
 る、二的場たけをと市山の方ニ退こたへり、敵如雲霞
 掛け、久保名字之披官彦人側居り、某むかひ合敵に指
 合鑓合り處に、後より求摩(マヤ)之足輕遣り、竹添丹後と申
 者左の脇を鑓にて深くとつきりを披官見付、坂方下ニ
 引おろしりニ鑓にとりはなれ、そのまま刀を寝ながら
 めき敵に指合、其坂を下、鑓ニ打からミ打からみつゝ
 ミを退とりり、其中ニ鑓疵計六ヶ所蒙、漸味方のこた
 へられり外たれ迄退入其場を遁り(遁下候てトモ)、城下にて求廣衆三
 人討取、彦人ハ東藤左衛門と申覺有武士也、又上之原
 と申所にて二人以上五人敵打取、川畑甲斐彦人見次、

拙齋こしに鑓を被合り、

一平出水御番被召置り處ニ大口方通路を懸切りニ付、平
 出水及難儀り時分、肝付彈正殿武藏羽月に被召置り、
 幾度も大口方かけつめ申ニ付兩人以談合御人数を申請

伏草仕り、其鈎手ニハ前中書其外羽月・白木・川内ニ
 伏入り、大口方然々人数不出り付るさきちんに番衆罷

居り、此方方鉄炮を打懸させりへハ大口之城方多人數

如雲霞打出、鈎手之中書ニ掛合、とかみか尾(鳥地)の西之方

に掛上り、中書御手之衆及難儀り時分、惣伏草起り
 とかみか尾の麓を掛切り、夫より敵残すことなく討取、

大口御手に入、但卯之年ニ七拾九年ニ成、

一肥後(宝川内、肥後・葦北郡)ほうの川内城、大口に指向水俣之行難仕り間、か
 の城をしのはせり、此由達 上聞平田又次郎殿為御使

御遣り、拙齋打立申、たゝちり間、彼平田殿一番衆

ニ可罷成之由被申り、御使之儀り間、御無用之由被申
 りへ共、頻被申り間、刑部太輔同心申、平田殿於城中

戦死り、其時刑部太輔鑓始仕、手をくたきり、忍衆刑

部太輔・早水金右衛門・山下伊賀又本村十介・蘭田掃
 部此兩人ハ戦死、案内者山下早左衛門三夜めに切とり

り、地頭東名字合戦仕始、何被存りか被屈り、天正九(辛巳)

也
年五月十五日、

一 義虎(薩州)と天草殿弓筋依無盡期、彼和平を可取成之由、御

屋形椽被仰出、為御使殿若寺之別當・武藏出水へ罷越(義久)

無事申なし、其刻天草之来迎寺と申僧大口滯留、

其僧を以天草をからくり付、豊後之屋形宗鱒行儀惡

敷外ニ付るは天下之衆心底相替由承、其通達 上聞、

鎌田寛栖致談合、天草殿・上津良殿・志岐殿・大矢野

殿からくり付、御當家ニ無別儀御奉公可申之由申定、

其刻出水滯留仕、義虎を發句可仕之由依被仰、敵調伏

之心に
むかふかたきハなく霞む海邊かな 拙齋

一 其後城殿をからくり始之事、松原式部左衛門と申者、

吉田洞庵まで蜜々ニ申遣、洞庵以納得城殿被申、凡

納得之由趣 上様聞召、寛栖(鎌田)・抱節(伊集院)・拙齋為御使熊本

へ罷越、矢崎之城を詰崩、此働ニ宇都殿人数を被指出、

其節、御當家ニ御奉公落着、矢崎落城天正八年十月

十五日か、

一 其後熊本合志をからくり、然々無合点之三人

城殿遂談合、合志働外、如雲霞人数指出、

過分ニ敵打取、合志殿役人大津源左衛門と申者抱節

被打、抱節も深手被負、其後又肥後表に前吉利下(忠)

総殿・伊集院美作殿・拙齋罷越、肥後日比良と申城し

のはせ、四夜めに人数催切取、其次日安樂之城をも

捨、高瀬之指向、有馬殿・龍造寺殿取合、有

馬殿及一大事、為其見次諸軍御遣、折節拙齋當病

ニ息刑部大輔罷渡、有馬於深江戦死、但歳三拾、天

正十一年六月十三日、今年迄六十三年ニ罷成、其次

之年有馬に諸軍渡海、其御大將前中書・鎌田雲州・

拙齋其外曆、渡海、其年八甲申三月廿四日ニ龍造寺

軍衆六萬程押寄、味方ハわつか三千程と申、至雉

兵迄海賊之存切たるゆへか肥前衆癩北仕、右廿四日

随分手をくたき軍勞仕、大口衆以一味太刀下に名有敵

三十六人討留、其太刀始者親弥(忠)太右衛門仕、大口

衆白坂駿河入道別る鍵をつかれ、戦場ニ武藏戦場と

札を立、若疑人於有之ハ可承由書付、共、点を打

人無、隆信格護之城其日之討勝落、

一、森山 一、三重城 一、大野 一、平(多比良)

一、かうしろ 一、いふく

一 肥後薩摩衆打入り刻、合志殿・隈部殿・山鹿殿・宇

動殿同前ニ被申入り、直ニ高瀬^ニ

武庫様諸軍御供申被打入り、其御滞留中^(白岡野殿)こうすまのと

の召崩候^ル小代殿・三池殿・大野殿・大津山殿・和仁

殿・邊春殿残無人御奉公之通被申、上田嶋殿・鹿子木

殿・木山殿・東郷衆三十六人同前、

一横嶋ニ加藤上野と申者さしこたへ居^レを拙齋なため手

に付、始大口召烈帰^リ、夫より肥後之内御手ニ不参^ト

云人なし、

一阿蘇・御船御手に不参^リ間、花山と云陳を相かこみ御

番被召置^リ処ニ油断見及、御船衆相働仕仕崩^リ、其時

鎌田左京殿戦死、

一天正十三年乙酉薩摩衆隈庄被相働、敵式百被打取^リ、

其脇かたし田^(堅志巴)・御船・隈庄三ヶ所召崩、肥後一国内

残無所御手ニ入り、

一酉年 肥後之内高森、豊後ニ申合野心相知、彼人質取

ニ相良新右衛門殿・阿蘇殿・役人仁田水左衛門指越^リ

處、人質をとりそこなはれ、仁田水ハ高森ニ相とらは

れ、相良新右衛門殿ハ漸被遁^リ、夫より甲斐親乗・満

永宗甫心替^(久巻)ニ津もりの城十二月十五日ニ被責落^リ、

伊集院肥前殿雖為地頭留主にて被遁^リ、右之様子大口

ニ十二月申来^リ、明ル年正月七日ニ大口を立、同九日

ニ御船ニ越着、夫より方々^ニからくり遣^リ市来下

総・拙齋悴者・立本玄蕃、坂^(坂)なしには拙齋悴者兩人遣、

矢邊にハ新納四郎左衛門・大口衆有村隼人・蘭田丹

後、か様成衆を遣、野心之衆を皆々成敗仕、同正月廿

三日ニ高森可仕崩日取仕、各被申^リ者 伯圍様御忌日

ニ^ハ間、如何あるへき哉之由^リ、拙齋申^リ者

伯圍様も軍神ニ^ハ御座^リ間、御内證ニあふへきと申、

夫より皆々以同心高森御手に入り、但天正十四年正月

廿三日責崩、夫より又豊後ニ先入田をからくり^(丙戌也)に仙鏡

と申山伏を以心見^リ、其後御船之地下人勘丞と申者拙

齋披官中馬源丞指越、此時互ニ状を取替、其後吉良甲

斐・河南勘解由と申人使ニ八代迄被上^リ、惟新様^(義弘)ニ此

由申上^リへ者御見参^リ、拙齋取成^リ、夫より志賀之道

易をからくり、其後栖本右京・中馬源丞、彼方方ハ大

塚右馬助・新野新助為使罷出^リ、其以後 惟新様以御

意野村与三右衛門・拙齋披官尾崎彦兵衛・中馬源丞三

人志賀之城に遺針を納申^リ、

一千斛殿^(備石秀久)・長曾我部殿豊後ニ天正十四年八月十二日下着

留守ニ 惟新様豊後ニ御入り、拙齋事ハ筋氣出合、於限附(附)誕生仕、豊後口ニハ遅参りゆへ然々不存り、

一天正十五年三月十五日府内御引陳、同四月五日迄北里滞留仕中ニ豊後衆坂なしに陳を取付難成り由聞得り

条、必見次可申之旨拙齋披官田中内藏之丞と申者を以夜中ニ陳中をしのみ通申遣り、為其首尾豊後陳宮之路

と申を明ほのに相掛暫合戦仕り、町田出羽殿同道り、伊集院元巢談合仕武略にて猛勢城を無事切崩り坂なしの城に参、なみのを下、敵過分ニ切捨り、柘山權左

衛門殿城に御座り、又求广衆に犬童本、實カ之父子・稻留將監義作・休慈などあり、拙齋坂なしを立、夫より如合志罷掃御

船参、八代関之城ニ致滞留、雖敵行相待り、京衆遅延(久夜)り間、谷山之城を打廻見申り処ニ松浦筑前相籠り、天

正十五年丁亥四月十三日ニ、足輕衆少々遣無事追拂、松浦素山に逃入り、又尾牟田と云所に肥前衆陳を取、

元巢致談合彼陳を切崩り関之如城参、二三日滞留仕、桂山城殿同道申候、八代之退不明口者カ就難成、同四月十七日

ニ地下之侍之子共花見に事よせ人質に取、同四月十八日ニ八代を立、其日求广(阿世知)越着、あせちより人質帰、

心易退り、日向口之御行無然々之由中途にて承驚り、

一求广於人吉深水致作病、被罷出間敷と聞得り間、拙齋人数三百程召烈人吉之城参、深水よひ出、手を取替求

广川之邊まで同心仕、人数川を渡り互致暇乞、四月廿一日に大口参着り、

一豊後之内ほうか島之扱りてふなか比良、是者有村隼人忍り、其時小嶋刑部左衛門戦死、

一豊後之内權現城、同城ケ尾なめしの城、此城にハ拙齋不参り、親弥太右衛門為代遣、平田豊前殿、兩人以粉

骨被切取り、一日州高城ニ豊後衆乘陣、天正六年戊寅十月廿日戊戌之日着陳、然處此陳敗北する事同十一月十一日二日此兩

日ニ被討果早、一大正九年辛巳八月八日ニ大口を

御屋形様 御出張、諸軍其日早朝より打立りる明ル同十九日ニ庚戌之日芦北之内水俣御着陣也、惣陳者八景

ケ尾 御大將 兵庫頭殿 御老中平田美濃守殿 上井(觀悲)伊勢守殿 本田下野守殿、又一陳せにかめか尾御大將

右馬頭殿 御談合衆川上三河守殿 新納武藏守、出水口之陳井川比良御大將薩州 御談合衆喜入攝津守季

久・上原長門殿、

御屋形様ハ大口之内小川内村を為御陳所、たくみか尾より被成御下知、老中伊集院右衛門大夫殿御供之後、出水陳乘陳ニ目出度、(忠棟)北御成就也、又為往来隈之牟禮をも御陳被取、其後詰陳ニ輕石か尾を被為取、間垣二重敵城渡事、同九月廿六日丁亥之日水俣始として津奈木之城・湯之浦之城・佐敷之城御手ニ入也、市野瀬ハ火を掛退、以上五ヶ所御手ニ參、日数以上三十八日ニ御成就、隈之牟禮は、せにかめか尾之人數其儘乘陳、八景か尾之御人數は、せにかめか尾に乘陳、輕石か尾の御陳大將樺山殿、談合衆伊集院下野殿、(久也)鎌田出雲殿、其時之軍役川田駿河殿、(義明)新納刑部太輔被仰付也、

- 一 龍伯様御感状六ツ并御書七ツ
- 一 久保様御書四ツ
- 一 一家久様御感状五ツ并御書拾
- 一 惟新様御書拾五
- 一 関白秀吉様御朱印二ツ

一 秀吉公當國に御下向之刻、從川内曾木御着、得共、大口御通之儀難成、必可討取覺悟之處、御屋形様御人質被出、其上於川内泰平寺御指出之由相聞得、武藏守曾木

之御陳場に指出致御目見得、於其座御長刀一振、御道服致拜領仕合能御暇仕、如肥後御通之刻又、罷出、其刻御陳扇拜領仕、御下向之年亥之五月ニ、(天正十五年丁亥也)御外、拙齋為人質親、(忠元、忠光)弥太右衛門致在京、為其替次郎兵衛上落、其後拙齋弟五郎左衛門上落、又次郎兵衛罷登、其後拙齋三年在京也、中に入質之御佗相濟、(忠)十七年人質被召置、

- 一 御公家衆・諸國御大名衆御狀數多有、
- 一 拙齋八十五歳ニ死、(庚戌也)

但慶長拾五年十二月三日

右者拙齋軍旁相知、通書記令進献、此外ニ及可有之、得共、為存者共も于今無之故記申儀難成、以上、

年号月日不相知所多、有之、為存人及無御座、
正保二乙酉 卯月廿四日 新納加賀守

21 御文庫廿番箱四拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

一 書申入り、仍去廿三日若君様大納言ニ被為成、左様之為御祝儀今日 御兩殿様被成御登城、御進物者御馬

代・狸々皮二十間 若君様へ御進上にてり、存之外御祝物輕御座り、先々御祝儀相濟目出度奉存り、来ル廿八日九日於 御城御能御座り由り、此方御暇之儀も程御座有間敷と存事り、猶追る御吉左右可申入候、恐惶謹言、

朱力キ
正保二年
卯月廿六日

新納右衛門佐
久詮判
北郷佐渡守
久加判

嶋津圖書頭様
川上因幡守様
顯娃左馬頭様
山田民部少輔様

人々御中

封面略左ノ如シ
酉ノ四月廿六日ニ江戸打立、同五月廿一日之晚ニ酒生右馬助・肥後宗兵衛被持下候、
一若君様大納言ニ被為成候由候、右御祝儀ニ付御而殿様御登城之御進物之儀御座候、

22 御文庫拾一番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

今度就 大納言様御任官之御祝儀明日御能被 仰付之間、可致見物之旨 上意り、被存其趣五時已前登 城

尤り、恐々謹言、

朱力キ
正保二年 四月廿八日

阿部對馬守 重次判
阿部豊後守 忠秋判
松平伊豆守 信綱判
松平薩摩守殿

松平薩广守殿

阿部對馬守 重次

23 明十七日紅葉山江可被成御社參之旨被 仰出り、被得其意四時已前可有參上候、恐々謹言、
年間可追考

五月十六日

重次判

24 御文庫廿番箱四拾二卷中 光久公御譜中ニアリ

猶々我々事も京大坂替合ニ付、京都ニ兩人ともニ罷居御状も彼地ニ有受取り、如大坂之持下直ニ御奉行へ先月晦日之晚ニ持參仕り、江戸へも御状之趣飛脚

を以監物前方可被申上通京都へ申上せり、是又為御

心得り、爰元別条無御座り間、可易御心り、以上、

卯月十八日之御状同月晦日之朝五ツ時ニ京都ニ槌相届拜見仕り、則大坂町御奉行曾我丹波守殿平左衛門持参仕、

家老衆宮川甚五兵衛殿と申人を以我々へ被下り御状差上

申り、丹波守殿被仰り者、為入御念之様子ニ御座り、江

戸へ次飛脚之次手ニ御奉行衆へ可被差上之山被仰、其状

ハ丹波守殿御手前ニ被召置り、為御心得申上り、随ひ者

若君様先月廿三日ニ御位ニ御付為被成由大坂町御奉行御

屋敷にて承り、家中衆方御位之様子書立預りり間、為可

懸御目写進上申り、定む殿様御暇も急度出可申と存事

ニり、江戸方兎角之儀未申来り、爰元へ相知申り者早速

御注進可申上り、猶奉期後音時候、恐惶謹言、

永力キ
正休二年 五月三日

土持平左衛門尉
綱辰判

比志嶋 監物
範友判ナシ

川 因幡守様

顚 左馬頭様

山 民部少輔様

参 尊報

25 御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

其元為御見廻能令啓り、先以薩戸守殿於江戸御堅固ニ在

府被成珍重ニ存り、其地御留守中弥別条無之り哉承度存

り、先度者早々預御飛札本望之至り、我等儀去三月上旬

ニ當地へ致歸所りへ其何角と取紛以書状も不申通無音之

至り、然者吳國舟相渡時分ニり、自然かりうた舟御國中

へ致着来りハ、從公儀被 仰出りニ無相違様ニ急度仕置

被仰付長崎表へ可被送遣り、此方へも可有御左右り、薩

摩守殿江戸ニ御座りる氣遣ニ被思召りつる間、万事御油

断有間敷り、随ひ琉球へ大明國より去正月勅使到来之様

ニ大坂從御奉行中被仰越り、何様之儀ニ信使参着り哉

承度存り、若宣旨之写など参りハ、可被懸御意り、大明

國一兩年以來乱入り様ニ相聞り、其子細定む從琉球可申

来り間、一々ニ懇ニ御報ニ可被仰聞り、爰元相替儀無之

り、可御心安り、猶期後音之節り、恐々、

猶々於江戸 若君様去ル廿三日ニ

御官位ニ被為昇之由承り、定む諸大名中御祝儀先月

中ニ相濟可申と存り、左りハ、薩摩守殿も當月中ニ

老御暇可被為進と存り、其内萬事無御油断仕置可被

仰付外、我等儀長崎へ自然かりうた舟致着岸外者、

出船可申覚悟ニ外、無左外へハ罷越間敷外、将又長

崎ニ家来付置申外処ニ預御飛札外由申越外、誠ニ入

御念外儀令祝着外、以上、

朱力キ 正保二年 五月七日

松平隠岐守

嶋津彈正大弼殿

嶋津圖書頭殿

山田民部少輔殿

川上因幡守殿

穎娃左馬頭殿

末紙ニ 五人宛略ス

写

松 隠岐守

定行

26 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

(親方朝季)

欽捧愚翰候、抑去歲 大樹君為世家之御祝言國頭差上候

處、當初夏之比如當邦令帰帆、則從兩 尊君様拜領物品

々殊更 光久尊公之御書禮以致拜受感戴無極外、仍使者

東関之江府に被為 召成、俯奉拜 大樹君御前之仕合無

残所、御機嫌不大形之旨恐悦不少候、剩到于拙身賜白銀・

蚕綿、就中 尊墨到来辱奉薰誦候、使者到其從僕、迄方

物頂戴過當之至、誠以琉國之誉多幸々、且復供奉 尊

公日光山參詣之旨弥以冥加不輕之段、畢竟依 尊公之御

威光如斯之 御高恩不淺儀欲奉述謝語者不違毛拳致省略

候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ 正保二年 五月九日

琉球國司

尚質判

進上 光久尊公

27. 御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

鹿子嶋城海手之石垣破損付る高三間半、長五百間程之所

被築出之度之由繪圖之通達 上聞候之処、普請可申付旨

被 仰出外、将又雨之方船入之掘埋外付る、被浚度外由

得其意外、是又可普請候、恐々謹言、

正保二西 五月廿三日

阿部豊後守

忠秋判

御譜ニハ朱力キニテ
正保二年トアリ

阿部對馬守

重次判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

御文庫廿番箱四拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以普請場之繪圖公儀へ被指出外写進入申外、為御心得外、以上、

一書令申外、仍其元濱ニ築出之儀、南林寺之後川堀之儀、公儀へ被仰上外處、御免之被為成 御奉書外条、写此度指下申外、早々普請被仰付外尤外、恐惶謹言、

朱力キ
正保二年 五月廿六日

新納右衛門佐
久詮判
北郷佐渡守
久加判

山田民部少輔様
顯姪左馬頭様
川上因幡守様
嶋津圖書頭様
人々御中

封面略左ノ如シ

正保二後五月十六日御道具衆二人築出御普請御免之由候ニ付、御奉書之写同前ニ參候事、

御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

卷 1
先刻者御使者并御國本之粟守壹老ツ被懸御意、寔以御懇

意之段奉存外、其以後者御見廻も不申上御無音令迷惑

外、何表以面上御礼可申上外、恐惶謹言、

朱力キ
正保二年 潤五月廿日

(元吉丸)
(花押 No.1)

松平薩摩守様

人々御中

水野藤右衛門

本マ、
吉

綱久公御譜中

綱久
女子三人
久定北郷久直後嗣
忠長

幸壽丸 攝津介 外記

正保二年乙酉六月三日誕生母家之女房、
初連三續喜入家、後依三太守光久之命、領三兄北郷久
定遺跡、改三北郷一胃三島津之號、

御文庫廿三番箱廿一卷中 御譜中ニハ無之

覚

一御暇之物沙汰無之外事、

一節、上使御給之事、

一きりしたん宗改之儀、長崎御奉行衆・高力攝津守殿へ

可被承合由嶋彈正殿へ可申下旨 御意にて外事、

以上

七月十三日

右者正保二年八月十二日本田新右衛門尉殿被持下候御条書之

写也、

32

御文庫廿三番箱廿一卷中 光久公御譜中ニ在リ

御案文

以飛札令啓入り、然者長崎表へ上使御下ニ付、國許家老

共方為御見廻使可致進入之由申付り故、使者差越申り処、

於御方遇難風舟損、其使相果りニ付、相残り者共へ別る

被添御心、萬事被仰付罷歸り由、留守居之者共より申越

り、乍早晚御懇切之至誠以忝存り、私儀當年老緩くと致

在江戸り間、来春於御參府老可得御意り、恐惶謹言、

朱力半

正保二年 八月廿三日

高力攝津守様

人々御中

33

御文庫廿番箱四拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

追り申り、長崎へ為 上使新見七右衛門尉殿御下ニ

付、為御見廻新納刑部(忠清カ)太輔被差越り之処、爰許方之

使遅参り之故咎ニ不被合り、乍去長崎之御奉行衆被

聞召置之由御書面之通達 上聞り、

一今度松平(定行)隠岐守様長崎へ御越りハ、御用をも為可被

達、八木舟被差上り、其上乗野村盛右衛門被仰付り処、

遇難風被相果り之由咲止之至り、

一野村七兵衛儀表上使嶋原へ御出之由りて被差越り之

処、於彼表右之大風ニ被相果之由不及是非仕合ニり、

兩条迄 上聞り之処、高力攝津守殿より別る御懇ニ被

仰付之由り間、御礼状被進り、早々御使被仰付肝要存

り、即御案紙相添申り、

一爰許より御局被致帰國り刻、於津和(瀬戸内、津和地懸)之嶋乗舟破損り之

処、自隠州様別る被入御念被仰付之由り間、即此早打

を以松山へ御状被進り、為御心得申入り、恐惶謹言、

朱力半 正保二年 八月廿四日 新納右衛門佐

久詮判

北郷佐渡守

久加判

山田民部少輔様

穎娃左馬頭様

川上因幡守様

嶋津圖書頭様

人々御中

末ニアリ、封面略ス

正保二ノ八月廿四日之状同九月十三日ノ朝道具衆持下、

一長崎へ之上使新見七右衛門殿へ新納刑部太輔殿不参合御返事、

一野村清右衛門・同名七兵衛長崎破舟ニテ死去之事、付高力殿へ御使者被進御礼之事、

一御局津和ニテ舟船破損ニ付、隠岐守殿より御懸旨為御礼彼飛脚松山へ被遣候事、

34 光久公御譜中

於八重山嶋・都之嶋黒木并桑之木其外用木、從此方被罷渡り衆、猥ニ被伐取之由其聞得り、不可然り、向後者曾亦不伐取様ニ堅固ニ可被仰渡り、右兩嶋よりの船此地ニ上着之時分可被相改り間、其心得を以可被仰遣り、此等之旨御番手之衆へ表申越り、聊油断有間敷り、以上、

正保二年九月五日

山田民部少輔

穎娃左馬頭

川上因幡守

阿多内膳正殿

嶋津圖書頭

35 光久公御譜中

正文在文庫

為重陽之祝詞小袖五到来、恰思召候、猶洒井讚岐守可述

外也、

正保二年 九月七日

墨印

薩广侍従とのへ

36 光久公御譜中

天下御禁止

一火事喧嘩之場ハ参り事、

一刀素式尺八寸以上、中脇差者一尺八寸以上之事、

付 色鞆銀之角鐔之事、

一縷子・縷珍・天鵝絨・段子之類、步行若黨、或ゑり袖

縁、或袴ニ仕り事、

一右同断之者頭なてつけ、

付 後下こさかやきいたす事、

一右同断之者上鬚ひねる事、

付下鬚立事、

正保二年九月九日

37 光久公御譜中

一書申進り、然者長崎へ節々人を差越様子可被承合り、
弥きりしたん宗之儀自然はつれに可有之儀もハハん間、
無汕断見立聞立り様被入念專要り、随而一向宗之儀従前
く御法度にてり、此比ちと右之宗躰有之由風説共り、是
又彌可被申付り、大略物詣共仕りもの内ニ一向宗耳有
之由申り、左様之儀別る相糺りて可然り、為其如此り、
謹言、

光久カキ御在判
正保二年 九月廿五日

鳴津彈正久大弼殿

33 御文庫廿番箱四拾二卷中

たぢ

琉球供衆

國頭按司 衆物

琉球供衆

たぢ

琉球衆三十人

乗馬

琉球供衆

琉球供衆

陸衆

岩城五兵衛

三原喜太郎
鏑額二左衛門尉
見立スリキレ佐五左衛門尉

五代三左衛門

樽津安藝守 山田民部少輔 鎌田源左衛門 野村大學助 肥後長左衛門 黒田三左衛門

平田藤右衛門尉 平山久右衛門 上村茂兵衛 矢野大右衛門尉 有川五左衛門 歴應 小笠原 恕心

以上

追申外、今月四日津田平右衛門尉殿為 上使御鷹之鬮
被成御拜領外、目出度儀共外、可為御同懷外、將又御犬
追物稽古之儀弥以りちぎニ可相守古法之由、節々可申下
由被 仰出外、其御心得尤外、恐惶謹言、

十月七日

新納右衛門佐

久詮判ナシ

北郷佐渡守

久加判

嶋津圖書頭様

川上因幡守様

穎娃左馬頭様

山田民部少輔様

人々御中

封面上左之如シ、名前略

正保二年十月七日之状十月廿九日ニ鎌田龍右衛門被持下候、

一輪御拜領之由候、

一大追物弥りちぎニ古法之由被仰付候、

御道具衆三人

与力小荷駄衆 又小者 小者奉行権原允藤左衛門

寺師傅内左衛門

御道具衆三人

跡ざらへ花田権兵衛

須田十郎兵衛

(挿入)
十六

正保二年十月十三日御条書書拔

一 古来之様ニ少ク之科分ニ老百日番・堀ほり普請等其上
 ニテ科重在之ものに老寺領申付、其内ニさゝ板を取せ
 可被申事、

付板之数老科ニよりテ可被申付事、

十七
 覚

一 御借銀方之事、

一 諸役人之主取上聞キを被仕ハ善惡之可有吟味事、

一 御藏入之吟味可被申事、并代官衆之上を被承差引可被
 申事、

一 諸所之立狩倉今度明ハ事、

但(櫻島)向之島・師子島(獅殿)・佐多・春山・平川・串木野・あ

いかう此七ヶ所定立たるへき事、

一 百姓之移替、道之島之荒地、又桑・柘・茶・漆・楮之
 類百姓いたみハ半様ニ可植立事、

一 御藏入之仕登、其外御為之方仕繰之事、

一 一切米取之衆惣別被召上、夫々の申分ニより分量可相定
 事、

一 鹿兒島町中之ものくたひれさるよふニ可被申付事、

一 諸役人扶持方多少之吟味之事、

一 在江戸在京琉球衆賦飯米多少吟味之事、

一 知行高式百石取之衆御上落御供之時老可為乘馬事、

一 上町致衰微明ケのき(倉)間、能くつろく程に不被申付

外ハ、在番間敷(倉)間、上町之もの共町役差免あるへく

外、其分ニても在付事成間敷申外ハ、其外にも一二ヶ

条も町役も差置外ハ可然事、

一 町奉行他國之出入之札被出外間、口上ニテ申外ことく

町奉行ハ相談外ハ其覚悟尤外事、

付下町役分申付事、

一 御藏入置米いかほとにて成合外通國本にて代官衆へ相

談あるへき事、

一 分國中にある物を他國・京・大坂より執よせ外儀法度

可被申付事、

一 於町魚之直付可為無用、其外喰物之直付におゐてハ公

義(ま)かもひ有間敷事、

一 鹿兒島之魚屋・八百屋申付儀可為無用事、

一 御法事大振廻などの時老御藏入衆内ニ致覚悟、其時節

ニ差出し可相調事、

付遠方之諸所に申付儀難成由申外ハ、納物其所ニ

ゐかるくなし可調由才覚可被申付事、此儀老代官

衆内々以分別被申付置、代官校量次第可申よし可
被申渡り、

一 惣別物奉行所も萬事御藏入之儀ニ付被申越りハ、代
官衆内々申付りゝ其用意いたし可相調由可申渡事、

一 諸士之知行可差上儀爰許にて出合り得共、於国元相談
りゝ諸士衆尤被存於被申出者其通ニ可被申付事、

一 北郷佐渡守所に御藏入代官衆夜々呼寄、作職之吟味被
申りハ、可然り、役人衆吟味之様子ハ百姓共は前方如
被仰付、納を不仕前ニ物詣行脚のもの百姓共傍輩親類

中之互之音信不申様弥堅可被申付り、又致未進氣任於
有之ハ代官衆被申出、佐渡守被承りゝ、代官衆方すま

き可被申付り、又作之隙ニ者何ぞ御用等を可被申付り、
左様成ニ油断仕代官者役を可被替事、

一 代官衆所之百姓なとに鼻肩かちにて御用馬之儀をも不
申付、大かたいたし進物なと取りゝか、^{本マ}へふり致り人

りハ、見立聞立役を可被替り、此方へ不及被得御意、
其方分別にて可被申付り事、

一 代官衆取納ニ被廻り時、所之百姓共を私之用意ニつか
ひ、或者肴・野菜・薪を取り儀かたく法度可被申事、

一 山奉行衆私之用所を被申付儀かたく法度可被申付、

但山見廻ニ罷越り時分、所ニぬ之馳走進物まで被請
り儀、彌法度可被申付事、

一 殿役奉行諸所廻之時分、所ニての馳走又進物請ましき
由可被申付り事、

一 町奉行町之ものより或ハ銀錢其外之進物受間敷、又不
嫌夜白町奉行所へ入込酒もりなといたし、非なる口事

を申立度と存頼り儀、其外謀略を廻し色々ニ取入たて
を申、或ハ町屋は振舞ニよひり儀堅法度に町奉行に可
被申付り事、

右者条書之通、佐渡守己下知、^{以之}萬事可被申付り間、御
藏方其外諸役人、佐渡守に無油断相尋致相談可調者

也、
以上

正保二年十月十四日
(以上挿入)

41 新納忠秀譜中

正保二年乙酉十月

公在江戸、以御家老北郷佐渡守久加為御物奉行、使総督
諸有司事 大史平西正徳云、今、御勝手方掛始于此、而及伊地知李右衛門重政之國

行事 此月十五日發守戸、十一月至廳府、乃十二月使重政命伊地知志賀丞重利・

川上後藤兵衛(マ)、鎌田宇兵衛政親等、各為横目、巡察

郡郷置之横目、而使忠秀領其事、蓋居横目頭故也、後十餘年明曆

中入來院石見守重頼・山田弥九郎有盛以横目頭領火消方云歷代忠秀等者乎、

42 光久公御譜中

覚

今度諸役人之主執被仰付外間、不依何篇之儀役人之上を不致遠慮吟味之段無緩疎様可有差引、為其如斯外、以上、

朱加平 正保二年酉ノ十月十四日 光久御在判

北郷佐渡守殿

43 御文庫廿三番箱廿一卷中

覚

吳国船令來朝、もし人なと入外節為御仕置、鍋嶋信濃守・

松平右衛門佐替(忠之)、九州ニ被差置外、左様之刻者松平隱

岐守其所に相越、計本マ可申付之旨最前より被仰出外、其

上にも人入外俄之時者、近所ニ付高力攝津守并長崎

之奉行入差圖次第人数を出外様にと、是又從此以前被仰

出、今度又右之内へ日根野織部正被召加之外間、向後者

高力攝津守・日根野織部正長崎之奉行人可被任差圖者也、

十月廿一日

44 豊州家豊前守久守譜中

兵庫頭義弘主有下告豊後守久賀之命「曰、對馬守久清者素生モト三松元平山之家ニ而嘗事三義弘一矣、是以自三朝鮮國渡

楫之始ニ至三濃州關之原軍亂之時ニ不離三膝下、晝夜勲勞

異ニ于他一也、久賀之元祖季久庶子後裔右馬頭久武戰死而

未レ有レニ其後者一有レ年レ於茲矣、使ニ久清為レ後嗣者可

乎、嚴命敢不レ可レ遁、於レ茲乎久賀附ニ與平山氏之系圖一

為久武之後継ニ者也、

非ニ島津氏支流ニ而稱レ平山者往々其數多矣、知ニ姓氏之同

異一者或少矣、是以為レ決ニ其疑似ニ左近將監久守裁レ證書

昇レ久清記レ左方、

45 案文久守有之

證文

高祖嶋津豊後守季久、其子修理亮忠廉之弟忠康号平山、其裔五代右馬頭久武於日州松山之城永祿二年四月十六日

弟次郎四郎久次与俱為肝付之凶徒被屠殺、無嗣子而經年、故嶋津兵庫頭義弘公憂無其後、則命松本主殿助令續平山之統事、亡父豊前守久嘉使本マ、會我聞其由來也、且今雖多称平山者、非忠康之裔、聊以妄不可免許諱字并平山之称号之狀如件、

正保二年乙酉十一月二日

嶋津左近將監

久守在判

平山對馬入道殿

此同案平山氏系圖對馬守久清譜中ニ載セタリ、

46 對馬守久清譜中如左

人皇第八孝元天皇支流之苗裔石清水為別當、其子石清水了清稱平山法印、推所ニ其由來一則大隅州始羅郡為男山八幡神領、故遠下ニ于當郡而留滯之際、帖佐三十町村中有池、一夜之間涌ニ出一山於池中、了清為奇異之思、勸請於熊野權現、而號ニ之於平山權現、其後構ニ城於帖佐而名平山城、于時八流之幡降下仍改平山權現、稱ニ新正八幡號ニ寺於八流寺也、久清者了清之苗裔、雖レ然候ニ義弘主之膝下、晝夜勲勞敢不怠慢好ニ其忠節也、命ニ前豊前守久賀公ニ令レ續ニ平山右

馬頭久武之後、是又島津氏之支流也、故久賀昇ニ久武之系圖ニ云々、

47 忠將一流系圖中

玄蕃頭忠紀之子

久治

初久憲 萬千代丸 美作 玄蕃

正保二年乙酉十一月二日誕生、母桂山城守忠能女、

48 圖書頭久通譜中

正保二年乙酉十一月有ニ太守之命ニ曰、速宜レ參ニ向於江戶、故十二月下旬發ニ於鹿島逾ニ三年於船中、翌年二月十九日到ニ于江戶也、四月十五日請ニ待ニ光久主ニ久平續久主於久通之旅館、而述ニ亡父之所レ續ニ家業之祝儀、以獻ニ道永正則之寶刀於ニ光久主ニ、獻ニ備前兼光脇指於ニ久平主ニ矣、同廿六日 太守辭レ江戶赴レ領國、久通又有ニ宅地警衛之命ニ而在レ關東也、

49 北郷久加譜中

正文新納仁右衛門

猶(前カ)手所之様も中神内藏允カ細々申越カ、涯分御養

生肝要カ、

正保二年十一月賜レ暇歸國、此時奉レ命為御物奉行諸役之總官也、頂戴御條書、此行北郷吉左衛門忠清從レ之、

忠將一流系圖

守右衛門尉彰久——相摸守久信
母義久公
女也

一又四郎久敏

一男一人

久章

(新藏家祖)
又助・忠清
日家久公女也

字菊千代丸 大和守

元和二年丙辰誕生、

續受祖母之遺跡居三住鷹島之宅地一矣、

正保二年乙酉十二月十一日、背三于太守二而有二遠流命一

由レ是到三于谷山清泉寺一、於レ茲乎變心、殺三戮警衛之

士數輩一、故忽不レ免レ誅戮、年三十、法號松月庭柏、

此度就嶋津大和守殿流罪、各被指越、既從一之瀬如障子川、大和殿發足之以後、相殘郎等二人被召列婦之中途、
而一人對貴所相働カ処三、組伏被刺留之由無比類儀三、
舍兄甚右殿迄者申カへ共、數ケ所刀疵之痛為可承如此、
恐々謹言、

嶋津圖書頭

十二月十四日

久通判

新納二右衛門尉殿(久)

御宿所

猶々極寒之時分カて疵も痛カハんと念遣存カ、御養生之時分書面御六ケ敷カハんなから遠方之故、以狀云々申カ、以上、

態用飛札カ、大和殿御事ニ付彼地カ被指越カ處ニ不慮ニ

出合カて數ケ所被手負カ由承驚入カ、何程手も御座カ

哉、為可承用飛札カ、乍不申疵御養生肝要カ、遠方之故

見廻不申殘多カ、其場之仕合承乍案中之儀カ、我々大慶

存カ、御面之節細々御咄可承カ、猶重カ可申入カ、恐惶

謹言、

正保二年酉

十二月十六日

新納加賀守

忠清判

新納二右衛門尉様
人々御中

53 光久公御譜中

為歳暮之祝儀小袖五重到来、悦思食候、猶酒井讃岐守可
述外也、

朱力キ
正保二年十二月廿七日

墨印

薩广侍従とのへ

54 御文庫廿番箱四拾二卷中

光久様は為年頭之御祝禮蕉布十端・焼酎一甕致進上之
候、可然様可預御披露候、恐惶謹言、

正月十一日

朝貞判

御老中

(封)

御老中

金武

朝貞

55 光久公御譜中

覚

一物頭之下知被相背間敷事、

一吳國船於来着者以計策南蠻人共陸へおろし、皆々被擲
捕、如此方可被差上り、被擲捕儀難成候者被討果、可
成程者生捕此方へ可被遣事、

付其船之雜物少も不相散様ニ念を入南蠻人同前ニ可
被差上事、

一八重山嶋陸地近邊へ南蠻人共船をかけ可罷居時分、鹿
相ニ取懸船□へ出し外ハ、手をくれニ可罷成之間、
以賢慮陸へおり外やうニ可被相計事、

一雖不新儀外きりしたん宗若嶋中へ於有之者念を入聞立
外て可有披露事、

一歴々又小者よらす濫妨狼藉押買押賣等かたく可為停
止事、

付或旅宿并隣所之墻壁菜園耕作等をあらし、或至亭
主無理非道を申懸儀堅可為禁制事、

一黒木・桑其外樹被伐取間敷事、

一酒女之戒可為肝要事、

一喧嘩口論堅可為停止事、

付私之宿遠雖有之奉行衆へ無披露被破事間敷事、
(ママ)

一不依何色武具之類琉球嶋中へ被賣渡間敷事、

付仕くりの才覚曾る被仕間敷事、

右之趣於相背者、嗣可有其沙汰者也、

正保三年二月九日

山田有部（山田有部） 山民部少輔
顯左馬頭（顯左馬頭）
北佐渡守（北佐渡守）

56

御文庫拾二番箱四拾五卷中 御譜中ニ無之

一筆令啓り、度々如被 仰出、きりしたん宗門之儀領内
入念可遂穿鑿旨 上意候、將又吳國船領分之浦於令到来
者、可被相守去酉年二月十二日奉書之趣候、万一不義之
子細有之砌、長崎奉行人に注進之儀移時刻於難義者見計
之可被申付り、雖然湊に舟を不入、沖に有之刻、卒尔取
懸事者無用り、自然人数不足りハ、是又此以前如被
仰出隣國之面々は早速人数出之様ニ被相談、無越度可被
計候、今度中國四國衆御暇之節右之通被 仰含り之間、
為御心得如此り、恐々謹言、

正保三年 戊ナルヘン 二月廿六日

阿部對馬守 重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守 信綱判

松平薩摩守殿

57

御文庫廿番箱四拾貳卷中

起請文前書之事

乍恐謹る奉言上候、我等事幼少之從時分忝被召仕、于今
御奉公仕居申り、別る御奉公申上度心中ニ雖御座り天然
無調法者之儀ニ御座り、近比不似合申上事ニ御座りへ
共、責る 御一代之御奉公可申上と此中存究り之条、此
等之旨御仕合之節可然様ニ宜預御披露事、
右之旨若偽於申上者、
牛玉神文略、

正保三曆二月吉祥日

春山西市之丞

直純判

58

御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

吳國船渡海之節り、度々如被仰出り領内弥無油断万事堅
可申付之旨

上意り、然者彼船於令到来者去年二月被存奉書之趣、可
有沙汰り、恐々謹言、

朱カキ
正保三年 三月十一日

阿部對馬守
重次判

松平伊豆守
信綱判

松平薩广守殿

御文庫廿番箱四拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々琉球よりの御返書頃相濟外、近日伊地知志广守

被罷下外間、指下可申外、^{スリキレ}中江市右衛門入道友

仙爰元へ可被召寄之由被 仰出外間、其段堅可被仰

付外、以上、

正月廿七日之御状相届外、

一伊東大和守殿家老衆使者被指越外、右之状之写槌見届

申外、巨細考彈正殿へ申入外間被聞召合、可目出度外、

此度伊東殿へ御内談之様子も別紙ニ書付箱臺老へ越申

候事、

一琉球へ渡海之船難風ニ逢土佐守殿御領分へ流着外御

馳走之由則達 上聞、御札ニ御使遣申外、可御心易事、

一正月六日ニ福州船山川へ漂来之由承届外、最早無口能

事ニ外間、御老中衆へも不被成御申候事、

一二月廿七日之御状一昨晚相届外、絵圖之儀ニ付山崎之儀節々日向四家方申来由先書ニも被仰越外、右ニ申外様ニ別紙ニ伊東殿返事老申入外間、被御覧届可目出度候事、

一御犬追も此比可被相催由御老中へも被仰外へ共未究外、殊大川内金兵衛尉殿御煩火急ニ外間、右之内ニある在之間敷外、御老病ニ憑すくなきと風説承外、為御存外、猶期後音時外、恐惶謹言、

朱カキ
正保三年 三月十五日

新納右衛門佐
久詮判

川上因幡守
久國判

嶋津圖書頭
久通判

山田民部少輔様

穎娃左馬頭様

北郷佐渡守様

人々御中

封面左之通

北郷佐渡守様

穎娃左馬頭様

山田民部少輔様

一福州舟山川へ漂着被聞召申候、
一絵圖之儀ニ付山崎之儀、伊東殿
^{スリキル}久通

一御犬追物未究申候、

御文庫廿番箱四拾二卷中

起請文前書

一琉球より御返書相濟候、近日ニ被差下候由候、
 一正保三ノ三月十五日之状、四月四日ニ御道具衆持下候、
 一伊東殿家老衆使者被差越候、右之状之写儘ニ被成見届たる由候、
 一琉球へ遊海之舟、土佐へ流着候由進
 上聞候由、

鳴津圖書頭

川上因幡守

新納右衛門佐

御文庫廿番箱四拾二卷中

起請文

今度奉受 御相傳一儀、別ゝ忝奉存外、聊以禁他言可相
 嗜外、乍勿論其様子をも仕、人ニ見せ申間敷候、右之旨
 若於偽申上考、

牛王神文略、

正保三曆三月十七日

伊勢兵部少輔 貞昭判

伊集院源介 久立判

鳴津安藝守 久雄判

光久公御譜中

末ニアリ 起請文

住倫

一奉對 御兩殿様ハ野心不忠之輩於有之考、承付次第他人
 考不及申、雖為親子兄弟最眞無偏頗言上可申上外事、

一御一代之御供可仕外事、

一無別心御奉公可申上外、

但 御前之取沙汰承外共、少も他言申間敷外事、

右之條々偽於申上考、

牛王神文略、

正保三年丙戌三月吉日

橋口主膳正

住倫判

進上 光久様

一封之朶雲投送欽披閱、先以珍重々々、抑去々年被献兩使
 之處、於關東江府御仕合無殘所、且復至于使者并僕從以
 下迄拜領物品々、誠其恐慶無所奉謝之、仍為御礼讀谷山
 去歲仲春鹿兒府迄就渡海、即自國許点使者到官領及宿老
 衆令傳音書、則被達上聞、御奉書其外各被啓回復早、今
 度點使者所及帰楫也、可為御滿達耳、將又其地仕置之儀
 金武國頭帰帆之節令一書告之處、其趣國中ハ急度被仰渡、

諸鄉諸民繕之旨尤肝要之儀猶我等足然然而已、猶讀谷山可為演說之条閣筆候、恐惶不宣、

朱力^キ
正保三年 三月十九日

薩摩守光久御判

謹上 中山王

63 光久公御譜中

態以一筆申^レ、然者異國船方之儀何篇被入念、從前方以被 仰出^レ趣、少及無由斷可被申付^レ、為其談合衆付置^レ外間、細^レ被申合^レ可然^レ、何そ急速^ニ注進入事共^レハん刻者、不移時日被致折角咎合^レ様校量肝要^レ、恐^レ謹言、

朱力^キ
正保三年 三月廿五日

光久御在判

嶋津彈^(久慶)
正大弼殿

64 光久公御譜中

夫大追物者弓馬習練之要術而所^レ不^レ可^ニ武以不^レ傳者也、光久之始祖忠久在^レ鎌倉^(熱カ)熟^ニ于此道^一、以来世々^テ踵傳^レ家而秘^レ焉、光久以為張^二行^一、以宜^レ奉^レ備^二大樹^(家光)之高覽^一、因^レ執政奉^レ伺^レ之、正保三年四月七日先招^ニ幕府之執政及旗本之大名小名於芝宅地^一、張^二行^一二組之犬追

物^一、試觀^レ之、^(セシム)兪謂希代之壯觀也矣、乃上手之射士島津

川上野久連・島津彌市郎久弘・島津主計久延・伊勢兵部

貞昭・村上^(比志)左京義時・島津^(納新)又左衛門久正・島津市正

忠弘・本田甚兵衛盛親・本田六左衛門親昌・島津^(北)又次

郎忠昭・福屋助左衛門兼全・平田豊前宗直、檢見島津^(川)

十郎左衛門久慶入道芳庵、喚次種子島伊兵衛時壽也、下

手之射騎者島津安藝久雄・島津中務久茂・島津^(伊集)源介

久立・東郷若狹昌重・和田次郎右衛門正次・二階堂城之

介信行・島津^(山)七兵衛忠昭・仁禮左近景頼・吉田長四郎

為清・本田右衛門親貞・島津^(新)近江久辰・菊池^(村田)刑部

堅經、檢見島津^(新)又左衛門久正・喚次島津^(川)左大夫久宣

也、執筆福屋伊賀、幣役慶阿彌、射手奉行土持左馬・野

津彌五左衛門也、此日所^ニ來臨^一之賓客酒井讚岐守忠勝・

阿部豊後守忠秋・阿部對馬守重次・酒井河内守忠舉・堀

田加賀守正盛・保科肥後守正之等也、其外載在^ニ左件^一、

65

正文在文庫

初日一番

四角之外鬮次第

犬追物手組之事

正保三年
卯月七日

嶋津上野介^(川上久延)

嶋津主計頭^(久延)

亮正

村上左京亮(比志高義時)

本田六左衛門尉(親昌) 三疋

嶋津又次郎(北郷忠郎) 壹疋

嶋津又左衛門尉(新納久了) 二疋

嶋津弥一郎(久忍)

嶋津十郎左衛門入道(川上久慶)

正文在文庫

初日二番

犬追物手組之事

嶋津安藝守(久雄) 二疋

和次郎右衛門尉二疋(正次)

吉田長四郎(為清)

本田右衛門佐(親貞) 壹疋

二階堂城介(信之) 壹疋

嶋津中務少輔(久茂) 壹疋

檢見

嶋津又左衛門尉

嶋津東市正(忠広)

福屋助左衛門尉(兼全) 二疋

平田豊前守(宗直)

本田甚兵衛尉(盛親) 壹疋

伊勢兵部少輔(貞昭) 壹疋

喚次

種子嶋為兵衛尉(時秀)

四角之外鬮次第

正保三年
卯月七日

嶋津源介(伊集院久立)

嶋津七兵衛尉(平山忠四)

嶋津近江守(新納久辰)

菊池刑部少輔(村田學經)

仁禮左近將監(貞題)

東郷若狹守(貞重) 二疋

喚次

嶋津左太夫(川上久喜)

福屋伊賀守

諸役者

一射手奉行

同日御客人衆

酒井讚岐守殿(忠勝)

酒井河内守殿(忠善)

松平右京大夫殿(當日御説二而)

松平和泉守殿

安藤右京進殿

京極下総守殿

吉良若狹守殿

水野備後守殿

青山大膳亮殿

久世山城守殿

井上筑後守殿

朝倉石見守殿

筒井内藏殿

松平庄左衛門尉殿

小出伊勢守殿

慶阿弥

土持左馬權頭

野津弥五左衛門尉

阿部對馬守殿(重次)

堀田加賀守殿(正盛)

井伊頼負殿(當日御説二而)

酒井日向守殿

永井信濃守殿

中川山城守殿

大澤右京亮殿

酒井修理大夫殿

永井日向守殿

中根壹岐守殿

宮城越前守殿

秋元越中守殿

板倉阿波守殿

曾我丹波守殿

石川大隅守殿

曾根源左衛門尉殿

日記

幣

伊奈半十郎殿 馬場三郎左衛門尉殿 船越三郎四郎殿

八木勘十郎殿 杉野織部佑殿 花房勘右衛門尉殿

兼松弥五左衛門尉殿 喜多見久大夫殿 蟻川喜左衛門尉殿

新見七右衛門尉殿 兼松又四郎殿 永井弥右衛門尉殿

高木筑後守殿 内藤外記殿 中山勘兵衛尉殿

山崎權八郎殿御息 諏方部源次郎殿御父子

荒木十左衛門尉殿 橋本太郎左衛門尉殿 松平監物殿

水野藤右衛門尉殿 水野甲斐守殿 有我半左衛門尉殿

鈴木喜左衛門尉殿 福田五左衛門尉殿

御見廻衆 御見廻衆

毛利甲斐守殿 松平越中守殿 松平河内守殿

松平美作守殿 松平對馬守殿 伊勢兵庫頭殿

合七拾七人 外松平伊豆守殿御差合故無御出、杉浦内藏介殿日光へ

御越へ無御出外、朽木民部少輔殿・内田信濃守殿・

小出越中守殿・齋藤攝津守殿・岡田淡路守殿御隙入へ

無御出外、五味備前守殿同前、

以上、

尚く和泉守殿鹿兒嶋へ被為越外由御大儀之至外、無
申迄外へ共、萬事無緩やうに被仰付第一外、以上、

被思召寄預書狀大慶存外、如承主膳正殿煩氣ニ御座外、

早く快氣にて満足仕外、然考馬關田(西諸眞部)と之境出入如此中被

仰付尤外由、鹿兒嶋鳴御奉行所被仰外哉、仕合存外、自

然馬關田方之仕様惡敷儀共外ハ、事六ヶ敷不罷成やう

ニ肝要存外、行司衆へも堅被仰渡尤外、猶重可申談外、

恐く謹言、

新納加賀守(忠清)判

正保三丙戌 卯月七日

川野与右衛門殿(通息)

西田和泉守殿(時通)

白坂大炊左衛門殿(尊豊)

67 加久藤變所案文

尚く申上外、定急度可被成御下向と奉待外、便之時

分ハ御状可被下外、已上、

乍幸便令啓上外、

一其御地上下共御無事ニ被成御座外由一段目出度奉存

外、爰元御宿本皆く御無事ニ御座外、就中御孫上様御

成人被遊(重)外、可御心安外、主膳正様頃ちと御氣色惡御座(題)外つれ共、大口方壽信被差越葉共被成御用、無残所御快氣(應)なる、一昨日壽信も帰宅(應)なる外、一段目出度奉存外、

一求广塚此度絵圖奉行として平田監物殿・弟子丸右京殿被成御越、求广方も被出合、前々被定置外塚目無相違、加久藤之分ハ無別儀相濟申外、是又為御存知外、

一馬關田と加久藤之塚此中無沙汰儀ヲ今度絵圖ニ付、南も北も加久藤之内ニ過分ニ押入、塚之由被申出外ニ付、西田和泉守兩行司同心ヲ以、かこしま山奉行又絵圖奉行迄申入外ハ、此度ハ先々絵圖ヲ御急(應)なる外、塚之沙汰ハ他国之出入にて無之(應)外条、静々御沙汰たるべく、先々此中格護為中核ニ仕外御狩等も可調之由、山奉行絵圖所方も被仰聞せ外、先其分(應)なる和泉も行司も罷帰外事、

一飯野塚北南為何入組も無之相濟申外、
一去年出銀如御定二月限ニ皆濟申外、
一井手川除等も如例年申付、大方首尾申外、
一求广商買人出入之儀、如此中替儀無御座外、

尚奉期後音之時外、恐惶謹言、

正保三戌 卯月八日

四人

白西川伊地知
坂田野知
尊時通重
殿通戶延

伊 左 右 様

人々御中

右伊地知左右衛門ニテ季通力先祖也、

(挿入)

(朱書)
「加世田士愛徳氏蔵」

以上

先月十一日之御日付にて江戸御奉行衆之御奉書、態以早飛脚被差下外間、相写、地頭衆へ相渡外へ共、重々申越外、弥左様之趣無油断可被申付外、去年之仰出(遠カ)ニ少も相替儀無之(遠カ)外条可被得其意外、今度御兄弟衆御順見外間、緩之所者直ニ可被仰上外、其心得尤(遠カ)ニ外、聊疎意有間敷外、恐々謹言、

正保三年

四月十六日

顯 娃 左 馬 頭

久 政 (花 押 Na.2)

嶋 津 弾 正 大 弼

久 慶 (花 押 Na.3)

伊 集 院

神 川

日置

帆之湊

吉利

永吉

伊作

田布施

阿多

加世田

小松原

小浦

片浦

諸所

噯衆中

69 光久公御譜中

正保三年四月十八日以_二上使阿部豊後守忠秋_一給_二歸國
暇_一、且所_レ恩_二惠白銀千枚・御拾百領_一、大納言家綱公
亦為_二牧野内匠頭上使_二賜_二御拾五十_一、今日_二二十六日發_レ
江府、取_二路於木曾路_一、自_レ大坂解_レ纜開帆、島津安藝
久雄從_レ焉勤_二三家老代_一、鎌田源左衛門政有副_レ之、

70

御文庫廿番箱四拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶_レ御使阿部豊後守殿御拜領物銀子千枚・御拾百、
從 若君様御拾五十、御使牧野内匠頭殿御出_レ、以
上、

急度申越_レ、然_レ今朝御暇被成御給_レ、御仕合能_レ間、
目出度奉存候、就夫御迎船之儀一刻も御急_レ、可被仰付
_レ、御油断有間敷_レ、御船路老西目可為御下向候、其御
心得_レ、彼是被仰付尤_レ、恐惶謹言、

追_レ申_レ、御下向_二付前_一被仰下_レ様ニ嶋津左近殿
為御使爰元へ参府可被申由被仰出_レ間、此旨可被仰
渡_レ、以上、

追_レ申_レ、川上因幡守御供_二の罷下_レ間、御用等之
儀被仰遣へ_レ、以上、

^{朱力キ}正保三年 卯月十八日

新納右衛門佐
久詮判

川上因幡守
久國判

嶋津圖書頭
久通判

北郷佐渡守様

穎娃左馬頭様

山田民部少輔様

人々御中

封面下ノ如シ

北郷佐渡守様

一御使阿部豊後守殿御拝領物銀子千枚 御拾百 若君様より御拾五十 御使牧野内匠頭殿御出候事、

穎娃左馬頭様

久通

山田民部少輔様

参

一御下向ニ付、前々被仰下候様ニ嶋津左近殿為御使爰元へ

参府可被申由被仰出候事、

正保三年卯月十八日之状五月三日

二飛脚持下候、

一御暇之事、一御下向ハ西目之由候事、

嶋津圖書頭

川上因幡守

新納右衛門佐

加久藤暖所案文

尚々申上り、求广表當分ハ為何事も無御座り、乍去

連々商賣ニ参りもの一人為可承合せ今日さし遣り、

何ぞ新敷儀共承付りハ、次飛脚ヲ以可申上り、已上、

(新納忠清)

急度令啓上り、仍菱刈表之衆加州老御奉行被成御當、出水表ハ大狩御座りニ付、人数被召呼昨朝大口ヲ御打立之

由相聞得申り、為何様子共爰元ハ者不相知り、此地塚目

之儀ニ付間、ちと様子被仰聞せ度存り、如御存知之當分 左右衛門留主之儀ニ付間、心遣千万ニ付、自然此表之衆 委罷在儀ニ御座りハ、前以御注進可被仰聞せり、内 々其用意可仕り、先々為御納得申上り、萬端御入魂之儀 奉頼り、恐惶、 正保三戌年也 卯月廿六日 四人 伊地知 川野 西田 也 白坂 新納刑部様 (忠秀) 人々御中 加久藤暖所案文 貴札之旨具拝見り、仍御無事ニ其許へ御参着目出度奉存 外、随而者出水表ハ大狩御座りニ付、加州様も其表之人 数被召呼昨朝御打立之由り、俄之儀ニ御座り間彼是御大 儀無申計り、然者自然此表之衆委罷立儀にてりハ、前以 御注進奉頼之由りハ、今朝刑部様迄飛札を以申上り、是 又為御存知り、將又求广へも為可承向せ一人さし遣り、 新敷儀とも御座りハ、即刻御注進可申り、又為何儀も無 之りハ、申上ましくり、此度之御狩之様子具ニ被聞召付 外ハ、ちと被仰聞せ度り、將又何比御帰宅ニありする

72

哉承度外、尚期後音外、恐惶、

正保三戊也 卯月廿六日 四人

(伊地知重頼)
伊主膳正様
尊報

右主膳正ハ新納加賀守忠清二男ニテ季通先祖伊地知本右衛門
重政養子トナリ、加久藤ニ重政地頭タルノ時也、

加久藤慶所案文

尚々以令申外、江戸御犬追物今月七日ニ相調り而御
仕合能之由御左右御座外と大口江相聞得、是又為御
存外、已上、

貴札之旨令披見外、仍昨日申入り様ニ、菱刈表之人数加
州老ニ召烈、一昨日出水表江大狩御座外ニ付、御打立之
由外、無心元存外て當分伊主膳正も大口江被差越逗留ニ
て外間、兩度尋ニ遣し申外へとも為何様子と素不相知外
故、大狩之由外通被申越外、就其鹿兒嶋新刑部様へ為可
得内證ヲ、昨日飛脚差上外、彼飛脚明日明後日ハ可罷帰
外条、新敷儀共有之外ハ、追付御注進可申入り、將又御
方へも日州表なと江新敷左右共御座外ハ、御注進頼存

外、恐惶、

正保三戊也 卯月廿七日 二人

飯野御慶衆中
参

74 光久公御譜中

卯月廿四日家来三浦土左衛門尉方へ之御状同廿七日ニ到
来、令披見外、先日被仰聞外出水之磯流舟之儀薩摩守殿
御披露外處、近邊嶋々浦々木隠迄駈可申由にて山田民部
少殿彼地御越之由近比御大儀共ニ存外、無申迄外得共薩
广守殿御留守之儀ニ外条萬事被入御念儀肝要ニ存外、御
紙面之通承届外、猶重可申述外、恐々謹言、

高力攝津守
朱力キ 正保三年 卯月廿七日
シレス(忠房) 判

鳴津彈正殿
北郷佐渡守殿
穎娃左馬頭殿

75 光久公御譜中

被入御念之預御飛札忝令拜見外、如仰御領分之内吳國之

小船一艘流寄外へ共、乗渡外族無之旨於江戸其御國主被仰上御不審被思召外間、天草嶋中をも致穿撃外様こと御奉書致到来外付る、此中穿撃仕外得共別条無御座外、今度山崎權八殿出合嶋原へ参、其元方被遣外寄船之様子承外處ニ、御紙面之通御座外、左様ニ外へ共不審成所も無御座外、御知せ忝存外、拙者儀嶋原領之内亡所之地高力攝津守殿開發難成之旨就被仰上、彼地御代官被仰付、頃此表罷下外、自然相替儀御座外者御知せ可被下外、恐惶謹言、

宋方年
正保三年 卯月廿九日
鈴木三郎九郎
(重成) 高成判

嶋津彈正様
北郷佐渡守様
穎娃左馬頭様
御報

76
(挿入)
鎌田政昭自記

今度薩摩國いつミ村へ吳國船志艘なかつくといへとも乗渡もの者無之由注進有、若はてれん・いるまん其外きりしたん宗門之族かの舟ニ乗来、陸地へあかりたる事あるへき間、かくし置輩有之者、其宿主ハ申ニ不及、御穿

撃之上其類又ハ隣家一在所之者迄も可為曲事、縦きりしたん宗門たるといふとも、右之訴人いたすこおいて者其科をゆるし、其上急度御ほうひ可被下外、此外自今以後も如此の訴人於仕者是又同前たるへき者也、

正保三年四月廿日 奉行

當国出水針原之儀三月十一日吳国之釣舟流来といへとも舟人者無之、舟之内外ニ生具取付^ムむしたる跡ニ見得外、因茲分国中此中者先竊ニ横見を被申付、江戸へ申上外処ニ、彼近邊之在々木隠等迄可駈之旨被 仰出、近郷并到嶋々不残さかし外得共不審成もの未見出、然處ニ今度從公儀被指下御高札之間、堅守此旨、きりしたん宗門之もの、付行衛不知者於申出者、可被加褒美、若見遁し聞のかし外輩者、御高札のおもてのことく可被處嚴科者也、仍下知如件、

正保三年五月七日

民部少輔
左馬頭
佐渡守
彈正大弼

御文庫式拾番箱四拾三卷中 光久公御講中ニ在り

猶々山口二兵衛今度出水之者老人召列被參り處ニ、

御急用とハ申なから大坂より爰迄五日ニ被參着

り、御道具衆早飛脚も六日より内ニ參ものハ無之由

り間、於此地褒美をも遣度り共、御留主之儀ニ

故無其儀り、各被成御相談、少なり共褒美被下可

然存り、將又老岐舎人儀公儀へ指合可申事ハ御座有

間敷り間、曲事可被仰付儀者如何可在之り哉、能様

ニ御談合尤ニ存り、以上、

急度令啓達り、

一寄舟之儀ニ付り、於出水舟見付り者共被召上り、其上

彼山口二兵衛・野村市郎右衛門相添被指遣り、口上之

(出水乗中)

趣細々承届、則阿部對馬様・松平伊豆様へ御断申上り、

何之御口能も無御座り、併井上筑後殿ケ様之儀被成御

聞り間、右之者共召列参りて、是迄被入御念被召寄り

段御断申入置可然被思召之由、御兩老様被給り間、今

(仰え)

朝右衛門佐召列参りる通事仕、懸御目置迄ニ可相濟と

存り、少も御念遣入間敷り、

一右之舟之儀ニ付今月十日之飛札一昨晚到来り、流舟見

付り日限方之御注進状ニ朝晩之相違御念遣之由尤ニ存

り、乍去遠所之到来ハ時刻之違などは可在之儀ニ

自然崎々より不審之由申来り共如何様にも申八けハ可

有之り、此地ニある御口能之儀無御座り間可御心易り、

一隈岐長門入道道栖相果り通以先書被仰越り、御預人之

儀ニり間、病中にも御断可被仰上儀ニり処、最早死後

ニ罷成、延引笑止ニ存、則伊豆様迄申入り、乍案中最

前流罪被仰付り罪科之通被成御尋り、我くも不案内ニ

り、川因州老も然々無御覚由り間、於爰元道栖之古傍

(川上因)

輩縁者衆などへ寄々承合、大躰ケ様ニ道栖も連々物語

申など、申上り處ニ、御公儀ニ御覚も無相違り、如此

流罪之者相果り刻ハ死後にも御檢使を被遣、其後葬送

仕管ニりへ者、御預人前後始りる御座り由申り間、定

り則葬送可仕と被思召り、乍去火葬ニ仕り哉、土葬ニ

りり哉、相尋可申上之由被仰渡り、急度御返事承届、

公儀へ申上度り、次ニ道栖側ニ罷居り喜樂上方へ罷上

度由御暇申り旨被仰越り、于今其元へ罷居り者、從御

公儀重る御返事被 仰出迄者被召留置肝要ニ存り、恐

惶謹言、

水カキ

正保三年

五月廿六日

新納右衛門佐

久詮判

鳴津圖書頭
久通判

松平薩摩守様
貴報

山田民部少輔様

顯娃左馬頭様

北郷佐渡守様

川上因幡守様

鳴津彈正様

人々御中

79 光久公御譜中

同年六月著ニ船于薩西津ニ、同六日歸レ麿城以ニ島津左近久守ニ奉レ謝ニ賜レ告之辱ニ也、

80 十二番箱四十三卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

封面ニ左ノ如シ、名ハ略
正保三、六月十四日丑ノ刻山口ニ兵衛江戸より下着候、
一出水姿寄舟之事、一遊栖死去之儀被仰上候、其返事、

78 光久公御譜中

已上

御當地御發足之節預貴札致拜見、

公方様御機嫌能被成御座、未御表、口切、

出御不遊、付、御機嫌為御窺平田監物方御残置、之由

得其意、被入御念儀共、弥御快然之御事、間御心易

可被思召、猶期後信之時、恐惶謹言、

琉球ニ從大明糸商買之事、今度彼国兵乱付、如何可有之と被存之趣承届、琉球之儀者如有来令賣買、様尤存、恐々謹言、

朱力半
正保三年 六月十一日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩戸守殿

81 御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以玄番殿御申分早々御返事待入申、早竟 光久

朱力半
正保三年 五月廿七日

阿部對馬守
重次判

様御外聞も能事ニ付間、從當年ハ御装束ニ可然存
付、何共御報待入付、以上、

迫而申入付、然者嶋津玄番頭殿より我々へ被仰付ハ、先年
光久様御元服之刻、被任諸大夫外へとも、正月も無官之
御證人并ニ御登城被成り、其後諸大夫ニ進之衆大納言様
などの御内ニ御座外も其装束にて登城之由被聞召付、
殊玄番殿御事ハ先官ニ在り間、當年ハ諸大夫之御装束ニ
て登城可被成り、左様ニ付ハ、御證人奉行衆へも右之
段可被仰入との儀ニ付、御尤之御事外、併各御前より被
得御意、於被仰聞せ者、此地之儀ハ首尾能様ニ談合可仕
外、返々も此中御昇進御装束不被成儀者對公儀も御疎略
之様可在之歟と存外、被仰出外より我々も行當申外、
猶期後音外、恐惶謹言、

朱力キ
正保三年
七月四日

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書頭
久通判

山田民部少輔様
穎娃左馬頭様
北郷佐渡守様
川上因幡守様

人々御中

末ノ封函ニ左ノ如シ、名略ス

正保三年七月四日状八月十一日ニ限江源太夫被持下候、
一嶋津玄番頭殿御官位事、

82

御文庫拾一番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ有り

別紙之御札令拜見候、(家光・家綱)兩上様弥御機嫌能被成御座外間、
可御心安外、將又其國ハ異国之流船着岸之在所ハ今度直
被相越雖見分り最前言上之通替義無之由得其意外、被入
念之段及 上聽候、委曲使者可為演説外、恐々謹言、

朱力キ
正保三年
七月十六日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

83

御文庫拾一番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、兩上様増々御氣色能被成御座外之間可
御心安外、將又今度仕合好御暇帰国之儀忝被存之由得其
意外、依之被差越使者殊縞玠二十卷并御樽看被獻之外、
右之通達 上聞外之處、念之入外段御機嫌被思召外、委

曲使者可令演説い、恐おそく謹言、

朱力*

正保三年 七月十六日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

猶なほ、先日伊東佐兵衛御茶道閑齋下人指下申い、其刻付状相調いへ共船頭其状を不請取出船い間、此度状指下申い条、右之様子御心得い、以上、

追お面申候、道栖之儀被仰越いり飛脚去四日參着申いへ共于今披露不申い、其故者何程と申来い由口上迄いるハ我わく繕之様い可罷成い、状を指出不申いへハ不罷成儀い、其こへ共、其状之文躰御老中へ可懸御目様子いるも無之い、其上別事多い条彼飛脚徒い罷成い、日記之内いも喜樂と申人無之い、如何無心元い、此中内儀之様い罷成、萬事差引為仕女為在之と聞得い、ケ様成も落申い敷と存い、何共此儀者難取合存い、併幸猿渡少左衛門尉、左近殿供いる被參い間、彼人を御使いなし、條

書を以可申上哉と存候、向後ケ様之儀被仰越いらん刻ハ、状被調様いも御心持可入事い、若御疑敷被思召いハ、判紙被相添可被遣候、公儀之事い間、おろかに被思召間敷い事、

一 道栖之儀被仰越い文章い入念火葬い為被成由い、是ハ少も葬様之御沙汰いる無之い、ケ様成人ハ致欠落者之死などの様いもてなす儀も在之い故、死骸を御見せ被成事い、各御心得違と御書面い見及い間申事い、何とそ御年寄衆御前ハ首尾能様い取合可申い、其上いも口能有之儀者可申入い事、

一 今度彼屋形方いる罷居い黒川民部左衛門尉、去八日之晚御道具衆安樂仲兵衛と申もの民部左を致打擲い、其場者致堪忍いへ共無面目と被存い哉、書物仕置致他出い、御道具衆之儀者繩を掛召置い、ケ様い侍い不覚を仕かけい儀前後無之事い、一途之御變いる無之いハ、御作（能）可申と之御屋敷中取沙汰と承い、道具衆意趣も為指事いてハ無之い、其上此中民部左手代いる外故、當時之折檻之様い為被申事い、致腹立如此之仕合い、巨細者追い可申入い、先出合之通荒増乍次い申入い、恐惶謹言、

朱カキ
正保三年 七月十六日

新納右衛門佐
久詮判
鳴津圖書頭
久通判

山田民部少輔様

頼娃左馬頭様

北郷佐渡守様

川上因幡守様

人々御中

末ノ封面ニアリ、名面ハ略ス

一黒川民部方衛門を安楽仲兵衛ト申道具兼打擲仕候事、

一民部方衛門他出申候事、一右道具兼ニなわを被掛事、

一民部方衛門ヲ打擲仕候道具兼御慶大形ニ候ハ、御屋敷中之衆一途取扱候而可

被下由、御諾可被申上内意候出候事、

正保三、七月十六日ノ状 同八月二日ノ朝道具衆持下候、

一道廻死去ノ様子被仰上候由候事、付被指上候日記ニ喜案并道廻内儀落候事、

一右之儀ニ付頼護少左衛門為御使被指出ヘキ御談合候事、一此方ヨリノ文紙

ニ道廻火葬之事、不入儀之由候事、

85 光久公御譜中

以飛札申入り、江戸を今月十一日ニ罷立(細川光尚)外肥後守飛脚今

日爰許參着仕り、肥後守所方申越り者、長崎へ為 上使

井上筑後殿・山崎權八郎殿御越被成筈にて近日江戸を御

發足被成之由申入り、定る其御地へも御到来可有之外へ

86 光久公御譜中

共、此儀為可申入如斯ニ御座り、將又長崎表今迄者別条
表無之由ニ御座り、猶期後音之時存り、恐惶謹言、

朱カキ
正保三年 七月廿一日

長岡式部少輔

シレス(松井興長)
判

嶋津彈正様

川上因幡守様

北郷佐渡守様

人々御中

已上

一筆令啓達り、

一庄内を北郷殿へ被遣り年号之事、

一近代祁堂院へ所替り何年伊集院右衛門大夫入道被致

格護、慶長何年方又北郷殿庄内へ被成再住りつる哉之

事、

一牛之峠(日應)山堺之入組老元和何年方起り外哉、寛永初比に

てもりつる哉、此方へ覚りハ寛永三年之獅走(獅)か四年之

正月敷、木を従伊東殿被伐り何庄内之内にて切り由

り何六ヶ敷成り様ニ覚り、乍去久敷事にて然と覚無之

外、其先よりも被論候つる哉之事、

一其後從 (家) 中納言様彼山之内少く付可被進之由り大形

何事方方カいづれの山迄可被相付歟とひ而從高岡八仁礼藏

人、從小林ハ誦方仲右衛門尉方を都之城へ被差越、其

時分者 式部(久)太輔殿へ喜入休右衛門尉被付置り、三人

於都之城談合りつるハ寛永十一年之冬にてりつる、何

月と寛被申り哉、其時分之家老衆北郷主膳殿・北郷仲

左衛門尉殿寛可有之り、承度り事、

一今度繪圖ニ付又々堺之儀伊東殿從家老衆達而被申り、

此比平部三郎右衛門尉と申人使ニ被越り、此方從老中

衆も江戸へ可被仰上と出合り故、從上古之様子御尋申

り事、

一北郷殿庄内被為領りて方以来、終ニ牛之峠迄從飢肥見

廻申たる事者無之りつる哉、又從其比少く論りハん崩

も見得りつる哉之事、

一右ヶ条一々返答待入り、為其以継飛脚申越り、恐々

謹言、

外カキ
正保三年 七月廿三日

土持權助殿

北郷藏人殿

御宿所

午ノ下刻

鳴津彈正

久慶判

87

御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ有り

猶々隠岐道栖之儀伊豆様へ申入置り御返事、未被仰

出り、相濟次第猿渡少左衛門尉指下可申り、是又為

御心得り、以上、

態以飛脚令啓入り、

一以先書如申達り從大明使者罷渡由りニ付、井上筑後守

殿為 御上使長崎へ御下之由申候、爰元被為立り儀者

唐之使者船米着之到来次第と承り、就夫我々存寄之通

申上度り、今度之使者も御加勢之御人数并兵糧為可申

請参由り、御加勢可被遣儀者未相知りへ共、御国之儀

者唐へ之渡口にてり間、御人数をも被指越りハ、先手

ニも被仰付り様ニ被成御申りてハ如何可有御座り

哉、左り者縦御人数不被指渡り共、又者御加勢被遣り

共、御奉公之御心懸ニ可罷成歟と奉存り、自然於御納

得者早々以御狀讚岐様・加賀様御老中へ御内證として

被仰入置可然御座りハんと令存り、各御同心り者右之

段被入 御耳可為肝要候、

一頃龜庵法印被成物語り、大明八木之直成壺石ニ付り三

貫目宛之由相聞得り、琉球方唐へ之糸商買之免状も御

奉書も出申り間、其船共ニ米を御乗被遣りてハ可有如何(八幡)哉、海上之破判さへ用心仕り者是程之才覚ハ御座有間敷と存り、定ぬケ様之儀者各御相談も可在之りへ共、飛脚之次ぬニり間存寄之通申入り、

一木上筑右衛門尉今月六日無事ニ致参着り、御方替儀無御座り由目出度奉存候、此地御屋敷中上下無別条御座り間可御心易り、猶期後音候、恐惶謹言、

朱力^キ
正保三年 八月十一日

新納右衛門佐

久詮判

嶋津圖書頭

久通判

山田民部少輔様

顯娃左馬頭様

北郷佐渡守様

川上因幡守様

人々御中

封面上ノ通

川上因幡守様

北郷佐渡守様

顯娃左馬頭様

山田民部少輔様

一沖道橋之儀、伊豆様へ被仰入置

たる由候、相濟次第狼渡少左衛

門可被指下由候、

久通

正保三、八月十一日状 同八月廿九日ニ飛脚持来候、

一唐より使船参候ニ付、様子被仰下候事、
一龜鹿法印物語之様子被仰下候事、
一木上筑右衛門、八月六日ニ江戸へ参着之由候、

嶋津圖書頭

新納右衛門佐

御文庫廿番箱四拾三卷中

敬白天叢靈社起請文前書之事

殿様御そばへ被召仕り処、色々忝御意誠々御かうおんの至難報奉存り間、せめてわか身事ハ後世の御供可申上と存企り間、乍恐此由起請文以無別心旨申上り事、右之旨若偽於申上素

牛王神文略

正保三年丙戌八月廿四日

おかし

89 御文庫式拾番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

追ふ令啓達り、

一此度國々へ繪圖被仰付り時分、奈須椎葉山之儀最前去

日向之内之様ニ出合り、其後又肥後之内と被聞召り処

ニ肥後國中之繪圖ニ無之り間、肥後殿へ御尋りへハ日向之内之由被為申出り、就夫井上筑州老方此方之繪圖

ニ相加可致調進之旨一昨晩右衛門佐迄御状を以被仰聞

(新納久詮)

外、則昨朝致伺公、彼山内之儀如何様にも御意次第に可相調り、併繪圖下書者從何方出申り哉、先其御方へ被仰渡り者申合其首尾可仕り由申上り処に、彼御方も御無案内に、御老中へ被得御意、重る可被仰聞通承り、定る日州之繪圖に可加と存り間、先其御心得御尤に、

一 清書究り繪圖御氣に入りを少書写可致進入旨被仰越り間、右同前得御意、昨日狩野茂左衛門尉を憑りる少く書写指下申り、是者繪之具之色取様を可有御覽為に、大形者書付之仕様も右衛門佐見申り分書付申り、巨細者兩人之御使に申合り、

一 圖田帳名判之儀も能次あるに間御尋申り、相定り儀者無之に、御名計被為書衆も御座り、又被成御判迄被指出衆も御座候、手前之勝手次第に可仕由被仰聞り間、其段御心得尤に存り、家老衆之判なとにて出申御沙汰ハ無之に、惣別御国中之繪圖延引に罷成り子細共委申上りへハ、余国に相替り繪圖數過分に調り間御察之前に、少も御急之儀にて無御座り、延引之儀不苦り旨被仰り、將又伊東殿山境入組も粗御物語申上置り、其段も兩使へ口上に申渡り、為御納得り、恐惶謹言、

正保三年 八月廿七日

新納右衛門佐 久詮判

嶋津圖書頭 久通判

山田民部少輔様

頼娃左馬頭様

北郷佐渡守様

川上因幡守様

嶋津彈正様

封・左ノ如

嶋津彈正様

川上因幡守様

北郷佐渡守様

頼娃左馬頭様

山田民部少輔様

久通

正保三年八月廿七日ノ状

嶋津圖書頭

九月十七日ニ竹宮内記

新納右衛門佐

鎌田勘兵衛持下候、

一 國中繪圖之様子被仰下候、

90 御文庫拾一番箱四拾三卷中 光久公御譜中に在り

御札令拜見候、 兩上様御機嫌之御様子被承度付る被差

越使者、殊琉球酒二壺并鱈節一箱被獻之、御次之刻可遂披露、將又公方様頃日御瘡病之處、切く被遊御灸治當月不被為差發打續御快然、間可被御心安、委曲使者可為演説、恐く謹言、

朱力牛
正保三年
九月十日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩广守殿

91 御文庫拾一番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様御瘡疾之趣相達御様躰無御心許被差越使者、早速御本復之御事、間可御心安、入念之段及上聴、委曲兩使可為演説、恐く謹言、

朱力牛
正保三年
九月廿六日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

92 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、兩上様弥御機嫌能被成御座、儀相達目出度被存之由得其意、將又其國之小熬海鼠一箱并砂糖漬之天門冬進上之候、遂披露之処入念、段御満悦之御事、猶使者可令演説、恐く謹言、

朱力牛
正保三年
九月廿六日

松平和泉守
乘壽判

松平薩摩守殿

93 綱久公御譜中

嶋津圖書所迄之芳翰珍重、其元静謐之由此方同前之至、然者犬追物之稽古最中、尤之儀、將又與方息災之由是又令満足、恐く謹言、

正保三年
九月廿七日
(編久)
久平御在判

(久)
嶋津彈正大弼殿

94 御文庫貳拾番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶大明兵乱之儀、此度者正使之船不相着、井上筑後守殿、安藤右京殿なども長崎へ御下向無之、

ケ様之儀町説にてもや有之つらんとの御口状承届
外、少も左様之儀ニ有者無之外、様子者口上ニ御返
事申外、必定御加勢可被遣御沙汰可有之刻者、乍重
言御縁者之御衆へ得御内意外、其上にて杜御状者
差出可申外、得御意不申外有者仕儀にて無御座外、

其段ハ御心遣被遊間敷外、以上、

九月五日之御状并御条書之趣具令得其意外、

一大明兵乱ニ付御加勢之人數兵糧等之儀為可申請、使者
船差渡外由風聞外ニ付、若御人數於被差渡者御國之儀
唐へ之渡口有之外間、先手ニも被仰付外様ニ御内證
可被仰入置之旨奉得其意外、勿論実否之段能ク承合、
以其上御縁者之御衆迄、先得御内意可然様被思召外
ハ、御老中様皆々可申入外、其段以御次被 仰上肝
要ニ存外、

一大明八木之直成此元風聞之通相違之由被仰越外、委細
承届外、

一其元御立之日限正月五日・六日之間ニ被仰出由被仰
越外、此等之御返事ハ新納宅右衛門帰國之刻細々申上
外間不及口能外、猶伊勢左近隙明次第可有帰國外間期
其節外、恐惶謹言、

^{朱力*} 正保三年 九月廿九日 新納右衛門佐 久詮判

嶋津圖書頭 久通判

川上因幡守様

北郷佐渡守様

山田民部少輔様

御報

封面ニ左ノ如ク、名前略又

正保三年九月廿九日之状十月廿二日伊地知志賀丞被持下候、

一大明兵乱之事、一大明米之事、一受御打立之事、

95

御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、 公方様御瘡疾之御様躰就被承度外重
被差越使者外、 先書如相違外早速御復本之御事外間可御
心安外、 度々念之入外之段達 上聴外處、御満悦被思召
外、 恐々謹言、

^{朱力*} 正保三年 九月晦日 阿部對馬守 重次判

阿部豈後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

松平薩摩守殿

96 御文庫拾二番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

公方様御不例御様躰被承度付而被差越使者外、先書如相達外打續御氣色能、此比老御鷹狩被成 出御外之間可御心安外、示給外趣達 上聴外處、度々念之入外段御機嫌被思召外、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱力半
正保三年 十月十二日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

97 十二番箱四十三卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見候、公方様御不例付而於其國新田八幡宮御祈禱被致之御札献上之外、惣様不相納外間可被得其意外、然老御氣色増々御本復之御事外間可被御心安外、度々被入念之段可達 上聞外、恐々謹言、

朱力半
正保三年 十月十六日

阿部對馬頭
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

98 御文庫拾二番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在り

今度依大明兵乱従平戸一官就加勢之義書簡雖到来外、宛所無之書中之趣御不審之條々有之外、然老大明と日本末代迄之義外故、長崎江被遣 上使、一官使者様子被成御尋、其上 仰出可有之と被 思召之處、當月四日之書状従長崎来着、福州令落居由注進外、然上老不及兎角之義外、此段在江戸之面々江就被 仰聞、其元江表可相達旨依上意如此外、恐々謹言、

朱力半
正保三年 十月廿一日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

御文庫式拾番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

覺
(達) 達人かつせんの覺

一 唐王福州の都を持、三ヶくハんと申けんなんをかへ被居り處ニ、唐人の内心替りもの有之り(竊相人) 達人を引入、戌ノ八月廿五日ニ彼関を押破、則時ニ福州を取、唐王をくハうせいの内かんちうと申山へ逐上り、きさきも自害之由とも又は達人ニとらハれぬるとも兩説也、
 一 平戸一官も妻子けんそくちりくニなり、小舟ニ乗、せい州と云ミなとへにけさり有之よし聞有ニ付、達王より使者にていハく、達人のことく頭をそりかうさんいたしりハ、(福) かん(惠) かん(広) かん(東) かん(西) かん(西) 此三ヶ州を与へきよし也、一官返答ニ、頭をそのままおき一身ノ自由ニおかれりハ、かうさん可申由申りハハ使のいハく、達王に奏して重ぬ之儀たるへきよしにて返り也、

封函ニ

新納右衛門殿

神 備前守(元勝)

光久公御譜中

正文在文庫

覺

吳國船令来朝もし人なと入り節為御仕置鍋嶋信濃守・松平右衛門佐替々九州ニ被差置り、左様之刻者松平隠岐守其所に相越計之可申付之旨最前より被仰出り、其上にも人入り俄之時者、近所ニ付高力攝津守并長崎之奉行人差図次第人数を出り様にとり、是又從此以前被仰出、今度又右之内に日根野織部正被召加之間、向後者高力攝津守・日根野織部正・長崎之奉行人可被得差図者也、

朱カキ
 正保三年 十月廿一日

101 御文庫式拾番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

以上

此中大明兵乱ニ付御加勢之儀以書簡從平戸一官申上りへ共、最早明朝不殘韃靼人之手ニ入り由和聞得り間、不及御沙汰旨在江戸御大名衆へ者於 御城被仰渡り、御在國之御衆へ者、以御奉書被仰觸由り一昨晩御奉書出り間、別府千左衛門尉へ為持下申り、則右之通被成御披露肝要ニ存り、乍不申此御奉書ハ必有御請御座り間、其段可被仰上り、尚後後音之時り、恐惶謹言、

朱力キ
正保三年
十月廿六日

新納右衛門佐
久註判

嶋津圖書頭
久通判

川上因幡守様

北郷佐渡守様

山田民部少輔様

人々御中

封面左ノ如シ、宛名ハ略ス

正保三年十月廿六日之状十一月廿日ニ別府千左衛門被持下候、

一大明親細人之手ニ入候ニ付御奉書被召下之由候事、

御返事済

102

御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

追而令申外、然者今朝阿部對馬守殿方御留守居衆被召寄御書物相渡申外間指下外、如右之趣被成御心得吳国船来着之刻者長崎御奉行・高力攝津守殿・日根野織部正殿御同前ニ御注進被成にて可有之外間、聊無御油断様ニ御心得尤外、大明之事、從韃靼國討取外間、別而異国船御心遣ニ被 思召と聞得申外、勿論松隠岐守殿、大坂御奉行所此御地へも御左右可被仰事者前々被仰出外ニ相違有之

間敷外、為御存外、恐惶謹言、

朱力キ
正保三年
十月廿六日

新納右衛門佐
久註判

嶋津圖書頭
久通判

山田民部少輔様

北郷佐渡守様

川上因幡守様

人々御中

封面左ノ如シ、名ハ略ス

正保三ノ十月廿六日ノ状十一月二十日別府千左衛門被持下候、

一阿部對馬守殿より被召下候御書物被差下之由候、

一異国船之儀ニ付長崎御奉行高力攝津守殿・日根野織部正殿へ可被成注進之由候、

103

御文庫拾三番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上、

猶以牧野内匠頭忌中之故登城無之外故不克加判外、御札令拜見候、今度 公方様御不例早速御平復之儀相達、目出度被存之由得其意候、依之被差越嶋津筑前、御樽着大納言様ニ被獻之外、右之通及披露候之處、一段之御仕合外、委曲筑前可為演説外、恐々謹言、

朱力キ
正保三年
十一月八日

松平和泉守
乗壽判

松平薩摩守殿

104 御文庫拾一番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、公方様御瘡病早速御本復被 遊之旨相達、目出被存之由得其意外、因茲被差越使者御樽肴被献之外、右之趣遂披露外之處、念之入外段御機嫌之御事外、委曲使者可令演説外、恐々謹言、

朱カキ
正保三年 十一月十一日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

105 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、去時分從 公方様息又三郎以上使御菓子被遣之儀相達、忝被存之由得其意外、依之被差越使者候、右之趣及 上聽候之處、入念外段御機嫌之御事候、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱カキ
正保三年十一月十四日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

106 光久公御譜中

正保三年丙戌十一月十三日執政松平伊豆守信綱召ニ光久之留守居者一、家老新納右衛門久詮詣ニ信綱之館一也、將軍家所レ賜之御膳之鶴并執政之奉書信綱傳レ之矣、驛路傳送之篠夫者執政之所レ令而垂ニ惠之薩摩府一、

107 正文在文庫

猶々御札之御使者不及申外へ共、かろき衆ニ而ハ成合申間敷外、前々ノ御覚も可有御座外間、御吟味を以被仰付尤ニ存外、彼作左衛門事俄ニ御使被仰付、衣裳等此元ニ召置かろく申付外、其御心得早々被召上尤外、以上、

急度令啓入り、然者昨晚 御鷹之羈被成 御拝領外、御奉書相添差下申外、當年ハ例年ニ相替松平伊豆殿御宿へ留守居之もの一人可致参上由被仰渡外間、右衛門佐候

仕外、同前ニ松平新太郎殿・毛利長門守殿・細川肥後守

殿・鍋嶋信濃守殿・松平筑前守殿へ差被成拜領外、先以

目出度奉存外、於爰許 又三郎様今日四ツ時分被成御登

城御禮被仰上可然由伊豆守殿御指圖ニあり、從其元之使

者ハ余之急ニ無之外ぬも不苦外、御國之遠近御座外間、

夜を日に次急外ハ不入儀之由被仰外、此度之羈持せ外

送等も從 御公儀被仰外、此方方ハ宰領計可相付旨被

仰渡外間、兎玉作左衛門御道具之者一人相付外、右之留

守居衆申合如此外、是又為御心得御座外、恐惶謹言、
朱力キ
正保三年 十一月十四日

新納右衛門

久詮判
北郷佐渡
久加判

山田民部様

川上因幡様

嶋津圖書様

人々御中

光久公御譜中

薩摩・大隅・日州諸縣郡・琉球知行方目錄

〔宋〕
一押札ニ

此度相究候御高目錄一

惣高七拾貳萬九千五百七拾六斛

内

三拾壹万五千五石余

薩摩

拾七万八百三拾三石余

大隅

拾貳万貳拾四石余

諸縣郡

〔宋〕
一押札ニ
三口合六十万五千八百六十貳石御朱印之高ニ合申候、

拾貳万三千七百拾三石

琉球

右之外

山川浦濱役

高七百三斛余

薩摩

同四千百貳拾壹石余

大隅

同五百八拾貳石余

諸縣郡

合五千四百六石

〔宋〕
一押札ニ
右七口合高七十三万四千九百八十貳石

但先年此方ヨリ被指上候目錄之高ニ貳千三百五拾四石此度出申候、

右之外

高四百九拾五石

七嶋

〔宋〕
一押札ニ

私卒

〔多摩川〕
押札ニ
承応三年十一月廿二日奈らや市右衛門よりたば川水道入目ニ付而、高分草

草度由三雲太郎右衛門迄申來候付、高七拾三万石余と書付遺候、但横折御名

書之写別紙ニ有

正保三年十一月十五日

薩摩・大隅・日州諸縣郡・琉球知行方目錄

〔米〕
〔押札二〕
此度相究候御高目錄

惣高七拾貳萬九千五百七拾六斛

内

三拾壹万五千五石余

薩摩

拾七万八百三拾三石余

大隅

拾貳万貳拾四石余

諸縣郡

〔米〕
〔押札二〕
三口合六十万五千八百六十貳石御朱印之高ニ合申候、

拾貳万三千七百拾三石

琉球

右之外

山川浦濱役

米七百三斛余

薩摩

同四千百貳拾壹石余

大隅

同五百八拾貳石余

諸縣郡

合五千四百六石

〔米〕
〔押札二〕
右七口合高七十三万四千九百八十貳石

俱先年此方ヨリ被指出候目錄之高ニ貳千三百五拾四石此度出申候、

〔米〕
〔押札二〕
右之外

高四百九拾五石

七嶋

正保三年十一月十五日

109
〔米〕
〔光久公御譜中ニ在リ〕

猶以牧野内匠頭病中ニある登城無之ハ間不能加判ハ、
以上、

御札致拝見ハ、今度 公方様御不例、早速就御本復為御
祝從 大納言様御膳御獻上之儀相達、目出度被存之由得
其意ハ、増々御機嫌好被成御座、切々御鷹狩等ニ被為成
外之間可御心易ハ、随ゝ大納言様ハ御道服三并砂糖漬之
御菓子一箱被差上之外、被入念之趣遂披露ハ處一段之御
仕合ハ、委曲使者可為演說候、恐々謹言、

〔米〕
「正保三年」十一月廿六日 松平和泉守 乘壽判

松平薩广守殿

110
光久公御譜中

先レ是

家光公患レ瘡疾、光久在レ國獻ニ使价ニ窺ニ尊體之快否數回

矣、既聞^三

公之起居復^レ平生之信^一、奔^レ倅奉^レ賀^レ之、獻^二御道服五^一、唐本書籍六部^{都三百、八本}、繇^レ繫正保三年十一月二十八日賜^二奉書^一、

111 御文庫拾一番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、公方様御不例弥御快然付^力、去月二日為御玄猪之御祝御表 出御、同四日諸大名 御目見、翌日自 大納言様御膳御獻上之、其上御鷹狩被^レ為^レ成^レ儀息又三郎被^レ相達、重畳日出度被^レ存^レ由得其意^レ、依之被^レ差越^レ使者、殊御道服五・唐本之書籍六部三百八冊目錄之通被^レ獻^レ之^レ、右之趣遂披露^レ之^レ處、入念之段御満悦被^レ思召^レ、猶使者可令演說^レ、恐^レ、謹言、

^{朱カキ}正保三年 十一月廿八日

阿部對馬守 重次判

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

112 十二番箱四十四卷中 光久公御譜中ニ在リ

御状令拜見候、鐵炮之鶴一羽被^レ獻^レ之^レ、遂披露^レ之^レ處、一段之御仕合^レ、恐^レ、謹言、

^{朱カキ}正保三年 十二月四日

阿部對馬守 重次判

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

松平薩摩守殿

113 御文庫拾一番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶^レ大明之様子琉球口相閉^レ通被^レ承届可被^レ申越^レ、可達 上聞^レ、以上、

一筆申入^レ、從大明琉球^口者從此以前通用有之事^レ間、大明之様子知^レ義も可有之^レ、たとひ風說等成共被^レ承^レハ、其趣具書注可有御越^レ、為其如此候、恐惶謹言、

^{朱カキ}正保三年 十二月六日

阿部對馬守 重次判

松平薩摩守様

人々御中

松平薩摩守様 阿部對馬守

戊十二月廿五日

自江戸

正保三年丙戌年歲、

114

御文庫拾一 番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、參州瀧御宮御遷宮首尾好相濟外之儀相達、
日出被存外由得其意外、依之被差越使者外、入念之段達
上聞外、委曲使者可為演説外、恐々謹言、

正保三年 十二月七日

阿部對馬守 重次判

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

115

光久公御譜中

薩摩國惣廻百拾八里廿貳町

高三萬三百三拾九石六斗九升四合一夕

鹿兒嶋郡

高尨萬五千四拾七石八斗九升五合五夕

谷山郡

高三千六百貳拾五石七斗五升三合四夕

喜入郡

高尨萬六千八百五十七石五升六合七夕

指宿郡

高尨萬五千九百卅九石三斗八升四合七夕

穎娃郡

高六千八百三拾八石四斗五升三合六夕

知覽郡

高三萬五千四拾五石七斗壹升八合

河邊郡

高貳萬三千五百七拾石四斗七升五夕

阿多郡

高五萬千六百四拾八石四升三合九夕

日置郡

高四萬貳千七百拾九石壹斗三升四合七夕

薩摩郡

高八千四百四拾五石九斗九升壹合四夕

高城郡

高貳萬三千七百卅五石貳斗五升六合

出水郡

高三萬八千四百壹石三斗六升二合四夕

伊佐郡

高貳千七百九拾壹石三斗八升五合

甕之嶋郡

惣合高三拾壹萬五千五石六斗

大隅國惣廻百里貳拾七町

高九千九百八拾六石八斗五升六合

菱刈郡

高貳萬千八百貳拾四石四升三合

葉原郡

高貳萬六千六百四拾三石四斗六升二合

始羅郡

高四萬三千八百八拾四石四斗七升壹合

曾於郡

高四萬貳千拾五石九斗八升八合

肝付郡

高貳萬百九拾貳石三斗壹升三合

大隅郡

高五千貳百五石七斗壹升九合

熊毛郡

高千八拾石五斗九升

駒路郡

惣合拾七萬八百三拾三石四斗五升壹合

(蝦夷) 駒路郡

日向國之内諸縣郡廻九拾四里

高拾貳萬貳拾四石五斗八升

諸縣郡

琉球國

高拾貳萬三千七百拾壹石七斗

薩摩・大隅・日向之内諸縣郡・琉球

都合高七拾三萬七拾石五斗壹合

正保三歲十二月十二日

116

光久公御譜中

正文在文庫

為歳暮祝儀小袖十到来、怡思食外、尚酒井讚岐守可申外
(忠勝)

正保三年

十二月廿七日

家光公
墨印

薩戸侍従とのへ

117

御文庫拾二番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

来年四月 兩上様日光可被成 御参詣之旨最前雖被 仰

出外、来々年考 權現様三十三回忌ニ付、攝家門跡衆参

向御法事等御執行之事外、其上日光御門跡も其節考御年

118

正保三年丙戌

十二月二十四日、新納二右衛門久親鳥津大和守久澄罪ありて河辺の宝福寺より谷山の清泉寺に召て遺囑せらるの時其僕才七肝付縫殿助兼佳谷山土にて同しく死、金八・稲弥太・星原孫十郎・坂口金右衛門以上四人も肝付か次きにあれ、此に照て歿考

齡長始可為御参外間、旁以来々年迄日光御参詣御延引外、然考従例年早雖可致参府之旨外、右之通外間、如御定参動可仕之由 上意外、恐々謹言、

朱力キ
正保三年 十二月廿八日

阿部對馬守 重次判

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

松平薩戸守殿

〔口略之〕
 今度就論之犬追物問答右五ヶ条致赦免^外、當家秘傳之儀
^外之間、聊他見他言有間敷者也、

嶋津中務少輔とのへ

光久 御判

御書判ノ上ニ朱印也

〔口略之〕
 今度就論之犬追物問答右五ヶ条致赦免^外、當家秘傳之儀
^外之間、聊他見他言有間敷者也、
 正保四丁亥年正月五日

(表紙)

光 久 公 自 正保四年
 至 慶安元年

追 録
 舊 記 雜 録
 卷 二

〔補入〕 覚
 (給良郡)
 昔年山田御城ニ我等先祖罷在^外時分、禰答院方敵勢北山
 を罷通、山田之内へ敵大勢差越、臥草ヲ仕^外を山田ノ御
 城方我等先祖見申^外、野久美ノ婦道帖佐へ参り注進申
^外ニ付、帖佐方即刻人衆被罷出、我等先祖事ハ先々山田
 へ罷帰、横入を仕敵勢悉廢軍仕、山田之内鳥啼坂を退申
^外を禰答院之境目岩井田山中迄追付^外て被仕^外、先祖共
 深手負申^外、依其御褒美として則山田之内ニ少ノ知行
 被下^外事、

嶋津中務少輔とのへ

光久 御判

御書判ノ上ニ朱印也

〔口略之〕
 今度就論之犬追物問答右五ヶ条致赦免^外、當家秘傳之儀
^外之間、聊他見他言有間敷者也、
 正保四丁亥年正月五日

(表紙)

光 久 公 自 正保四年
 至 慶安元年

追 録
 舊 記 雜 録
 卷 二

正保四丁亥年正月五日

光久御書判

仁礼左近將監とのへ

八月十八日川崎平左衛門助延〔入米院伯耆守重高臣にて殉死〕川添但馬重次
〔上に同しく殉死〕原田平右衛門上〔同〕藤田政右衛門上十月晦日坂
〔或市郎左衛門〕元九郎左衛門入道將安〔鳥津玄蕃忠紀臣にて忠紀江戸ニ死するを聞て、最期の歌を長崎貞義に贈れるあり〕

豊後へ御出陣之時分、親(家久)の六左衛門かたら田(介助)の分捕申申様も、中書様御内衆上野半殿と申人首論之族雖被

申申外、勿論ながら親六左衛門の分捕罷成成り、又翌日

御手合御座座り刻、かの半介どの無本意被存存りて分捕衆ハ

被逐御上覧覧り付付る、中書様御感不浅浅り処こ親六左衛門

追追る分捕仕、達 御上覧覧り故 惟新様御感表弥不斜外(義忠)

響迄残所無御座座り事、

関東小田原へ 久保様御出陣の時分も、木村主殿助殿并

親六左衛門御馬の別當被仰付付りて御供申申り事、

親六左衛門ノ弟源六事ハ高麗(古官)ふるくわんの城ニ敵責寄寄り

時分、地頭をはしめ御方八十人ほど討死申申り刻伯父源六

打死申申り事、

久保様高麗ニ御在陣の時分も伊勢兵部殿・福島半介殿・

黒木宗左衛門殿・頼乗坊・精松與三殿・親六左衛門など

高麗高麗ハ被召寄御奉公仕仕り、然然る 久保様御他界ニ付付る鹿

児島迄御死骸の御供仕、其上高野山迄御奉公仕仕り事、

先年庄内へ御出陣の時分山田之新城ニ帖佐蒲生衆押寄

かけかけこつかれり刻、親六左衛門ヲ御使として三度迄被遣、

先先く可被引退退り由御意意ニおり通類ニ相觸触りといへ共無其

儀儀り、然然処処ニ長壽院被仰仰りハ右の人衆召捨置置りて御退可

被成由被仰仰り、其時六左衛門申申り外ハ、かの人衆御はめ被

成成りる城御責可被成成り、左様ニ無無之之外ハ、山田其外脇城

より敵罷出、右人衆ハ悉悉く可相果果り通再三申上上り付付る、(佐土原・家久)

中書様御手廻の御旗さし御道具衆勿論軍兵一度こせきの

ほり、山田新城本城輒御せめ落被成成り、親六左衛門事其

刻刻表表ことの外辛勞仕り分捕仕仕り、尤我等事表分捕仕仕り、

其時分ハ 惟新様伏見へ被成御座座り、此由被聞召上、則

古川助兵衛殿を以御感不浅浅り通謹謹て承承り事、

山田の城へ 黄門様初(家久)て御在陣の時分、安永安永ハ中霧鳴へ

臥草仕仕りる、御手廻数多討死有之故、御人数うすく罷成

り付付る、我等事表森田の陳陳ニ罷在在りを、人並人並ニ山田へ

召寄御奉公仕仕り事、

親六左衛門事粉骨を盡盡くし、御奉公仕仕り付、出水へ被召

移、軍奉行可被仰付由御座座りて、為加増知行百斛被下下り

事、

親六左衛門事若年若年ハ 惟新様御供仕、加久藤へ罷移、加

久藤久藤ハ飯野へ罷移、存命の間ハ方方くと御供仕、誠忝召

仕仕り付 惟新様御後生之御供迄相勸申申り事、

親六左衛門事は右のことく御奉公仕、伯父源六事ハ高麗

にて御奉公相勸、我等兄事ハ関ヶ原ニ骸をさらし申申り事、

我等事及若輩なから庄内越る肥後のさしきなどにて如形
御奉公仕、兩度共薄手負申り、

正保四年正月十二日

右のことく御奉公仕たる筋目のものにて御座り間、愚

息源五事、於向後より、相應之御奉公及被仰付召仕り

様ニ預御取成度り、當時及飢喝ニ申ほどの事にて無御

座りゆへ、御扶持などの御侘言申儀にはあらずり、若

キものゝ申事にてり処に、終に江戸などの御供等も

不仕り事無本意り条、似相へ御奉公被仰付り様ニ御公

儀御取成万々奉頼り、已上、

正保四年

正月十一日

池田右近將監

新納刑部少輔様

御与力中

123

光久公御譜中

覚

一八重山嶋高六千六百三拾七石三斗式升壹合六才之出物

御免之事、

一琉球國司出物仕上舩破損於有之ハ、公儀之御損ニ可被

成り事、

一爰許へ三司官被相詰り儀御免之事、

三司官

山田民部少輔判
北郷佐渡守判
川上因幡守
鳴津圖書頭

124

光久公御譜中

正文在文庫

御札令拜見候、旧冬為使者に鳴津筑前被申上り之處、仕

合好御服拜領之義忝被存之由得其意り、依之為御礼重

被差越使者り、念之入り段達 上聞り、恐々謹言、

正保四年

正月廿六日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩广守殿

125

光久公御譜中

正保四年丁亥正月二十八日、光久為ニ參觀ニ發ニ于麿城ニ、

解^ニ纜於日州細島一、著^ニ船平大坂^ニ、三月十七日到^レ江府、
則給^ニ上使^ニ若^レ例、

126 御文庫三番箱六卷中 光久公御譜中ニ在リ

光久公

御判有リ

被 仰出條、

一 今度御留守中諸置目之儀、前如被仰出候かたく相守可
被申付事、

一 与頭衆被相揃、御留守中与中之衆諸事氣任^ニ無之様可
被申付事、

一 御留守中士以下氣任共為申人於有之者、依科之輕重或
寺領・川除或溝ほり・板なととらせ、又者日数之番等
可被申付事、

一 御留守中諸事家老衆手前にて可相濟儀者無延引可被事
濟事、

一 死人之相手、付死罪・八付^(離)・火あふり・ごくもんの儀
は被申上、御下知次第たるへき事、

付籠者^(倉)・流罪・搦捕者之儀者江戸は不及申上、家老
衆より可被申付事、

一 鹿兒嶋并外城へ事立候儀若出合ひ者、被承付早々可被
相静事、

一 評定所談合之儀洩候時は、何時^ニ言口を可被相糺事、
右條々堅可被相守、此外宗旨之儀^ニ付彼改之衆より被
申出候刻者可有相談者也、

正保四年正月廿八日

127 光久公御譜中

薩摩國・大隅國・日向國之内諸縣郡并琉球國知行目錄

惣高七拾三萬七拾石

内

三拾壹萬五千五百余^(石)

^(石)

薩摩國

拾七萬八百三拾三石余

大隅國

拾式萬式拾四石余

^(日向之内)
諸縣郡

拾式萬三千七百拾壹石余

琉球國

以上

正保四年丁亥二月

松平薩摩守

128 光久公御譜中

写正文在文庫

129

一筆令啓外、度々如被仰出きりしたん宗門之儀領内入念可遂穿鑿旨 上意候、将又吳國船領分之浦於令到来者、可被相守去酉年二月十二日奉書之趣候、万一不義之子細有之砌、長崎奉行人江注進之儀移時刻於難茂者見計之、可被申付外、雖然湊江舟を不入、沖ニ有之刻、卒尔取懸事者無用外、自然人数不足外ハ、是又此以前如被 仰出、隣國之面々江早速人数出外様ニ被相談無越度可被計外、今度中國四國衆御暇之節右之通被仰含外之間、為御心得如此外、恐々謹言、

朱カキ

正保四年

二月廿六日

阿部對馬守

在判

阿部豊後守

在判

松平伊豆守

在判

松平薩摩守殿

御文庫拾二番箱四拾五卷中

光久公御譜中ニ在り

追ふ

(松平信綱)
(阿部忠秋)

松豆州・阿部豊州へ御紙上之通申通外、以上、

御札致拜見外、貴殿儀先月廿一日豫州津波迄御越外由得其意存外、将又去々年從琉球唐江差渡外小船二艘之内一

131

130

艘帰帆付の、唐之様子被注越外、今一艘帰帆外者去年秋冬之様躰可知外間、重可示預之由承届外由、紙面之通及 上聴候、恐々謹言、

朱カキ

正保四年

三月六日

阿部對馬守

重次判

松平薩摩守殿

御文庫廿三番箱廿一卷中

うつし

吳國船渡海之節外、度々如被仰出外領内弥無油断万事堅可申付之旨 上意外、然者彼船於令到来者去年二月被存奉書之趣可有沙汰外、恐々謹言、

阿部對馬守

重次

三月十一日

松平伊豆守

信綱

松平薩摩守殿

御文庫拾二番箱四拾五卷中

光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、

(家也)

公方様御不例早速御快然之儀目出度被

存被差越使者外、入念外之段可達 上聞候、恐々謹言、

朱カキ
正保四年
三月十三日

阿部對馬守
重次判

松平伊豆守
信綱判

松平薩广守殿

132
光久公御譜中

琉球大嶋之内へ兩度破損寄船在、是趣年寄共方迄詳ニ御書付被指越令披見外、御念入り段得其意外、別条も有之間敷様子ニ相聞申外、恐々謹言、

朱カキ
正保四年
三月十七日
松 河内守
定頼判

嶋津彈正殿

北郷佐渡守殿

山田民部少輔殿

133
光久公御譜中

覚

一御兄弟衆・御一門衆・御縁者衆へ諸士被参合外刻、又内下々之者老不及申、雖為歴々疎意成躰にて不罷通様ニかたく可被申渡事、

一此中又内・百姓・町人・浦濱之獵師かたけ賣仕外者等

歴々参合外て、或疎意成躰にて罷通、或馬を追懸下馬をもいたさるるよし外、向後老小者を列外程之人へ参合外刻老、致下馬脇へふみよけ可罷通外、鎧を持せ外人ニ参合外時老、傍へ引よけつくはひ外様ニ可被申觸事、

一町人長刀指外儀弥以可為停止外、脇差ハ巷尺八寸外上之刀町人指外儀堅可為停止外、若相背者於有之老横目を被仰付外間、見立聞立觸其扱可被申付外条、其段かたく可被申觸外事、

一横目衆不見合所にて右之御法度相背もの於有之老、其者之名在所を槌ニ被問届、則横目衆へ可被申断外事、
一又小者・百姓・町人・浦濱之獵師其外下々のもの歴々へ参合、於不致下馬老馬方引おろし、口中外老鞍輪こくゝり付、其上難見遁障成躰於有之老、横目衆被切捨外様ニ被仰付外条、可有其心得由堅可被申觸外事、
右之條々堅固ニ可被申渡者也、

正保四年三月廿三日

評定所判

134
光久公御譜中

以上

御飛札致拜見^レ、然者琉球嶋^々之御繪圖御延引^ニ付、先御當地御繪圖肥後長左衛門殿御持参^リ之^カ、此方繪圖も御同前^ニ御上被成^レ之由被仰聞、御念入^リ儀忝奉存^リ、長^秋門守^月へ具可申聞^レ、如御書面長門儀先月十六日出船仕罷登^リ、其後ハ自是社、以書状成共、可申上^ル処^ニ御無沙汰本外之至^レ、替儀御座^リハ、被仰聞可被下^リ、猶奉期後音候、恐惶謹言、

^{朱カキ}正保四年

卯月十五日

秋月又左衛門

種重判

嶋津彈正様

尊報

光久公御譜中

覚

一物頭人差人数定之事、
 一軍大將として佐渡守へ可相副人差^リ事、
 一惣之物頭として兄弟衆一兩人者如何^リ事、
 一於長崎船^ニ可取懸之由被仰付^リハ、如何やうに致すへき談合相究、懸合^リ手立^リ事、併其所之仕合^ニよるへき事^ニハ、大躰之様子佐渡承^リて罷在^リハ、

国許にて之相談之為^ニ内談可被申事、

^{朱カキ}在押札

到長崎吳国船^ニ可取懸行之談合於爰許不罷成^リ、其時之仕合^ニよるへきと存^リ事、

一分國中船無之間、長崎表へ相渡人数二度^ニ可差越^リ、左^リハ、彼方之かけ合におそなを^リハん間、出水表へ相集出船^レてハ如何^リ事、

^{在押札}

一長崎へ御國之人数差越^リ時、一人も陸へおろさず法度稠可申付^リ、左^リて 公儀之御奉行衆へ佐渡守毎日罷出、吳國船^ニ取懸被成^リ御沙汰も^レ哉、無油断可被承合^リ、前^々より御あたり^レて御座^リ御衆ハ定御評定も早^々可被為聞^レ間、万事おそなを^リさるやうに内^々可有覚悟事、

一奉行衆^方船^ニ取懸^レ様^ニ被仰出^レて船^ニ取懸^レ共、他所之衆と相合^レてハ手^きハ相見得^ましく^レ間、他所之衆被取懸^レて、手^きあまり^りたる躰^ニ見^レ得^レり時分取懸^レて者如何可有^レ之^レ、自然他所と相合^レて可仕通 公儀^方被仰付^リハ、他所之衆と打^まし^りて者可難成^レ間、先手^敷、又後之手^敷可取懸哉之事、

一長崎へ薩^方之人数引越^リハ、一人も陸へおろさず法度可申付^リ、左^リの公儀之奉行衆へ此方之軍大將日^々参

外の船ニ取懸被成り様子可承り、定御あたり被成り衆
者、様子早被為聞りて船ニ取懸り手立可有之の間、願
者此此方之衆可仕通奉行衆へも内々申入儀肝要ニ
り、御あたり被成り衆被取懸り時分ニ、奉行衆などへ
申入躰にてハおそなをる儀の間、萬事油断有ましき事、

以上

朱力キ
正保四年
卯月廿一日

全御譜中

一番立

御軍代 嶋津東市正(忠 寛)
大頭 北郷佐渡守(久 如)
物頭 平田狩野介(宗 弘)
同 相良李之助(長 貞)
船奉行 志人
惣奉行 志人
兵具奉行 志人

右之外小頭之騎馬之衆・歩行衆可相加り、

朱力キ
正保四年
卯月廿一日

二番立

大頭 嶋津筑前守(久 懸)
物頭 伊東二右衛門尉(祐 昌)
同 土持平左衛門尉

右之外小頭之騎馬之衆・歩行衆可相加り、

朱力キ
正保四年
卯月廿一日

136 御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

邀り呈一封り、然者我等為若輩之處、以御意被任國司職
之旨御高恩何以報哉、雖憚不黜り奉對(光 久) 薩州府君曾以不
可有疎構之旨諏訪李右衛門尉殿為檢者靈社之起請文仕、
則李右衛門尉殿江頼存差上り之条、可然之様御披露所希
り、恐惶謹言、

朱力キ
正保四年
四月廿一日 琉球國司 尚賢判

御老中衆 人々御中

封面 御老中衆 琉球國司尚賢

137 御文庫拾二番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在り

敬白 天罰靈社起請文之事

一此邦相續之儀、我等為若輩之処被 仰付、御芳恩生々世々不可有忘却之事、

一琉球之儀自往古為 薩州之附庸之条諸事可相隨御下知候、若球國之輩奉忘右之御芳恩、企惡逆者有之而縦國中雖致其旨同心候、於愚拙属 薩州之御幕下、毛頭不可相隨逆心之無道之事、

一此靈社起請文之草案写置、讓与子々孫々、對 薩州不可存不忠之旨、可令相傳之事、

右之旨若於偽申上者

謹請散供再拜々々、夫惟當来年号正保四年太歲丁亥四月吉日、月並者十二箇月、日數凡三百六十四ヶ日、撰定吉日良辰、致信心謹奉勸請云々、神名略、

仍靈社起請文旨如件、

于時正保四年丁亥四月廿一日 琉球國司尚賢判

御文庫式拾番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

其後者書状ニあるも不申入り、當地 御兩殿様別る御機嫌能ハ之間、可易御心り、其地相替儀御座有間敷と存

り、

一御犬追物御上覽之時分、今日迄未相知り、多分不圖被仰出儀も可有之哉と被仰り方有之様ニ傳承り、頃迄公家衆多人衆御下ニありつる故、御延引歟と存り、最

早次第ニ御上洛ニあり条急度様子可相知と存り事、

一先日御目見得之刻、別る御仕合能御座り御直ニ色々御咄共被遊り由被仰聞り、ケ様成難有仕合を各前より御兄弟衆・彈正・伯耆守・筑前守其外御使衆などにも被申聞りへと被 仰出り之處、先便ニ申後迷惑仕り、早々各へ被 仰渡尤存候事、

一頼朝卿之御自筆之御書物御文書方ニ在り、御掛物ニ可被遊り間、早々可被指上之由被成御意り、巨細老吉岡宮内太輔迄書状ニ申越り、又此中御南戸方へ有之外御手鑑ニ、被召立置り御文書、御上洛前ニ御南戸方より宮内太輔方へ相渡たる由り、此御書物平田盛右衛門尉見合可被申事有之外間、宮内太輔持參被仕見せ被申り之様ニ可被仰付り事、

一大山主税御赦免之御托(託)其地ニ申上りへととも、我々へ被成御談合可被仰出と被思召御延引之由り、此度御赦免被成之由被 仰出り之条左様ニ御心得被成へくり、

巨細者伊東二右衛門尉方町奉行衆へ被申遣外之間、

彼方より可被申出外事、

一黒川民部左衛門尉意趣切ニ仕外御道具衆之親、此度當
地へ参外由被聞召付、可召下由被仰出外、彼川越三左
衛門尉へ相付申外、ケ様成者ハ遠慮も可在之儀外之
処、兵具奉行不屈之旨御意外間、其通被仰渡尤外、
恐惶謹言、

朱力キ
正保四年
五月二日

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書頭
久通判

山田民部少輔様

北郷佐渡守様

人々御中

封面ニ

北郷佐渡守様

御返書濟

山田民部少輔様

参

久通

五月十六日ノ晚ニ川越三左衛門持下候、

- 一御犬追物時節不相知事、
- 一御目見得御仕合能候事、
- 一頼朝御自筆ノ事、
- 一大山主税助之事、
- 一黒川民部左衛門相手親之事、

嶋津圖書頭

新納右衛門佐

139 光久公御譜中

正文在文庫

為端午之嘉祥帷子単物數十到来、悦思召外、猶酒井讚岐
守可述外也、

朱力キ
正保四年
五月三日
家光
墨印

薩摩侍従とのへ

140 光久公御譜中

先レ是寛永二十一年十二月十六日所レ受レ命之領國之繪
圖、並日州相給領土、伊東大和守祐久・有馬藏人康純・秋月
長門守種春・島津但馬守久雄所レ圖之草稿繪レ之命ニ家臣
肥後長左衛門盛行時勤十人衆役捧レ之而到ニ于東武一也、正保四
年四月十七日盛行發ニ廳府ニ、五月二十四日参ニ著江府ニ、
七月四日詣ニ井上筑後守政清之第一捧レ之而窺ニ可否一、政
清啓ニ聞之ニ云、可也、宜下若清ニ書之カクノ如ク以捧呈ト焉矣、依レ
之招ニ祐久・康純・種春・久雄四家之家老於吾芝第一以ニ
政清之所レ命ニ盛行一傳レ之也、

141 御文庫拾一番箱四拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

今度為訴詔かれうた船到長崎就令渡海、加、爪民部少輔、

野、山新兵衛彼表へ被遣之、依之面々領内浦々向後御

仕置之覚書差越之、存其趣弥念を入可申付旨被 仰出

外、為其如此、恐々謹言、

朱力平
正保四年 六月三日

阿部對馬守 重次判

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

松平薩广守殿

142 御文庫拾一番箱四拾七卷中 御譜中ニ無之

御札令拜見候、去比當地甚雖地震、御城中其外無別條

之通相達目出度被存由尤之事、依之被差越使者、入

念外段及 上聴外處、御機嫌被思召、恐々謹言、

六月五日

阿部對馬守 重次判

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

143 貴墨致拜見、如仰四月廿二日甚地震、御座外得共、

御城内別条無之儀御息又三郎殿被仰遣目出度被思

召、被差越御使者之由、得其意御尤奉存、増々御静

謚御座外間、可安貴意、恐惶謹言、

〔任越〕
〔御譜中ニ無之〕

六月六日

松平和泉守

乗壽判

松平薩摩守様 貴報

木紙ニ

松平薩摩守様

御報

乗壽

松平和泉守

慶安元七月十二日御評定所ニテ請取御返事不入候、

144 御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

かれうた舟長崎へ致着岸ニ付、為御仕置我等共兩人被仰

付、今日大坂致出船、然老長崎仕廻罷上外節直段ニ申

渡外へ上意外得共、江戸ニ御詰外間、家老老人嶋原へ

可被参外、彼地隙明外時分ハ難計外間、聞合可被申外、

恐々謹言、

朱カキ
正保四年
六月九日

野々山新兵衛
兼綱判

加々爪民部少輔
〔徳澤カ〕判

松平薩广守殿
家老中

145
御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々我等義今朝長崎へ参りぬ如此外、以上、

一筆令啓外、南蛮之黒船式艘廿四日ニ硫黄崎へ参り、此
船老為御礼参り、何ニぬ及替儀無之外、先為御心得如此

外、替儀外者重ぬ可申入外之間、其御心得可被成り、恐
々謹言、

朱カキ
正保四年
六月廿四日
高力攝津守
〔忠房〕

鳴津彈正殿
〔久應〕

川上因幡守殿
〔久國〕

北郷佐渡守殿
〔久加〕

山田民部少殿
〔有榮〕

御宿所

146
御文庫廿番箱四拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々薩广守殿御留守之儀外条為御心得申入り、以上、
重ぬ以飛脚申入り、黒船今日未之ニ下刻ニ長崎湊へ入り、
弥々最早別条無之外、為御心得如斯候、恐々謹言、

朱カキ
正保四年
六月廿六日
高力攝津守

鳴津彈正殿

川上因幡守殿

北郷佐渡守殿

山田民部少殿

147
〔枕崎〕
鹿籠廻文留

外城名略ス

右浦々江前々吳國之流船共参不致披露為召置事共ハ無之
外哉、江戸從御奉行衆被聞召度由、新納右衛門佐殿へ被
承り、就其浦々鳴々相尋可申上由被仰下外間、早々被為
聞合御申尤外、以上、

正保四年
民部少輔印

六月廿八日
佐渡守印

因幡守印

彈 正印

御文庫廿三番箱廿一卷中 光久公御譜中ニ在リ

尚々此表相替儀なくハ機遣有間敷外、以上、

一筆申外、南蠻国方黒船式艘為御礼と申外、差渡外、頃日當湊へ着岸外、相替儀も無之外、然共自然人など入申事も可在之かと、隣国之人数少々被差越外様こと申遣外、其元之儀者嶋々も多、其上先者近邊不慮之儀も於有之者其模寄々相談被仕外様こと存、不能其儀外之間、可被得其意外、為其如此外、恐々謹言、

朱力平 正保四年 六月廿九日 馬場三郎左衛門(利) 在判

日根織部(日根野吉明) 正 在判

高力攝津守(忠) 勇 在判

松平薩摩守殿 家老中

丁亥七月二日之飛脚七月十八日ニ到来、

光久公御譜中

猶々能々可被入御念外、石火矢只今船にて廻し外、為御心得外、以上、

祇今長崎方之御觸状ニ薩广之人数尤可被召寄外へ共、御國者嶋々浦々若不慮之儀も哉外ハんま、もよりを格護可被申ため御免外由被仰越外間、猶以心遣ニ外条、上下鉄鉋衆二百人差越外、追々可被参外、不慮と有之者嶋をも破り陸地へらうせき不仕様ニ嶋をも守、黒船参外者早々兼日申定外所ニ火を立、其上ニ早船にて可被申越外、恐々、

朱力平 正保四年 七月二日

山田民部少輔 有栄判

本郷佐渡守 久加

川上因幡守 久國

嶋津彈正大弼 久慶判

田原主膳殿 吉利仲四良殿 大野正右衛門尉殿 阿多内膳殿 田尻八兵衛殿

人々御中

覺

一 今度長崎に黒船就来着、當國之浦々嶋々迄警固衆丈夫
ニ可差置之旨、從長崎御奉行依被 仰出、人数御催促
外之事、

一 黒船之一着者江戸被相待御下知り、万一其以前ニ氣任

ニ企帰帆、從長崎洩参り者可成程可押留旨被仰出、

於其儀可及防戦外之事、

一 戦場之勝利者軍衆一同ニ随下知儀可為專一外事、

一 右之下知其物頭方可被申渡外之間、萬事可被守其意事、

一 主取之手を離れ他之手ニ付、縦雖致分捕高名外曲事ニ

可被仰付、自前代之御法度相定外事、

右條々無緩疎可被相守者也、

正保四年七月三日

民部少輔

佐渡守

因幡守

彈正大弼

一 正保四年夏長崎に黒船参り故、此御方様方表久見崎迄

御人数被差越り、一番備大筒頭東郷肥前守殿・伊集院
長右衛門殿・上井勘兵衛殿・新納仲左衛門、二番備弓
頭平田大監物殿・上原小十郎殿・相良土佐守殿・東郷
長左衛門殿、三番備新納加賀守殿・川上左近將監殿、
四番備嶋津大膳大輔殿にて外、一組ニ付士衆多人數被
召付り、尤其節人数備之書付所持仕り、其節仲左衛門
廿壹人之御賦為被仰付由外事、

大高

東郷肥前守

伊集院右衛門尉

川田譚右衛門尉

日高新左衛門尉

湯田平兵衛

指宿盛左衛門尉

大脇善兵衛

滿尾與左衛門尉

有馬大藏助

梶原字左衛門尉

黒木袖左衛門尉

樽木太郎兵衛

濱田宋女正

赤垣右左衛門尉

堀之内次右衛門尉

大高

新納仲左衛門尉

上井勘兵衛

吉番

弓頭

平田大監物

上原小十郎

中頭助右衛門

長瀬甚助

酒匂半八

松下千左衛門

家村源之允

肥後少右衛門

石塚城之助

市來權右衛門

寺師三助

淺田権右衛門

東郷六兵衛

岡村久左衛門

四位刑部左衛門

牧瀨新助

久永吉兵衛

弓頭

相良土佐守

東郷長左衛門

四本五左衛門

宮原壹右衛門

原田盛助

堀之内勘左衛門

田中兵右衛門

飯野半兵衛

中原猪右衛門尉

西源藏

橋口崎右衛門

中原右衛門兵衛

江藤為左衛門

山口八左衛門

上村源六左衛門尉

光久公御譜中

尚以三郎左衛門申外、御念入御状令披見外、以別紙可申入外へ共、相替儀も無之外間、如此外、以上、猿渡大炊助・相良李助口上之通承届外、人数少く甕嶋其外所へ差出被置之由尤ニ外、黒船帰帆致答ニ外ハ、前廉自是可申入外、左様ニ無之内ニ自然其邊参外ハ、押留外様ニ御計可有外、爰元之儀ハ上意相待在之事ニ外、今月末ならてハ江戸方之被 仰出在之間敷と存外、猶委細兩使へ申渡り間、具ニ兩人方可被申遣外、恐々謹言、

朱カキ

正保四年 七月五日

馬 三郎左衛門

利重判

153

御文庫廿番箱四拾三卷中

(付紙) 一御譜中ニ無之

尚く此方六月初方以外之日照にて外、御方如何御

嶋津彈正スルハ殿
川上因幡守殿
北郷佐スリキレ
山田民部少殿
七月五日

日根 織部正
吉明判
高 攝津守
忠房判

有川新兵衛 桑幡八郎兵衛
相良九左衛門 西牟田助右衛門
関 作十郎 高橋興次郎
肥後長石衛門 須子田吉左衛門
鳥居勘助 成合民部左衛門
肥後大左衛門 蘭田善右衛門
中原茂兵衛 成合兵太
笠間主計助 川崎覺助
木崎場左衛門 池田九石衛門
東郷刑部 谷山少作
三原監物 岩切孫兵衛
笠間伊織佐 伊地知休弥
日渡茂右衛門 常吉源太
宇田斎宮 常 学
西俣一角 本田二郎五郎
東才兵衛 根占休兵衛
田口内蔵允 左藤敏右衛門
土村求馬助 藤井清左衛門
竹之内左之助 久松左次兵衛
原田正左衛門 亀塚長右衛門
東郷左近兵衛 若松跡五右衛門
税所助次郎 玄 俊
緒方源藤 相良志摩正

座外ハん哉、如此ニ外ハ、耕作等も痛可申と存事
外、以上、

一書令啓外、仍稅所少兵衛事御用御座外間、可召留之
由被 仰出外故、此中召置外へ共、今程無御用外条可
召下之通被仰聞外付此度差下申外、

一北郷殿家中見廻之儀、猿渡大炊助へ被仰付置外、就其
誰そ可被相付旨大炊助被申外、御兄弟衆家中承外衆へ
も輕衆老人充被成御付外間、誰そ可相付哉被得御意由
外、御付外ハ、小森隼人佑可然由出合外通達 上聞外、
御返事ニ右隼人佑然々不被成御存外へ共、国元より被
申上外間、可然之由被仰出外、

一先年飢饉之刻、諸国菓子之類致商賈儀、又者猥ニ酒造
外事御法度之由被仰出外、其後御赦免之趣不被仰出ニ
付、諸外城町于今然々商賣不仕外、此度御赦免外可
被下之由申出外通得御意外、御返事ニ先年飢饉之刻右
御法度之由被仰出外へ共、爰元もはや御赦免と見得外
間、御国も同前ニ可被仰付之旨被 仰出外、

一御犬ニ付鹿兒嶋衆中・寺社家・山伏并外城衆中・寺
社家・山伏方致御祈念御札守進上之通申上外、御返事
ニ度々御祈念之札守被差下外、御悦喜ニ 思召外、家

老衆前より礼可被申之由被仰出外間、何れもへ可被仰
渡外、

一肥後長左衛門持參之繪圖去四日ニ井上筑後守様へ右衛
門佐・長左衛門致同心懸御目外、繪圖之致様殊之外入
念外通被成御褒美外、併少々直り可申所も可有之外
間、一国分考此方にて書調、餘者其地にて相調外可
然由談合仕外、尤此方にて惣別相調可申儀ニ外へ共、
御失墜過分ニ入可申儀外間無其儀外、當分考繪圖未筑
州老御方へ被召置外、緩々と御覽外可有御返との儀
外、彼方方御返し被成次第追付首尾可申付外、巨細考
長左衛門方彈正殿迄可被申外間可被聞召外、

一琉球從王位 太守様へ書状參外、御報被遣外間、隨使
者帰帆之刻可被遣外、我々へも金武王子・三司官より
状預外、返事之儀考別書ニ申入外間不具外、尚期後音
之時外、恐惶謹言、

七月十日

新納右衛門佐

久詮判ナシ

鳴津圖書頭

久通判ナシ

山田民部少輔様

川上因幡守様

北郷佐渡守様
人々御中

光久公御譜中

今月九日之御状今晝到来、令披見外、

一其元無人外間、今少人数可指越通被仰越外、人躰百人

則申渡外、山川(掛籠郡)表當時風上にて外間、内場之衆申付外、

追々山川出船たるへく外、

一関船之儀ハ久見崎御船手へ被仰遣之由從此方も中遣

外、

一上原小介殿ニ伊作衆古墻織部佑相付被指越外、京泊表(川内)

へ物頭衆ハ肥後より被仰合外付、若天草近邊与風人数

可入儀も可有之との用意にて外、又勿論題目其方浦内

湊之御用心のため京泊へ被着揃、今少致談合、追々様

子可申入り、人数之儀者御用次第猶も指渡可申外間、

其御心得可被成外、

一御兵具衆無之外、長崎へも鉄炮衆百五十程指越外、以

彼是御用外条東郷拾左衛門殿山田衆廿五人召烈、土持

權之頭殿へ被相替、京泊迄被参り様ニ可被仰渡外、爰

元度々此中出合外へ共、我々申外も御兵具者借船にて

相調、其元迄被参儀外間、召置度と申外へ共、京泊へ

光久公御譜中

覚

ハ被参りハてハ可難成と出合外条如此外、石火矢方之

儀ハ御困之衆者誰もく打外て見たる人ハ無之外、町

田弥兵衛殿ハ庄内御弓箭之時分白濱七介殿と兩人志和

知之城こうたれたる由外、彼人并善介なと談合にて被

打外様ニ可被仰付外、勿論五郎兵衛・長兵衛方者石火

矢之儀可被仰付外、

一玉葉之儀則長谷場兵右衛門殿方遣し被申外、委者古墻

織部佑可被申達外、恐惶謹言、

朱カキ
正保四年 七月十一日

川上因幡守
久國判

北郷佐渡守
久加判

鳴津弾正
久慶判

種子嶋左近大夫殿

吉利仲四郎殿

大野將右衛門殿

阿多内膳正殿

御報

一 串之湊堀つとひり人衆にて弥可被仰付り、定る油断有間敷と存り事、

一 下甕之西表ニ吳國船方水取り處在之由、新納仲左衛門殿昨日嘶にてり、晝者煙不見得様人をふせおかれ尤り、与右衛門殿口状ニ可相違事、

(上甕)
一 浦内之湊切者成間敷り哉、可被御覽合事、

一 自然浦内へ船参り時、京泊之船立百余艘可入湊然々無之由、去々年方顯然りといへとも可被成様も無之儀り、乍去船之置所も可在之り哉、前以京泊と被仰合尤り事、

一 浦内へ船参りハ、長崎之御奉行衆御渡可為必定り、晝等之不足者向田市來之湊御假屋へ被仰遣にて社可有之哉之事、

一 甕浦内之湊者一段能り、此湊ニ黒船参りハ、從国元人数渡り船立も、從長崎御奉行衆御越可被成御船立も可被召置湊別ニハ無之り趣、又浦内之湊之上ニ瀬上と申(マ)昇之御座り、是よりハ長崎樺嶋・天草・薩摩守領分阿久根と申所迄も見得り間、御船も夜共被召りハんハと存り由、去々年之春彼船之儀從江戸被仰下り刻、長崎へ甕嶋之絵圖を相添具ニ申上置り、是又為御存り事、

一 若船参りる御奉行衆於御渡海者左様之御用心等者彈正存儀にても無之り、御老中衆へ可為御念遣り条、吳國船方方差引申儀にて無之り事、

一 右之二艘之黒船之儀者長崎御奉行并隠岐守様被任御指圖、如何様成共可被討果御評儀肝要り事、

一 若又別ニ左右聞船など新敷於來着者、少も所中不騒様何とそ御たましりての上者、楫柱をも被取置り様ニ有度り、兩様ニ御談合被成り覽と從安元ハ存計り、今度之船も無着岸、兩日前ニ沖ニ石火矢之音仕ニ付り、隠岐守様へハ先月廿六日ニはや被聞食、志和久方々へ加子之御才覚為有之由承り、内々御汕断有間敷り事、

朱カキ

正保四年

亥七月十九日

嶋津彈正

種子嶋左近大夫殿

吉利仲四郎殿

穎娃右京亮殿

大野將右衛門尉殿

阿多内膳正殿

156

御文庫拾一番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在り

猶以先日夜中御出之儀も具達上聞り、御前之首尾能

御座の間可御心安り、以上、

昨日者預御使り、仍從御国元今月二日之飛脚到来り、長崎奉行中の方先月廿九日ニ御国元御家来衆へ以状被申入りハ、今度長崎へ黒船入津ニ付、近邊之衆へハ少々人数をも長崎表へ被指出り様ニと被相觸りへ共、御国之儀者嶋に湊もり間、左様之所々ハ人をも遣置り様ニと被申入り付り、右之所々へ物頭五三人宛、鉄炮百二百宛遣置り由、御家来衆方被申越之旨奉得其意り、長崎方左右無之以前方、御領分之儀少も無御油断被仰付り由承届り、長崎高力攝津守・日根野織部・馬場三郎左衛門方も貴殿御留守居衆無御油断趣、御城へも申入り間可御心易り、猶期貴面之節り、恐惶謹言、

宋力平

正保四年

七月十九日

忠勝判

松平薩广守様

酒井讚岐守

人々御中

忠勝

157

光久公御譜中

從松平隱岐守様爰元御家老衆へ被仰遣り御意趣之覚

長崎にて相良李助殿・猿渡大炊助殿へ隱岐守様より被成

御意り者、今度長崎へ黒船来着り、式艘之儀ニり間、從薩摩之人数入間敷り、薩摩御領内浦津廣り間、御番手無油断可被仰付り、若此黒船此節者使者船之由り間、從江戸可追出之通被仰下りハ、黒船出船五日前ニ御廻文可被遣り、薩摩表罷通り共かもひ不被申様ニと可被申渡り、自然其廻文不廻内ニ氣任ニ長崎をかけ出しりハ、薩摩錨嶋針筋之儀ニり間可罷通り、左りハ、成程可打留由、右兩人前方薩广御家老衆へ早く可申遣通御承にてり、伊地知一角を以被申上り由り、以上、

宋力平

正保四年

亥七月十九日

158

北郷久加譜中

正保四年丁亥南變黒船来著于肥前國長崎津、上使松平隱岐守定行・井上筑後守奉ニ台命一、下ニ向於長崎一、追ニ放黒船一、此時久加與ニ相良權兵衛ニ從ニ江戸一奉レ嚴命到レ長崎、得ニ定行及諸將之指揮一、勤勞不少、長井主水利典從レ之、

159

光久公御譜中

一筆令啓上り、先以薩摩守殿別る御無事ニ御座被成り間

可御心安り、然者長崎黒船就着岸御心遣之段令察り、随

而拙者家来之者共へ、折々被入御念被仰聞り通、申越令

承知忝存り、相替儀於有之者留守居之者共へ被仰知りハ

、弥可忝り、猶期後音之時り、恐惶謹言、

朱カキ
正保四年 八月朔日 有馬左衛門佐 康純判

嶋津彈正様

川上因幡守様

北郷佐渡守様

人々御中

160 光久公御譜中

今度着岸之南蠻黒船二艘共ニ近日帰帆申付り間、自然風

悪陸近く参り者尤彼舟之もの陸へ上り不申様ニ、又日本

人黒船へ通用無之やう浦々鳴々へ堅可申付り、已上、

朱カキ
正保四年 亥八月三日 馬場三郎左衛門尉 (和) (重)

山崎權八郎 (正) (信)

日根野織部正 (吉) (明)

高力攝津守 (忠) (歴)

右者於政所長尾左太夫殿を以被仰出り、以上、

161 光久公御譜中

覚 薩摩出水より日向志布志迄薩摩之霧固衆へ申合候条書之留

一 今度長崎に來着之黒船者南蠻依新王替之使船、常之船

ニ者替り条、自江戸為 上使被差下、井上筑後守殿・

山崎權八郎殿帰帆被 仰付り、浦々鳴々より日本人飛

乗不仕様ニ、勿論黒船より陸へ人あがらざる様ニ可申

付旨、從長崎政所去三日之御日付之以御条書被 仰出

り、今朝令頂載り事、(感)

一 先年琉球とけす村之濱并同国八重山嶋、其後當國甌之

嶋南面之磯ニ為何船より上りり共不相知、はてれん岩

窟ニ踞りを、所之者見付り、是も到于長崎差越りへハ、

見付り者ニハ被下御褒美り、若彼船ニ日本人を隠置、

夜中ニ端船より或何処之磯、或渚等ニ上置儀も可有之

条、昼ハ常々のことく遠見之ものに被申付、晚ハ日暮

より夜明までの間汀ニ人を立、各乗馬にて行廻堅固ニ

可被致御番事、

一 黒船ニ及横目を付、夜ル出させましくり事、

一 きりしたんの族見付りものニハ急度可被下御褒美事、

一 黒船二艘長崎之沖ニ帆影も不見得時分、政所より御注

進可有之迄者、右之御番不可有緩疎之事、

右条々堅可被相守者也、

正保四年八月七日

(川上久國)

因幡

(島津久慶)

彈正

正本在蒲生

(符憑)
〔御譜中ニ無之〕

覺

一 一夜く之番之人数一度く可被書記事、

一人居遠嶋崎洲嶋などへハ木屋をも可被懸事、

一人數不足之所者もよりの奉行と以相談可被立渡事、

一 横目衆廻り内ニ可有其心得事、

一 遠所より人数被寄りハて不叶所者人数可被申渡り、左

り此方江其段早く可承外事、

一 獵船ハ晝ハ沖見得り所迄ハ不能口能、船影不見得所迄

ハかけ出儀者かたく法度可被申付事、

一 自然所より氣任之外城有之りハ、即無用捨此方へ

可被申越事、

以上

川上 久國

因幡守

島津 久慶

彈正大弼

正保四年 八月七日
丁亥

163

御文庫式拾番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在り

追り申り、阿部對馬様大坂へ被成御越り間、彼地へ御使

被進可然存り由態以飛脚申越り、其節者先月廿六七日比

爰許御立之由申り得共、御用共り哉相延、今月二日ニ被

為立り、先書之日限ニ少相違り間、為御心得申入り、將

又此中久々其許之無御到来、無御心元奉存り処、繪圖持

參之衆三人并田尻八兵衛被致到着、其御地別条無御座り

通細く承届大慶之至り、爰許御同前之至り、可易御心、

此度被召上り繪圖一段能出来り、無口能相納り間、右

三人近日可為帰国り条萬々期其節り、恐惶謹言、

朱力キ 新納右衛門佐

正保四年 八月十日 久詮判

北郷 佐渡

久加判

鳴津圖書様

川上因幡様

山田民部少様

人々御中

封面

一 八月十日之状九月十五日ニ有馬久右衛門被持下候、

一 阿部對馬様先月廿六七日ニ寢元罷立候由申候へ共、今月二日ニ被為立候由申來候

事、外名前略

一書申外、今月三日長崎政所依仰渡、俄ニ浦々張番被仰付申渡外処、早速各被為越殊ニ行儀能御調外由、追々申来肝要存外、然者先夜前北郷佐州(久懸)從長崎被為帰、長崎御奉行も皆々本国之様ニ御歸之由外、其上黒船も打續北東風吹外間、程遠可致帰帆と功者之船頭共皆々申外条、番被為引、各早々可被為帰外、為其如此ニ外、恐々謹言、

八月十六日

川 因幡守

久國判

(付延)
「御請中ニハ無之」

鳴 彈

正 久慶判

市來 串木野 京泊 西方

阿久根 瀬之浦

夜番衆中

御文庫式拾番箱四拾四卷中 光久公御請中ニ在リ

急度以飛札令啓外、嶋津玄番殿(忠紀)此中そろくと御煩外處、今昼下方火急ニ被成御座由夜入時分ニ申来、殿様委被成御見廻外へとも無御待付、今晚戌ノ刻御死去ニ由、何共々々笑止絶言語外、恐惶謹言、

朱力本

正保四年

八月廿二日

新納右衛門佐

久詮判ナシ

嶋津圖書頭 久通判

山田民部少輔様
東郷佐渡守様
川上因幡守様

人々御中

按ニ玄番別忠紀ハ太守家久七男ニテ又四郎久飯ノ後嗣ト為ル、正保四年丁亥八月廿二日於武州卒、年廿六トアリ、旧垂水島主ノ祖也、

新納氏家藏

尚々伊弥右衛門殿へ御心得頼存外、以上、

急度令啓入外、五日以前ニ老被入御念使被差越過分至極外、黒舟無口能帰帆外由、我々事及致帰鞍満足仕外、然者伊主膳正殿(伊地知重政)當分留守之儀外条、諸事被入御念肝要外、三日前三老大風吹外、御方如何、承度外、猶追可申談外、恐々謹言、

正保四年也 八月廿六日

新納加賀守

忠清判

白坂大炊左衛門殿

川野与右衛門殿

西田和泉守殿

御符所

上包

西田和泉守殿

川野与右衛門殿 忠清
白坂大炊左衛門殿

新納加賀守

御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々御縁中之儀被仰出外、為御欣之御使伊与へ諷方
甚左衛門被仰付、今日此元罷立外、是又為御存外、
已上、

態申入外、然者一昨廿八日 太守様被遊御登城外之處ニ
公方様御直ニ、犬追物之儀場所致出来次第可被遊 御上
覽之旨被仰出、弥御安堵之御事ニ御座外、左外而御退座
以後又三郎様御縁中之儀 松平河内守様御息女被 仰定
(編心)
之由 太守様・酒井河内守殿御同前ニ御承外、誠ニ思召
儘之御仕合無殘所儀共ニ外、河内守殿御事ハ隱岐様御甥
(定行)
之儀ニ外ニ付而如此御座外、此由御はき様并彈正殿御夫
婦其外御兄弟中一々ニ被仰入尤之由 御意外、將又於銀
分量之儀先便ニ申越外、定相達外ハんと存外、猶追々御
吉左右可申加外、恐惶謹言、

朱力平
正保四年 九月晦日

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書頭 久通判

川上因幡守様
北郷佐渡守様

山田民部少輔様
人々御中

村而ニ名略
御大追物十一月十三日ニ御成就之由之御状十一月廿七日ニ飛脚到来、
此封面ハ裏打ノ節簡違也、

御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々右之通早々可申下之旨任 御意本田内膳差下申
候、為御心得外、以上、

一書令啓入外、然者御犬追物上覽之日限、明後十三日と
昨日被仰出外、先以爰元上下大慶之至可被成御察外、於
其元各可為御同意と存外、正日御仕合之儀者追々御吉左
右可申入候、恐惶謹言、

朱力平
正保四年 十一月十一日

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書頭
久通判

北郷佐渡守様
川上因幡守様

山田民部少輔様

人々御中

封面ニ左ノ如シ、名ハ略

十一月十一日之状本内膳十一月廿六日之朝被持下候、

一御犬追物十一月十三日ニ可有御上臈申被仰出ノ事、

光久公御譜中

光久憑レ執政告一

家光公ニ曰、仰願張下行於所レ傳ニ吾家ニ之犬追物、以備ニ

台覽一矣、

公容レ焉結ニ構武州王子村一以築ニ馬場一營ニ假御殿一此地也

將軍家放鷹之地而本有ニ御茶亭一、構ニ御棧敷於其南一也矣、豫選ニ出弓馬堪能之士一、日夜習ニ練之一、恭期ニ高

覽之期一耳、光久登ニ柳營一、拜ニ謁 嚴顔一之次

公口自謂曰、犬追物張行之場結構成則促レ 駕覽レ之、光

久欣々然退也、正保四年丁亥十一月十日執政傳ニ 御旨ニ

曰、以三十三日一宜レ促ニ其術一矣、越十三日晝天光久及又

三郎久平將ニ射手之士ニ到ニ于王子村一、俟ニ尊駕光臨一

張ニ行之一、

家光公已上刻入御、諸國諸邑之侯伯及旗本之列士或供

奉、或豫參、

將軍家著ニ御于御殿之上壇一、中根壹岐守正盛・牧野佐渡

守親成・久世大和守廣之等以下近習並小臣等伺候矣、御

座之西門者水戸中納言頼房卿・尾張宰相光義卿・紀伊宰

相光貞卿・水戸三位中將光國卿座レ之、其次者井伊掃部

頭直孝・酒井讚岐守忠勝・松平讚岐守頼重・酒井雅樂頭

忠清・松平伊豆守信綱・阿部豊後守忠秋・永井信濃守尚

政・朽木民部少輔植綱等濟々焉列居、井伊鞆負佐直滋・

小笠原右近大夫忠眞・奥平美作守忠昌・本多内記政勝等

座三列之、西方南頰之棧敷者松平越後守光長・松平長門

守秀就・松平新太郎光政・毛利甲斐守秀元・松平越前守

光通・松平相致守光仲・松平出雲守直政・松平阿波守忠

英・松平土佐守忠義・松平信濃守勝茂・松平安藝守光晟・

藤堂大壘頭高次・細川肥前守光尚・森大内記長継・松平

刑部大輔頼元・松平播磨守頼安・松平淡路守利次・織田

出雲守信友・毛利和泉守光廣・立花左近將監忠茂・京極

山城守高國・有馬中務少輔忠郷・黒田右衛門佐長之等列

座、光久者其前庭蹲ニ踞于簀上一、御席之東面者旗本之列

士在職之諸士接レ膝充滿焉、庭上者大番士並步卒為ニ警

衛一焉、井伊直孝・酒井忠勝・酒井忠清・松平信綱・阿

部忠秋等依レ徵候ニ乎 御前、水戸・尾張・紀伊之四卿拜ニ

謁將軍家ニ而后召ニ光久ヲ於 御前、恩言叮嚀也、光久

敬奉レ謝レ之御樽五荷・杉折三合・御肴一折尾進五獻之一、

久平亦取レ拜謁奉レ獻ニ御樽三荷・杉重二組・御肴一折一

御五僉忠清執ニ奏之、光久合レ命退初ニ犬追物一也、其後

列侯諸士咸謁ニ 嚴顔一也、小笠原忠貞依レ命近三侍 御

前、阿部五郎三郎正義持ニ御腰物一在ニ 御前、上手

犬追物放レ犬七匹中矢三、次次手亦同レ之、下手組者放レ

犬七匹中矢四筋也、

將軍家褒ニ稱之一、觀者嗟嘆之聲不レ止也、三手之犬追物

射畢、家光公請ニ今教ニ一手組射一、光久敬奉テ之簡ニ其尤

物一射レ之、各揮ニ其手段一、倍レ初放レ犬十匹中矢八筋、

將軍家喜ニ懷襟一藉甚也、光久蒙ニ 恩旨一伺ニ候乎御殿、

視レ之射終則日既過ニ未刻一、水戸・尾張・紀伊之四卿取ニ

拜謁一而所レ謝レ弄ニ奇觀一、

列侯諸士僉奉レ謝レ之、其後渡ニ御于御茶亭ニ進ニ御膳一、此

際於ニ棧敷一各有ニ饗應一、水戸・尾張・紀伊四卿一座、松

平出雲守勝隆奉ニ行之一、諸大名一座、安藤右京亮重長・井

上河内守正利奉行、至ニ于御譜代御家人一者大番頭等奉ニ

行之一、其外飲食者甚多矣、饗應既闕而徵ニ光久・久平

諸御茶亭一、口自謂曰、光久年來以ニ此事一掛ニ胸臆一、誠

心相悵、天氣快晴實可レ歛也、井伊直孝・酒井忠清・松

平信綱・阿部忠秋等伺候、光久・久平接ニ 公席一、拜ニ食

御吸物一、賜ニ御盃一、頂ニ戴于御肴一之時、忠清以ニ御脇

指ニ授レ光久、光久敬戴退而進ニ獻御腰物一尾、忠清執ニ

奏之一、其後又三郎久平賜ニ御盃一、拜ニ戴御肴一、恩ニ給

御腰物一行、久平亦奉レ獻ニ御脇指一、忠清奏レ之傳之、

父子拜謝退出矣、此日射手所役之士及僕從各賜ニ饗應一、

可レ謂ニ榮幸一也、將軍家到ニ申刻一 還御、

170 正文在文庫

真犬追物手組但闕次第 正保四年丁亥十一月十三日

上手

嶋津諸右衛門亮正 鎌田又七郎

本田甚兵衛 上井采女

嶋津弥市郎 吉田長四郎

嶋津又右衛門 本田久左衛門

福屋助左衛門亮定 肝付半兵衛

嶋津四郎左衛門 種子嶋為兵衛

檢見

喚次

嶋津十郎左衛門入道

嶋津源左衛門

嶋津縫殿亮

本田右衛門

正文在文庫

嶋津又次郎

菊池太右衛門

真犬追物手組但鬮次第

正保四年丁亥
十一月十三日

嶋津上野

伊勢兵部

次手

嶋津又左衛門

嶋津左大夫

嶋津市正

嶋津源介亮

正文在文庫

嶋津七兵衛

嶋津作左衛門

犬追物手組但鬮次第

正保四年丁亥
十一月十三日

本田六左衛門

村上内記亮

嶋津市正亮

伊勢兵部

仁礼左近

入来院石見

種子嶋次郎右衛門亮

種子嶋為兵衛亮

嶋津長門

村上左京

嶋津又右衛門亮

嶋津七兵衛亮

嶋津中務

山田弥九郎

嶋津主計亮

嶋津上野

檢見

喚次

村上左京

村上内記

嶋津又左衛門

嶋津左大夫

嶋津安藝

福屋助左衛門亮

正文在文庫

檢見

喚次

真犬追物手組但鬮次第

正保四年丁亥
十一月十三日

嶋津又左衛門

吉田久兵衛

下手

嶋津安藝亮

嶋津主計

171 ○同十六日光久・久平豫承ニ執政之旨ニ而引射手之人數

平田兵十郎

柏原弥太右衛門

及關ニ其事者登ニ 玉城ニ奉レ謝_{サキ}郷日促ニ華軒_{サキ}一辱_中

種子嶋次郎右衛門亮

嶋津助六

高覽_上

家光公出^三御白書院上壇^一見^レ之、光久奉^三謁見^一進^三獻

御太刀^利一腰・御馬^一匹^{粟毛}・御小袖^三三十^一・白銀^二二百枚^一

酒井雅樂頭忠清執奏、又三郎久平同奉^二獻御太刀^式禮^一

腰・猩々皮十間・白銀百枚^一、家臣島津圖書久通・新

納右衛門久詮・島津安藝久雄・島津市正忠弘・島津^{伊集}

源助久立・鎌田又七郎政由・伊勢兵部貞昭・町田勘解

由久則・鎌田源左衛門政有九人一同於^二國外^一奉^三拜禮^一

而退去、其後 將軍家出^三御于下壇^一、見^レ射士及關^レ事

者四十一人^一也、乃島津^川上野久運・島津中務久茂・

島津^新四郎左衛門久辰・島津彌市郎久弘・島津^山諸右

衛門久廣・島津^北作左衛門久盛・島津主計久延・島津

^新又左衛門久正・島津^川十郎左衛門久慶入道芳庵・島

津^川助六久處・入來院石見重頼・肝付半兵衛兼屋・山

田彌九郎有清・本田六左衛門親昌・吉田長四郎為清・

村上^{比志}内記國安・菊池^村太右衛門堅經・新納刑部^山忠秀・

伊東二右衛門祐昌・島津^北又次郎忠昭・島津^野源右

衛門久往・島津^川佐太夫久宜・島津^山又右衛門久貞・

島津^平七兵衛忠昭・村上^{比志}左京義時・仁禮左近景頼・

柏原彌太右衛門公宗・平田兵十郎宗正上井采女兼延・

本田甚兵衛盛親・本田久左衛門親宣・本田右衛門親貞・

種子島二郎右衛門時貞・種子島伊兵衛時壽・吉田休

兵衛清房・福屋伊賀兼昭・福屋助左衛門兼全・稅所彌

吉篤英・福崎新三郎重正也、加之各被^二恩給^一也、自^二

島津久通^一至^三伊勢貞昭^一者御小袖三襲、自^二町田久則^一

至^三菊池堅經^一者同二襲、自^二新納忠秀^一至^三福崎重正^一

者同三領拜^三戴焉^一也、執政松平伊豆守信綱・阿部豊後

守忠秋着^三座柳間^一、御奏者番從^レ之、而召^三渠等^一與^レ

恩賜射手之中、唯島津^山久廣・島津^新久宗兩人者以^レ

病雖^レ不能^レ巧^二嚴顔^一受^レ賜與^三伊東祐昌等^一無^レ差

矣、同十二月二日光久・久平奉^レ令而帥^二前件之從臣^一

登^二便殿^一、取^二謁^一

家綱公^一奉^レ謝^レ辱^二

將軍家之 台覽^一、井伊直孝・酒井忠清・松平信綱、

松平和泉守乘壽・酒井日向守忠能等伺候、光久獻^二上

御太刀^光長^一・御馬^一匹^鞍・白銀百枚・猩々皮十間、忠能

執奏、久平奉^二獻御太刀^一・馬代黃金一枚・御服十領、

忠能同奏^レ之、家綱公召^レ光久 御手自與^レ熨斗以^レ忠

能賜^二御腰物^光則^一、拜戴退則進^二上御脇指^光吉^一忠能奏^二達

之、次召^レ久平拜^二給御脇指^光兼^一、久平亦獻^二上御脇指^一

吉、其上下獻酬之禮同^レ光久矣、從臣等亦奉^レ謁見各

拜_二領或御服_二襲、或三領、或二領、於戲非_レ縁_三弓馬之道_一爭受_三此賜_一誇_二其榮_一哉、犬追物之於_レ當家良有_レ以哉、

172 綱久公御譜中

犬追物者有_二其由緒_一、當家家傳之射術也、故父光久訴_下于張_二行犬追物_一而備_中

將軍家之御覽上、乃達_二台噫_一許_レ之、因構_二假殿於武州王子原_一、正保四年丁亥十一月十三日渡_二御

將軍家光公假殿、於是光久張_二行犬追物_一以備_二于台覽_一、綱久如而從_レ之、是時

家光公以_二寶刀一腰_一、賜_二于綱久_一、綱久亦獻_二上御脇指一腰_一、包光同月十六日登_レ營而稟_下犬追物備_二台覽_一

之忝上、同年十二月二日登_二西丸_一奉_レ謝_レ之、獻_二呈御脇指一腰_一、於儲君家綱公_一、

家綱公亦以_二寶刀一腰_一、兼光賜_二于綱久_一、詳見_二于光久之譜_一、

173 圖書頭久通譜中

大樹御者故荒木十左衛門尉元滿賜_二馬書共九冊免狀印可於老父久元_一矣、久元既_レ亡、故正保四年之冬返_二進于賢息十左衛門尉元政_一、元政受_レ之加_レ與書不_レ欠_レ一書賜_レ久通、久通亦為_二元滿之的傳_一是以如_レ斯云云、

○正保四年丁亥十一月十三日

將軍家光卿有_レ台覽犬追物於武州王子村、我之

太守光久公所_二以張行_一也、同月十六日新納右衛門久詮・町田勘解由久則・鎌田源左衛門政有率_二數輩_一之射

手、有_二可_レ候_レ營中之命_一、各詣_レ營中、先久通・新納右衛門參_二進于白書院_一、

將軍家、次 太守之連枝謁_二于同座_一也、丁_二此之時_一久通賜_二衣服三重_一、十二月二日詣_二之丸_一謁_二于

亞相、次序亦不_レ違_レ前日、今日亦賜_二衣服二重_一、是又我家之眉目何有_レ大_二於此_一乎、其後 太守亦昇寶刀

治工、是則 將軍家所_二以犬追物台覽之賀_一、祝儀也、

174 市正忠廣譜中

正保四年十一月十三日張_二行犬追物於王子村_一備_二

將軍家光公之台覽、忠廣列_二射手_一、同十六日光久公・

久平公帥_二射士並所役之士_一登_二江城_一、取_二拜謁_一、繼家

臣亦奉_レ汚_ニ 台顔_ニ各有_レ恩賜忠廣亦賜_ニ御小袖三襲_一、
同十二月二日於_ニ 二御丸_一奉_レ拜_ニ謁_一
巫相家綱公_ニ拜_ニ戴御小袖二重_一、

薩州家譜中

備前忠清

越前守忠榮

民部少輔久基

久弘

鎌菊 彌市郎

寛永五年戊辰八月二十四日誕生、母島津下野久元女、

正保四年丁亥十一月十三日於武州江戸王子村張_ニ行於

犬追物_一、備_ニ

將軍家之台覽_ニ之時、久弘在射手之列而奉_レ謁_ニ

將軍家_一矣、

176 川上久慶入道譜中

正保四年丁亥十一月十三日於_ニ武州王子村_一張_ニ行三手之

犬追物_一令_ニ之_一 ヲシテ

將軍家光公之備_ニ上覽、芳安為_レ檢見、同月十六日詣_レ

營中拜_ニ謁_一

家光公_ニ賜_ニ衣服四領_一、十二月二日登_ニ丸_一謁_レ

巫相賜_ニ衣服三領_一矣、今度之犬追物一點實無_レ故障所_ニ

以遂_レ成就、由_レ是 太守光久主匪_ニ翹為_レ褒美_一、賜_ニ

太刀及白銀五十葉_一也、

177 新納又左衛門久了譜中

正保四年十一月十三日於江戸王子村張_ニ行犬追物_一、備_ニ

于 將軍家台覽_ニ之時、久了勤檢見、奉拜謁_ニ

台顔、頂戴御衣服、

178 樺山諸右衛門尉久廣譜中

正保四年十一月十三日 太守光久公於_ニ武州江戸王子

村_一張_ニ行犬追物_一、備_ニ

將軍家之台覽_ニ之時、久列_レ射手登_レ玉城奉_レ拜_ニ謁_ニ于

將軍家_一、頂_ニ戴衣服_一、

○樺山長門忠則モ此時射手云々譜中ニアリ、

179 御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々奉始御兄弟衆、老万石_右上之御大名衆・御旗本

衆不残御供にて被成御見物外、御外聞之儀誠難申謝
仕合ニ外、以上、

態以飛脚令啓達外、然者今日十三日之犬追物被遊 上
覽、御機嫌無残所御座外故、三手之犬追物相濟外後、又
御所望にて一手之犬追物首尾能相調、爰元上下大慶之至
可有御察外、於其元々各御満足推量仕外、此等之旨先々
為可申越如此外、御仕合之儀者難申盡外間、猶委細後便
ニ可申入外、恐惶謹言、

朱カキ
正保四年 十一月十三日

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書頭
久通判

嶋津彈正様

川上因幡守様

北郷佐渡守様

山田民部少輔様

人々御中

180 御文庫式拾番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々此度御犬之次第大方書記、圖書せかれ千菊所へ

遣申外間、可被成御覧外、為御納得外、以上、

急度令啓達外、去ル十三日王子御犬之場所より以飛札如

申入外、犬追物首尾能

公方様被為成 上覽、於王子御茶屋之御殿御吸物にて御
父子様へ御盃被成頂戴、御直ニ色々忝御詫共御承、薩
州様へ御脇指貞宗、又三郎様へ御刀国行被成拝領、寔以
御外聞実儀難及筆紙次第ニ外、先書ニも申外御大名衆者
宅万石以上勿論、御原本衆迄可致見物旨 上意ニ、何
れも不残被成見物、夥敷様子上下之大慶可被成御察外、
依之一昨日被仰出外ハ、射手衆・役者衆・家老衆・談合
衆被召列、十六日可有御登城由外ニ付、何れも被召列、
御父子被成御登城 御目見得ニ御機嫌能色々御詫外
御父子御退座之後、射手衆・役者衆・家老衆・談合衆皆
一同ニ 御目見得仕、懸 御言葉、御兄弟衆と家老衆
へ者御小袖六充、其外之衆ハ或四、或三充拝領仕、御家
之御外聞と申何れもの冥加重畳之至何事如之と申事外、
將又御進上物・御拝領物并射手組之次第為御一覽注別紙
進之外、猶使者橋口松浦介可為口達外、恐惶謹言、

朱カキ
正保四年 霜月十七日

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書頭

久通判

山田民少様

北郷佐州様

川上因州様

人々御中

御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

追ふ令啓り、然者此度之御仕合之様子御分國中諸士・寺社家・山伏迄何れも承知仕り様ニ、以廻文可被仰聞り、昨十六日登城之騎馬五十七八騎程ニあり、ケ様ニ御城へ家中之衆被成御入り事ハ前代未聞ニり、能く御仕合よきものと見得り通江戸中取沙汰之由り、是又為御存り、猶追ふ可得御意り、恐惶謹言、

朱力キ
正保四年 霜月十七日

新納右衛門佐
久詮判

鳴津圖書頭
久通判

北郷佐渡守様

川上因幡守様

山田民部少輔様

人々御中

封面ニ左ノ如シ、宛名略ス

橋口松浦介被持下候状十二月十一日下着、

御犬相済候由候、

御文庫廿三番箱廿一卷中 光久公御譜中ニ在リ

有川弥兵衛昨日参着り其元無事之由承目出度り、此方無別条り間可心易り、御下様御氣色弥御快然之由是又大慶此事ニり、随分御養生御痛ハリ被為申り尤り、然者去十三日天氣能於王子犬追物 公方様被成 上覽、御機嫌能相濟、扱く目出度儀不過之外、射手衆并使者衆之様子有増書付り、慰に可被為見り、

射手組 但上手犬七疋

鳴津諸右衛門一中矢 鎌田又七郎殿 本田甚兵衛

上井采女 鳴津弥一郎 吉田長四郎

本田休左衛門 鳴津又右衛門 肝付半兵衛

福屋助左衛門一中矢 種子嶋為兵衛一中矢 鳴津四郎左衛門

檢見 鳴津芳庵 喚次 鳴津源右衛門 執筆 福屋伊賀

警之役 福崎新三郎

次手組 犬七疋

鳴津東市正殿 鳴津源介殿一中矢 鳴津七兵衛

本田六左衛門 鳴津作左衛門 入來院石見

村上内記一中矢 村上左京 仁礼左近

鳴津長門 山田弥九郎 鳴津中務

檢見 鳴津又左衛門 喚次 鳴津佐太夫

執筆幣之役右同人

下手組 犬七疋

嶋津安藝殿一中矢 嶋津主計

平田兵十郎

柏原弥太右衛門

種子嶋二郎右衛門一中矢 嶋津助六

本田右衛門

嶋津縫殿一中矢 菊池太右衛門

嶋津又次郎

伊勢兵部殿 嶋津上野

檢見 嶋津又左衛門

喚次 嶋津佐太夫

執筆幣之役右同人

右之手組くじとりにて一立相濟、射手木屋迄被為引取り

處ニ追付御乞犬有之、

御乞犬一手組 犬十疋

嶋津東市正殿一中矢

伊勢兵部殿

種子嶋伊兵衛一中矢

嶋津七兵衛一中矢

嶋津主計二中矢

村上左京

福屋助左衛門一中矢

村上内記

嶋津上野

嶋津又右衛門一中矢

種子嶋二郎右衛門一中矢

嶋津安藝殿

檢見 嶋津又左衛門

喚次 吉田休兵衛

執筆 福屋伊賀

幣之役 税所弥吉

右御乞犬殊外大出来仕

公方様御感不斜々、

射手奉行

新納刑部

伊東二右衛門

射手支度衆

伊集院堅吉

右松五右衛門

有川十右衛門

有川早之允

吉田喜兵衛

富山主水佑

鎌田次右衛門

三原九兵衛

有馬郷兵衛

猿渡堅介

野村右馬

伊勢早左衛門

酒匂利左衛門

伊東元右衛門

三嶋林右衛門

本田九左衛門

木場猿右衛門

東郷六左衛門

伊集院弥左衛門

入部五右衛門

平瀬如兵衛

伊地知志賀

射手道具取喫役人

坂元少右衛門

木村平右衛門

射手木屋にて馬立様下知衆

肝付彦兵衛

永山友右衛門

犬かき兩口犬指引衆

三原内膳

川野弥太夫

弟子丸市之介

堀之内仲右衛門

犬かけ衆

加治木曾藤兵衛

丸野嶺右衛門

津留六右衛門

長田弥左衛門

林仲之丞

堀之内造酒丞

中馬喜角

池田五角

大放衆

泊大左衛門

隈元与右衛門

神崎諸右衛門

野添對馬

羽山五左衛門

犬奉行

二見二左衛門

酒匂右馬介

一下宿より射手木屋迄三町程有之、朝日出ニ射手衆備

ニて射手木屋ニ被參り、此間ニ平塚大明神被為立り所

ニて下馬外、馬ハ何も大房にて一段と見事ニあり事、

一射手之衆・役者人・侍・中間・小者・さうり取以下迄

從

御公方様御振舞可被下旨兼日被仰出、御馳走之木屋ニ

て朝五ツ前ニ何も御振舞被為給り、又侍・中間以下ハ

御振舞御免被成可被下通前日伊豆殿へ御断申上、正日

ニも又是非共御無用ニ可被成と申御振舞不被下り、勿

論御兩殿様も御振舞之筈ニて外處、今度王子之御普請

奉行多賀左近殿・真田長兵衛殿被仰りハ、於御殿御振

舞御給可被成り間、左様ニ御心得可被成と被仰ニ付る

御馳走之木屋ニてあかり不申り、御振舞調手御代官熊

澤彦衛殿・高室喜三郎殿也、料理福田五左衛門殿也、
給仕ハ間宮諸左衛門殿組之歩行衆三十人也、

一犬追物 上覽之御殿ハ南むき犬さしきニ、二王瓶子御

飾邊犬かきの外、東南西三方ニひきめかさり有、御殿

御普請奉行多賀左近殿・真田長兵衛殿也、犬かきの普

請奉行ハ此方より相良主税・平田藤右衛門ニおさへ鎌

田源左衛門付衆餘多有之、下宿普請奉行新納小右衛門・

有川与左衛門付衆有、

一公方様五ツ過ニ被為成、四ツ時分ハ御犬初ル、壹万石

以上の諸大名并御旗本衆可被致見物旨去十二日ニ被仰

出、如其各御見物外、薩州様ハ御殿之御棧敷ハ御覽、

又三郎様ハ御乞犬之時犬かき西之角ハ嶋津万壽殿御同

道ニて御覽、何も御褒美不大形外、

一犬追物終、追付御兩殿様共御前ニ御參、御直ニ御承り

ハ、年来可被懸 御目と存り儀相届、天氣能御祝喜ニ

思召旨 御詫ニて御吸もの御寄合御盃被遊御頂戴、薩

州様へ貞宗ノ御脇指、又三郎様へ國行之御刀御拜領被

成、無残所御仕合ニあり、左外有

公方様ハ七ツ時分還御外、殿様ハ日入時分王子ヲ御

立、直ニ御老中へ御礼ニ被成御出外、

於王子從此方御進上物

一國綱御刀一腰代五百貫 一御杉折三合・鯛巻折五ツ

一御樽五荷

右者 公方様へ薩州様より、

一光包御脇指一腰代五百貫 一杉折二合・鯛巻折五ツ

一御樽三荷

右者 公方様へ又三郎様より、

一杉折二十

一樽十荷

右者 王子御供衆相中へ被遣り、此日御城へあかりり

御進上物

一御杉折二合

一鯛巻折五

一御樽三荷

右者 大納言様へ從薩州様、

一御杉折壹合

一鯉巻折五

一御樽貳荷

右者 大納言様へ從又三郎様、

如右之あかり申り、大納言様ハ犬追物不被成

上覽候、

一翌日十四日ニ為御礼御登城可被成哉と酒譚岐殿・松伊

豆殿へ御尋りへ者十六日可然と相極、殊射手衆被召列

り様こと、伊勢兵庫殿を以御年寄衆方御承御座り間、

昨日御登城被成、御目見得相濟、其上射手衆・執筆・

幣之役迄御目見得て難有仕合ニり、左り射手衆へ

ハ御小袖拝領り、御兩殿様へハ御拝領無御座り、

大納言様へ之御目見得も昨日ハ相延り、

此方より進上物并射手衆我々へ之拝領之御小袖書付

申り、

一定利之御太刀代金十五枚 一御小袖三十

一銀子貳百枚

一御馬巻疋栗毛御鞍鉾作

右者 公方様へ自 薩州様、

一御太刀礼式 一狸く皮十間 一銀子百枚

右者 公方様へ自 又三郎様、

右之様ニあかり申り、

御目見得并御小袖拝領手くたり

嶋津圖書

新納右衛門

嶋津安藝守殿

嶋津東市正殿

嶋津源介殿

鎌田又七郎殿

伊勢兵部殿

如此罷出其後御小袖三重ツ、拝領、

町田勘解由

鎌田源左衛門

嶋津上野

嶋津中務

嶋津四郎左衛門

嶋津弥一郎

嶋津諸右衛門

嶋津作左衛門

嶋津主計

嶋津又左衛門

嶋津芳庵

嶋津助六

入來院石見

肝付半兵衛

山田弥九郎

犬追物御覽記

本田六左衛門 吉田長四郎 村上内記

菊池太右衛門 如此罷出其後御小袖二重ツ、拝領、

新納刑部 伊東二右衛門 当病二而登城不被仕候、 嶋津長門

当病二て登城不被仕候、 嶋津縫殿 嶋津又次郎 嶋津源右衛門

嶋津佐太夫 嶋津又右衛門 嶋津七兵衛

村上左京 仁礼左近 柏原弥太右衛門

平田兵十郎 上井采女 本田甚兵衛

本田久左衛門 本田右衛門 種子嶋次郎右衛門

種子嶋伊兵衛 吉田休兵衛 福屋伊賀

福屋助左衛門 税所弥吉 福崎新三郎

如此罷出其後御小袖三ツ、拝領、

右之手くたりニあり、誠冥嘉至極難有仕合忝奉存り、此

方より登城の乗馬衆五十七八騎ほとこてり、をひたし

く相見得、見物有之り諸大名・御旗本・下々至迄名譽

成御事と風聞仕之由り、

朱方キ 正保四年 十一月十七日 圖書 在判

千菊殿 参

正保四年丁亥十一月十三日 將軍家武州王子村に渡御有

て犬追物を御覽せらる、是者松平薩摩守光久 本名 嶋津 其家ニ

傳習す由緒有こより、上覽に備へ奉らんと速く執事之者

を以望申ければ御許容有之、此村ニ新に棧敷をかまへ馬

場を築かしむ、無幾程土木之功終りけれハ今日可有出御

に定りぬ、諸大名并御譜代之御家人各供奉すへしと被

仰出、御旗本近習以下之輩も各豫參す、此所ハ江戸城を

去る事二里ばかり平原曠野之地ニあり、もとより放鷹之御

狩場なれハ、御茶亭も有之こより其所を被撰けるにや、

棧敷ハ御茶亭之南にあり、東西四十六間、南北十一間、

南西中央に上段をかまへて御座所とす、棧敷之南十二間

を隔て馬場有、其廣サ東西四拾二間、南北四十間也、四

方皆竹を以埒をゆふ、埒之高サ四尺五寸、地之高下に依

て五尺も有けるとなん、埒之中央四方十八間に色々砂を

まきて馬を立る所とす、是を勝示と云、其廻りを勝示際

と云、其中央に長サ十八尋餘之繩を以、方四五間計之圍

をなす、是を大繩と云、其圍之中央に長サ五尋餘之繩を

以、方一間計之圍をなす、是を小繩と申す、其内に砂を

入れ満る事繩ニひとし、埒之坤之方ニ戸有、是を犬塚之

口と云、巽之方ニ戸有、これを物かけ之口と云、皆轍つ

りかた取成へし、又南と東と西との埒の上にかさりの鎧平之矢をさしはさむ、一方二十二桁也、一桁毎に四結にして四所に掛れハ十六筋也、十二桁ニ考合て百九十二筋成へし、三方合て矢五百七十六筋也、是三手之犬追物之矢数となん、三手之内ニ上手・次手・下手の名有、又埒之外之良之方ニ添ふて假之役所を構て日記之座とす、旧例には御座之次之席ニる日記を沙汰する由なれと、此度ハ御座に近つかん事を憚りてかく侍るとなん、此役所之内に器物一對をならへ置、金銀之薄を以是をたゞ、ミ、其上ニ考青黄赤白黒之餅を二重ニ高くもり、一重毎にいくらも積重ねて作花をさしはさむ、其下にハ五色之次米を備ふ、其器之ふちを金紙を以かざる、又木を以瓶子一双を作り設く、是も金銀之薄ニあるたゞ、ミ、松と鶴とを畫き蝶花形を以其口をつゝむ、但酒をもるにハ不及、この外硯紙并幣等をも兼ね此内に納め置けるとなん、此役所之前之傍之埒に又一ツの戸あり、是ハ貴人出入之為にまふくる事なり、今日ハ開くニ不及、又埒之外之西南之方に假屋をかまへ、是ハ射手装束を調る所也、巳刻、將軍家着御有て棧敷之上段ニ為入給ふ、中根彦岐守正盛・牧野佐渡守親成・久世大和守廣之以下近習并小臣等伺

候す、御座之西之次之間ハ水戸中納言頼房卿・尾張宰相光義卿・紀伊宰相光貞卿・水戸三位中將光國卿之座とす、其次ハ彦根中將直孝・若狭少將忠勝・高松侍從頼重・前橋侍從忠清・河越侍從信綱・阿部豊後守忠秋・永井信濃守尚政・朽木民部少輔植綱等濟々列居す、其次之座ハ井伊靱負佐直滋・小笠原右近大夫忠貞・奥平美作守忠昌・本多内記政勝等御譜代御家人等列參す、西之方南之端之棧敷ニ考越後少將光長・長門少將秀就・備前少將光政・毛利甲斐守秀元・越前侍從某・因幡侍從光仲・出雲侍從直政・阿波侍從忠英・土佐侍從忠義・肥前侍從勝茂・安藝侍從光晟・伊賀侍從高次・肥後侍從光尚・美作侍從長繼・松平刑部太輔頼元・同播磨守頼安・松平淡路守利次・織田出雲守信友・毛利和泉守光廣・立花左近將監忠茂・京極山城守高國・有馬中務少輔忠郷・黒田右衛門佐長之等之諸大名列座す、薩戸守ハ其座之前之簀子に踞座す、御座之東方ニ考旗本之曆(曆、カ)、其外諸役人等充滿す、庭上にハ大番衆并歩卒衆各警衛せり、仰に依て彦根中將・若狭少將・前橋侍從・河越侍從・豊後守等御前(マ)に參り御座之西之御障子を開て水戸・尾張守・紀伊之四卿 御目見有、次ニ薩摩守を召す、今日天氣快晴年来之本望相

叶可為満足と被 仰出、薩摩守伏拝し畏を申、御樽五荷・杉重三組・平魚五尾折・櫃物十合進上す、子息又三郎久平同御目見、御樽三荷・杉重二組・鯉魚五喉を進獻す、皆前橋侍從是を披露す、犬追物始むへしと被仰出、薩摩守奉て本之座に帰る、次ニ諸大名并御譜代之御家人等以下御目見有、即御障子をさす、仰に依て小笠原右近大夫を召す、河越侍從奉て是をたつさへて東之方の縁方御前へ出つ、是ハ累代弓馬之法相傳之家なれば御見物之間御挨拶の為成へし、近臣等すゝみて御前之御籐をあく、阿部五郎三郎正義御腰物を役す、既にして烏帽子素袍着て短刀を差たる男一人極屋伊賀某ト号、埒の外之南方東へ廻り良之役所へ登る、是日記之執筆也、其次に熨斗目之衣服之上に水干に似たる物を着し俗に眞直衣と云となん、末廣扇を持、其髪を垂さけて金薄之はねもとゆひを以て結び薄す、假粧にかね黒く眉作りたる童子二人相隨一人極屋新三郎と云、一人ハ稱所弥吉と云、是ハ幣を振役人なり先例にハ幣ふりの役人ハ同朋を用ひた、る事も有、或二人、或三人不定なり、射手之奉行兩人新納部某、伊東三右衛門某、烏帽子素袍短刀にて埒之西南之戸の外に徘徊す、侍四人同じ裝束ニある二人ツ、相分れ巽と坤との戸之邊に立て居る、足輕一人ツ、羽織袴ニある相隨、竹杖をつきたる者八人、烏帽子小素袍短刀ニある二人ツ、埒之内之

四方之隅に分れ居、是を犬かけの者と云、此外同じ裝束にて五人、坤之戸之内ニ居る、是を犬放し之者といふ、但五人小素袍の袖をたすきに掛けて背ニあるはさみ結ふ、又肩衣袴を着し熨斗目之衣服ニある二人坤之戸外に居る、是を犬下知之者と云、足輕八人羽織袴にて相隨、是を犬疋之者といふ、此時埒之外西南の方之假屋方三手之射手三十六騎しつゝとすゝミ出、其裝束ハ烏帽子をかぶり、染物之下襲之上ニ素袍を着し、短刀をさし、左を肩ぬき弓籠手をつけ弓を持、鐙平之矢一筋を取添、又腰にもさす、或二筋三筋差有、右之手には竹根之鞭に結を付、腕にかけて持、左右之股ニ素鹿皮之行騰をつけ、其結を腰ニある結び足ニ沓をはく、或ハ行纏之左右へ綫角を付たるもあり、付さるも有、弓ハ滋藤三所藤、矢は鷲之羽・鷹之羽其藝之工拙ニ依て差有、馬之毛色も差有、ミな鬘にて紅之大綱をかけたたり、此内薩摩守令弟五人ハ綱に金糸を交へ組たり、手綱ハ定れる尺有となむ、其短刀は御前をはゝかりて鞘之裝束をは、常之ことく拵て身をは木ニある作る、其餘役人等之短刀も皆然り、三十六騎之者共十二騎ツ、南と西と東との埒之外に並立、此外に檢見一人、喚次一人、騎馬にて相加ふる、檢見ハ赤頭巾をかふ

り或者鳥帽子を用ひ、素袍を着し短刀をさし末廣をさしはさ
み黒漆之鞭を腰にさし、馬に淺黄之大綱を懸たり、喚次
ハ鳥帽子素袍を着し短刀をさし竹根之鞭を持って兩人共に
弓矢を不帶、檢見埒之外にて下馬し徒歩ニ異之戸方埒
之内へ入り、勝示之きわニ至り北面し跪て御前に向て拜
禮す、此時埒之外之三十六騎喚次皆下馬す、檢見埒之外
へ出て馬に乗る、三十六騎并喚次も騎馬し異と坤との二
ツ之戸方十八騎ツ、相分て埒之内ニ入て十二騎ツ、南と
西と東とに相分れて立、南を上手とし西を次手とし東を
下手と云、檢見・喚次は異之戸方入る、凡一騎毎ニ矢取
之介副一人ツ、鳥帽子小素袍短刀にて相隨ふ、檢見・喚
次ニ素袍一人ツ、有、其装束同前、檢見馬をすゝむ、南
之方之上手十二騎相隨、其馬立之次第ハ一番二番を相手
とす、大繩之廻り北之端ニ有、三番四番を相手とす、大
繩之廻り南之端に立、五番六番を相手とす、一番二番之
南に在り、七番八番を相手とす、三番四番之北ニ立、九
番十番を相手とす、五番六番之南に有、十一番十二番を
相手とす、七番八番之北ニ立、一番三番五番七番九番十
一番之六騎ハ馬之頭を西に向ふ、二番四番六番八番十番
十二番之六騎ハ馬之頭を東に向ふて皆大繩之廻りに直

立、喚次ハ日記之役所之東に馬を扣へたり、檢見勝示際
ニ誰か有とよふ、鐘之者外と答て馬之口を取檢見下馬
し小繩之きわニ北面し呪文を唱ふ、此時十二騎并東西
に立る二十四騎も皆下馬す、檢見立歸り馬に乗り大繩之
内へ入、十二騎并二十四騎皆騎馬、此時犬下知之者兼る差
圖して犬疋之足輕埒之外方大共をなわにてくひり、坤之
戸方五人之犬放之者へ渡す、是を請取て埒之内へ入、坤
之戸之邊にをく、檢見馬上にて鞭を抜持て御犬や有と云、
犬放しの者外と答る時十二騎馬之頭を立直し大繩にそひ
矢をつかふ、檢見御犬疋入よと云、犬放の者外と答て犬
一疋を小繩之内へ疋入て御犬にけりと三返唱ふ、檢見は
や放てといふ、犬放之者鎌を以繩を切、犬を放つ、此犬
をは射るに不及してにかし出す、是例也となん、射手皆
矢をはつす、檢見重て御犬や有と呼、犬放之者外と答ふ、
射手皆矢をつかふ、檢見御犬疋入よと云、犬放之者犬一
疋を小繩之内へ疋入る、毎度皆然り、又前之ことく御犬
にけりと三返唱ふ、檢見はや放てと云時則繩を切て犬を
放つ、十二騎之者矢ころ次第に矢をはなちて是を射る、
其時あてたる者馬をあゆませ出す作法有、檢見も又馬を
歩ませ出て矢答あり、射手本之ことく馬を大繩之きわに

立、檢見馬をすゝめて勝示のきわへ出れハ喚次之者はせ
 来る、檢見其射手之姓名をつく、喚次役所之前に到り馬
 方下り某氏某名と呼、童子願諾の幣を振幣幣は一本二面而常、皆是を動む

執筆之者則是を記す、其記せる法故実有にや、喚次馬に
 乗て本之所へ帰る、檢見本のことく大繩の内に馬を立て
 又御犬や有と呼召、地之犬を牽来る、先之ことく次第有
 て犬を放つ、十二騎矢ころ次第に射る、其作法同前、當
 る時ハ檢見又喚次に告しむ、第二度方以後は喚次下馬に
 不及、役所之前に向ひ馬を扣へせくゝまりて其射手の名
 を唱て筆記せしむ但初度之時盛てハ下馬す、へからすと断有となん、其次之犬をも又先
 之ことく射る、其儀吳ことなし、第三度之犬までハ勝示
 之内にて是を射る、中りても中らざれとも外へ出れハ追
 に不及、第四度方之犬をは外之犬と名付て勝示之中（射カ）に
 矢中るといへとも勝示之外へ追出し檢見躰（射カ）てをけと云、
 四騎かわるゝ馳て射る、毎度八騎ハ大繩之廻りに並立
 て其馬を左右し前却して四騎の来路をさく、東西に相む
 かひ立る、次手・下手之二十四騎も若其邊にはせ来れハ
 其心得有とみへたり、檢見は毎度驅まわる、犬ハ矢ころ
 をのかれんとて或時は四隅にせくゝまり、或時ハ埒之竹
 により添、或時ハ馬之腹之下へにけ入を犬かけの者竹杖

を以是をかる、埒之内を四方たて横に追て射る、介副各
 徒歩にて相隨ひ落る矢を取てさつく、其矢所につきてな
 わきわにてハ弓手馬手月かけの矢をしもちり等之名あり
 とかや、外の犬に成ては弓手すかひ馬手横子物袖かへし
 等之名有となん、檢見其矢答に付其実否を定む、矢中る
 といへとも檢見之心に叶わされは射て置と唱て又追まハ
 る、数返に及び不中して犬つかるゝ時ハ檢見犬すてよと
 いふて是を射さしめず、其射終る犬共をは犬掛之者異之
 戸方是を外へ出し、又別之犬を呼ひ射る、矢つほ方中り
 檢見之心に叶ふ時は喚次に告て其名を記さしむ、若檢見
 之見る所射手之心と同じからされは問難に及事も有、都
 ろ七度に及て終る、此七度之内に落馬する者二人有、其
 人をり立て沓をぬき手に持さゝけて謝す、其相手もまた
 馬方下りて沓を脱し手（射カ）を捧て相揖して後同しく馬に
 乗、これ落馬之礼式となん、

上手組犬七元放て中矢三ツ、其手組ハ圖取定之、

嶋津諸右衛門一正

嶋津四郎左衛門

鎌田又七郎

種子嶋為兵衛一正

本田甚兵衛

福屋助左衛門

上井采米（女カ）

肝付半兵衛

嶋津弥市郎 嶋津又右衛門

吉田長四郎 本田久左衛門

檢見 嶋津十郎左衛門入道

喚次 嶋津源右衛門

最前上手之十二騎南をすゝみて大繩之廻りに趣く時、西方之十二騎次手たるにより坤之方より南へうつり、東方十二騎為下手によりて巽之方に向ひ南に立る次手之後を通り西に廻る、於爰に上手之十二騎射終れば東之方へうつり立て、檢見・喚次は巽之戸を退出す、扱次手之十二騎南之方を馬をすゝめ檢見相共に大繩之きわに並立、其相手之次第前之ことし、喚次も前之ことく日記之役所之東に馬を扣ゆ、此度ハ檢見・喚次列人替りて是を勤、其装束同前但有髪たるに依り頭巾を、不齊、烏帽子を着たり、前之ことく檢見御犬や有と唱て犬を一疋ツ、呼出し放て射る、檢見・喚次并日記之法式皆上手と同前、但此度は第二度迄之犬をは勝示際ニある十二騎矢ころ次第に是を射る、第三度外之犬とし外へ追出して四騎替るく射る、又七度に及て終る、

次手組大七疋放て中矢三ツ、其手組ハ關取ニ定之、

嶋津市正 嶋津中務

嶋津源助二疋 山田弥九郎

嶋津七兵衛 嶋津長門

本田六左衛門 仁禮左近

嶋津作左衛門 村上左京

入來院石見 村上内記一疋

檢見 嶋津又左衛門

喚次 嶋津作太夫

前方次手十二騎南方大繩之廻りへすゝむ時、西に立る下手十二騎坤之方に向ひ南へ廻り、東之上手十二騎巽に向ひ南之下手之後を通り西へうつる、爰に到りて次手之十二騎射終りて東に立、是に依て下手之十二騎けんミ相共に南方馬をすゝめ大繩之際に並立、其相手之次第同前、此度ハ檢見・喚次説也同前にて是を勤む、其次第上手次手と呉ことなし、但第一度計を勝示際ニある射て第二度よりを外之犬とす、また七度に終る、

下手組大七疋放之中矢四ツ、手組ハ關取定之、

嶋津安藝一疋 嶋津上野

嶋津主計 伊勢兵部

平田兵十郎 嶋津又次郎

柏原弥太右衛門 菊池太右衛門

種子島次郎右衛門二疋 嶋津縫殿一疋

嶋津助六

本田右衛門

檢見 嶋津又左衛門

喚次 嶋津作太夫

前方下手之十二騎南^右大繩之邊へすゝむ時、西方之上手十二騎坤^右之方を通り南へうつり、東^右之方之次手十二騎巽^右之方より南^右之上手之後を通り西へ廻りならふ、爰に到りて下手十二騎射終て東^右之方に立、三手共に皆初^右之ことし、檢見勝示^右之きわにて御前に向ひ退て、巽^右之戸^右之邊^右こゝ下馬すれば、三方に立る三十六騎皆弓を杖につき下馬し沓拔、右^右之手に持なから行騰を引返し沓に取添持、左^右之行騰ハ弓に取添持、喚次も同く下馬す、東^右之十二騎并檢見・喚次は巽^右之戸^右も退出し、西^右之十二騎は坤^右之戸^右も退出し、南^右之十二騎六騎は坤^右之戸^右も、六騎は巽^右之戸^右も相分れて退出、皆其初^右入し時之ことしとなん、介副櫓等各馬を牽て二ツ之戸^右も同じく随ひ出、以上三手之犬追物也、於爰御簾を下す、小笠原右近太夫御次之間へ退く、其後薩摩守を召て今一手組射さしめよと被仰出、畏^右本^右之座に帰る、御簾を上く、西南^右之方之假屋^右も十二騎すゝみ出つ、檢見・喚次相かわる、其装束皆同前、南^右之埒^右之外^右に^右暫馬を立並へ其内六騎と檢見・喚次とハ巽^右の戸^右より埒

之内へ入、六騎ハ坤^右之戸^右も入、各南^右之方に並立、檢見勝示^右きはに馬をすゝめ扣ゆ、十二騎静つゝと馬を歩せ次第に大繩之廻りにすゝみよる、相手之次第同前、喚次ハ日記之役所之東^右にあり、其後犬呼出し馳追て射る、其儀式皆初^右之三組之ことし、但十度に及て終る、其上第一度よりを外^右之犬として四騎替るゝ射る、初^右之三組之間ハ御前を憚りて御座之前場近き所過る時は矢ころに及へとも矢をはつして射事なし、此度は為御所望^右よりて、御免を蒙りて御目通り計を恐れ、其外ハ矢ころ次第に放ち射る、射手をも撰けるにや、其中る矢数多し、射終て各下馬之礼前之ことし、六騎と檢見・喚次は巽^右之戸^右も退出し、六騎ハ坤^右之戸^右も退出す、其式皆初^右之ことし、

射手組六十正放之中矢八、其手組ハ關取定之、

嶋津市正一疋 伊勢兵部

種子嶋次郎右衛門一疋 種子嶋為兵衛一疋

嶋津又右衛門一疋 嶋津七兵衛一疋

嶋津上野 嶋津主計二疋

村上内記 村上左京

福屋助左衛門一疋 嶋津安藝

檢見 嶋津又左衛門

喚次 吉田久兵衛

事終りぬれハ日記之役者并幣振之童子退出、日既未刻ニ過たり、近臣等御簾を下す、御座之西之方之障子を開て水戸・尾張・紀伊之四卿御目見、今日之見物を謝し申さる、諸大名御譜代之御家人も同御目見有、其後御茶亭へ渡御ありて御膳を被聞召、此間棧屋ニゐ齋廐有、水戸・尾張・紀伊之四卿一座、松平出雲守勝隆奉行す、諸大名一座安藤右京進重長・井河内守正利奉行す、御譜代衆一座大番頭等是を奉行す、其外飲食する者甚多し、饗應過て御茶亭へ薩摩守父子を召、彦根中將・若狹少將・前橋侍從・河越侍從・豊後守等伺候す、御盃を薩摩守に被下頂戴し御肴を給るとき、前橋侍從奉りて御脇指貞宗を薩摩守にあたへらる、拜戴して退く、御腰物國綱を進上す、前橋侍從取て御前へ獻す、次ニ御盃を又三郎ニ被下、頂戴し御肴を給り御腰物國行を拝領す、前橋侍從取て授く、拜受して退く時御脇指光包を獻す、前橋侍從取て御前へ奉る、父子共に拜謝して退出、誠に家之面目と云つへし、暫有て還御有、阿部四郎五郎正之か番所にて正之を召て犬追物之事被仰出旨有、是ハ正之及び其子左衛門次郎政継に御弓之事被仰付故なるへし、其後諸大名已下

供奉之輩も各帰宅す、此村所々今日御棧敷之廻りに弓鉄炮之物頭等役所を構へ守番之儀いとけんちう也、又松平式部太輔忠次をは本丸御留守に殿中ニ弑し給ふ、松平越中守定綱をハ本丸之大手番所ニあらしめ、内藤帯刀忠久をは櫻田之門ニ居しめ、松平丹波守光重をハ西丸へ被遣、稲葉美濃守正利ハ二丸 東照宮を守らしむ、水野監物忠善・松平若狹守康信をは紅葉山之 東照宮と御佛殿ニそなへしむ、其餘定れる御留主之役人并所々當番之面々ハ常之ことし、誠に一人出給ふ事たやすからざる故成へし、

同十六日薩摩守登城す、將軍家白書院へ出御有、上段ニ御着座、元老執事近臣等伺公す、薩摩守御禮申御太刀定利・御馬質鞍・白銀式百枚・御服三十領進上す、太刀折紙をは前橋侍從披露す、犬追物 上覽に備へ忝由を若狹少將被爲言上、御会釈有、薩摩守退出、次に子息又三郎御礼白銀百枚・狸々皮十間進上す、太刀折紙披露同前、若狹少將挨拶申て退かしむ、次島津圖書久通・新納右衛門久詮薩摩守・嶋津安藝久雄・同市正忠弘・同源助久立・鎌田又七郎政由・伊勢兵部貞昭此五人薩摩守・町田勘解由久則又三郎・鎌田源左衛門政有薩摩守 九人一同に闕之外ニ御目

見申て退、次に御障子を開く、下段へ出御有、此度之射手役人四十一人次之間並居て一列に御目見、於爰入御し給ふ、其後河越侍從・豊後守柳之間へ出て着座す、奏者番等相隨薩摩守家老并舎弟其外射手役人凡五十人を中心く呼出し御服を頂戴せしむ、或六領、或四領、或三領、其人によりて差有とぞ聞へし、十二月二日 大納言殿二丸之御殿へ出御有て上段ニ御着座、彦根中將・若狭少將・前橋侍從・河越侍從・松平和泉守乘壽・酒井日向守忠能等已下伺公す、薩摩守出仕御礼申、御太刀長光・御馬置鞍・白銀百枚・狸く皮十間進上す、太刀折紙をは日向守披露す、今度犬追物を將軍家之備 台覽奉り忝由を老臣等言上す、薩摩守退く、御次之間ニ有又三郎御禮、御太刀・馬代黄金一枚・御服十領進上す、太刀折紙披露、同残老臣等挨拶し退かしむ、次ニ薩摩守を召て御手自熨斗を被下、頂戴之時御腰物則光を拜領す、日向守是を取次拜受して退く、御脇指吉光を進上す、日向守持て御前へ奉る、薩摩守退く、次に又三郎を召て御手自熨斗を被下、戴て退時御脇差兼光を被下、日向守取て授く、拝戴し退く、御脇指安吉を獻す、日向守受取て御前に置、又三郎退出、次に御障子を開、下段に為下給ふ、薩广守家

老舎弟等九人闕之外ニ一列に御目見、射手役人等四十一人も並居て同く御目見申、則入御、次に薩广守家老舎弟已下五十人に御服拜領之事あり、或二襲、或三領、或二領差有、和泉守等是を沙汰す、事終て各罷りぬ、兩御所へ之御礼相濟て大宮無故障調りぬと彼家之歡喜不斜となん、夫犬追物ハ神功皇后三韓を平けし時より事おこりて三浦介・上総介か那須野の狐を狩しも其例となん申傳たり、騎射練習之わさなれば鎌倉之柳營、京都之幕府よりく被為興行、三管領四職を初として武士之家に執行すと云事なし、信長・秀吉之時より其沙汰ハ止めれと其法は残りて弓馬之家に有と、四海無事之御代にあたりて此藝を再興し給ふ、誠に太平講武之一端なるへし、いよく祝ひますくあかめ奉る、目出たかりける事共也、

184 御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在り

急度令啓り、然者 大納言様に今日犬追物射手衆可有御目見得り間、被召列可有御登城由被仰出、御父子様御登城り處、於二之御丸御目見得 薩州様へ御刀一腰、又三郎様に御脇指一腰御拜領、其外射手衆・使者衆如先日被成御覽、御小袖四ツ三ツ二ツ充被致拜領、本謹以重畳之

御外聞不可勝計、爰元之様躰御推察々々、猶近日諸慶可申入り、恐惶謹言、

朱力キ
正保四年 極月二日

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書頭
久通判

川上因幡守様

北郷佐渡守様

山田民部少輔様

人々御中

封函ニ左ノ如シ、名略

十二月二日之状永田軍右衛門同月廿五日ニ参着、

大納言様へ射手衆可有御目見得由被仰出、二日ニ御父子様射手衆被召列御登城御拜領物之事、

御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々酒匂右馬助今度爲御使被召下り、又来年之在江戸ニも被仰付り得かしと我々迄被申り、其元御賦ニ人数不足も御座りハ、被召加尤り、於此元別る御奉公も被仕人にてハ間令申入り、以上、追ふ令啓入り、

一先書ニも如申越り、此度御犬追物之御仕合無残所、其

後射手衆・諸役者合五十人兩 上様江致御目見、兩度

共ニ呉服拝領仕、世上之御外聞、江戸中之褒美、當分

其沙汰計之由り、此中者 大納言様可有 上覽物音共

り故、射手衆も先々被召置りへとも、最早寒天ニ罷成

り間、人数も次第ニ被召下り可然通御内證共御座りニ付、

此元御在江戸中御用人之外近日可被召下り由被仰出り、

一 来年在江戸替衆御賦之儀先書ニも申越り、無御油断被

仰付可然存り、又三郎様も次第ニ方々之御禮御登城な

とも御座り間、前之在江戸衆よりハ人数も少く可相増

り、乍去細々相究、後便ニ可申下り、外城衆之儀も御

用ニ可立人者弥可被仰付り、

一 来年御帰国之御迎船之儀、餘はやく被為召上りへハ大

坂逗留中大分之入目之由承り、殊ニ来春者日光御参詣

之由り間、五月之末敷、六月初敷ニ社御暇も可有御給

り、以其御心得船手ニも可被仰付り、替儀りハ、追々

可申通り、恐惶謹言、

朱力キ
正保四年 極月五日

新納右衛門佐

久詮判

嶋津圖書頭

久通判

山田民部少輔様

北郷佐渡守様

川上因幡守様

人々御中

封面左ノ如シ

川上因幡守様

一酒切右馬介来年在江戸ニ可被召上由、

北郷佐渡守様

久通

山田民部少輔様

参

十二月五日御状同月廿四日酒匂右馬介持下候、

一射手衆被召下由、一来年在江戸賦候事、

一又三郎様方ニ御礼御多候而、いつもの在江戸衆ニ

少し人衆可相重由候、

一御迎船停はやく不被召上様ニとの事、

嶋津圖書頭

新納右衛門佐

光久公御譜中

正文在文庫

まつ平さつ(光)まの(久)かミ殿より昨日文下されり外へとも、くれ

外てた、今御返事しんし申り、それさまよりもこま

と文下されり、くわしくミ申り、仰のことくせんとハ

上様御きけんさまよく、いぬわう物御上らんあそはされ、
(象也)

さつまの守殿御おやこともに御とうく御はいれうなされ
(光久・綱久)

り、御さかつきまてくたされり、かたしけなくおほしめ
(道具)

し外とほり仰きけられ御もつともこそんし外、そのうへ

いつれも(射手)いてにいたるまで御ふるまい下されり、五六十

人のいての衆御しろへめさせられり、御めミへいたされ

り、そのうへにて御(服)ふくはいれういたされり御事、つる

にかやうニ大せいの衆ありかたきしあわせにてさつまの

守殿かたしけなかり、したく(冥加)までもめうかありかたき

事、まことに事(言葉)はこものへつくしかたくそんしられり

とほりいちく(被)仰下されり、ま事これハれいもなき御事

ともにてしたく(被)の衆申めて申り、

前々カキ由かたしけなかり申されり事、よきもなきやうにそん

する事こと何の御さハリもなく御きけんよく御上ら

んあそはされり、御しよもうまであそはされり事、

さつまの守殿御いへの大けいすへのよまてもかきし

るされ申事にて御さりま、御おやこさそやかたし

けなくおほしめし外ハんと仰下されり外ニそん

し外、わたくしよりも御いわ井くたされり御礼、又

ハめてたさ、かれこれさうく(被)申しんし外ハん御事

など、おもてむきの御事にて御さりま、ゆふく

と申入りハんとひかへりて御返事になり申り、われ

ら一たんとめてたかり申りとはりよく仰られりてく

たされへくけ、さつまのかミ殿の事ハことの外さぬ(酒)
きの守殿御きも入けて御さひま、われらまでも一(井忠勝)

入めてたくそんしけ、いよ(息災)兩御所様御きけんさ
まよ、前(息災)さま御そくさいさまニ御さなされけ

ま、御心やすく存しめしなされへくけ、せんとハ
それさまもそれさまも御ともにてあなたこなたと御(屏懸)
きも入なされけ、一入かたしけなくおほしめしけと

の御事、御もつとももの御事ニけ、そもしさま文ニ
てこけ共け、一入めてたくそんしけ、やしきの御事

も御としより衆へゆたんなく申事にて御さけ、かへ
すくさつまの守殿かたしけなかりまいらせられけ

とほり御つるてのおりふしよく申上給けへくけ、め
てかしく、

御返事
いせひやうこさま人々 しゆりん

中給へ

右ノ御書ゆりんとアル誰ナルヲ知ラス、光久公御舍弟ハ伊勢貞昌ノ彦嗣兵部少
輔貞昭、又彌久公ノ御母ハ伊勢大隅守貞愷女、又彌久公ノ御舎弟佐多氏ノ後嗣ト
為リテ豊前久達モ、初ハ伊勢兵庫貞輝ノ子ト為リ、貞昭トテ寛文十二年伊勢氏
ヲ去ルトアリ、又彌久公ノ御妹千魚ハ伊勢兵部貞顯室トアリ、光久公御代伊勢家
ニハ御重縁ナリ、彌久公御母ナトニモ當レルカ、後考ニ供ス、

嶋津家伝来之犬追物備 上覧候、或旧記書出候様、享和元
四年五月 公義より御達ニ付取調御差出之一冊有之、同年ニ
綴込置候間為参照記置候也、

187 十二番箱四十五卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以牧野内匠頭病中故登城無之ケ間不能加判け、以
上、

御札致拜見候、大納言様御機嫌之御様子無御心許付る被
差越嶋津市正候、増(忠應)御氣色好被成御座ケ間可御心易
候、随而白砂糖三桶・田雞一羽・琉球酒二壺被獻之、
遂披露之處、一段之御仕合候、委曲使者可為演説け、
恐々謹言、

朱カキ 正保四年 十二月十日 松平和泉守 乗壽判

松平薩摩守殿

188 御文庫拾一番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見け、(徳川綱吉)徳松殿三丸御移徙之儀相達目出被存け
由得其意け、依之被差越使者け、念之入け段達 上聴
け、恐々謹言、

朱カキ 正保四年 十二月十一日 阿部對馬守 重次判

189

御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

松平薩摩守殿

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

肥後長左衛門帰国被申外間用一書外、然者今日御言入之御祝儀松平河内守様へ嶋津安藝守殿を以被仰外、千秋万歳可有御察外、就其殿様此廿八九日之比下御屋敷へ御移被成り、御嫁婚入之儀老年内可然由讃岐守様方御肝煎外へ共、河内守様より被仰分り而来正月御乗物入可然由相心得可申旨讃州様被仰外、巨細者長左衛門口達ニ申合外、其外御用之儀条書ニ申上外、爲御存外、恐惶謹言、

宋カキ 正保四年 十二月十六日

新納右衛門佐

久詮判

嶋津圖書頭

久通判

嶋津彈正様

川上因幡守様

北郷佐渡守様

190

光久公御譜中

尚以爰許之物ニ御座外条鮎鮓一桶令進献外、書音之印迄ニ御座外、已上、

一筆令啓上外、今度繪圖之儀ニ付使者指出申外処ニ別被入御念御指圖之儀共忝存外、殊種々御馳走之段過分之至ニ外、爲御礼用使札外、猶期後音不能詳外、恐惶謹言、

宋カキ 正保四年 十二月廿二日

有馬左衛門佐

康純判

嶋津彈正様

人々御中

191

光久公御譜中

爲年甫之御祝儀御状忝存外、其元御無事之由珍重外、當地委相替儀無之外間可御心易外、先以旧冬於江戸王子薩广守殿犬追物御学ひ被成 上覽之處、首尾残所無御座、薩广守殿御父子種々難有

山田民部少輔様 人々御中

封而名略ス

十二月十六日ノ状正月廿九日ニ肥後長左衛門殿被持下候、

一又三郎様御前様御言入ノ事、

一御乗物入之事、

上意ニ有る名物之御腰物など御拜領被成、殊御家来衆数多
兩

上様へ御目見、其上御小袖拜領、冥賀(加)至極之由各御満足
令察レ、猶期後喜之時レ、恐惶謹言、

朱力キ
正保五年 正月十日 山崎權八郎 正信判

嶋津彈正様 御報

192 御文庫拾二番箱四拾五卷中 (付紙)「光久公御譜中ニ在リ」

就今度 (徳川秀忠)台徳院様御遠忌、輕罪之輩被成御赦免候、然者
於國々在々所々存其趣可放免之旨被仰出レ、可被得其意
外、恐々謹言、

朱力キ
正保五年 正月廿一日 阿部對馬守 重次判

阿部豊後守 忠秋判

松平薩广守殿

193 御文庫廿三番箱廿三卷中写 (付紙)「御譜中ニ無之」

就今度 台徳院様御遠忌、輕罪之輩被成御赦免レ、然者
於國々在々所々存其趣可放免之旨被 仰出レ、可被得其

意外、恐々謹言、

正月廿一日

阿部對馬守 重次
阿部豊後守 忠秋

松平薩摩守殿

御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

急度令啓達レ、然者今度 台徳院様御遠忌ニ付於増上寺
御法事御座外、因茲諸國在々所々輕罪之輩可被成御赦免
通之御奉書出申外、就其輕科之人數可有御赦免外間、早
々相改書記可被仰上由御意外、聊御油断有間敷外、御奉
書之写為御一覽差越申外、恐惶謹言、

朱力キ
正保五年 正月廿六日 新納右衛門佐 久詮判

嶋津圖書頭 久通判

川上因幡守様

北郷佐渡守様

山田民部少輔様

人々御中

封面名略ス

一子正月廿六日江戸立候飛脚、聞正月十三日二下着、

一 台徳院様御遠忌ニ付懸科之人衆相改江戸へ被聞召可被相直由也、

195 光久公御譜中、

今歳正保五年戊子正月相二當

台徳院殿之十有七年忌一、於三増上寺二所レ執三行梵儀一、
光久在レ國、馳ニ家臣島津左近久守于江府二而爲ニ名代一、
奉レ獻ニ香燭一、繇レ焉ニ執政投ニ賜奉書一、

196 御文庫拾二番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札致拜見リ、就 怠徳院様御遠忌、為名代被差越嶋津
左近リ、右之趣達 上聞候之處、念之入リ段御機嫌能之
御事リ、委曲使者可為演説リ、恐レ謹言、

朱カキ
正保五年 正月廿九日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

197 綱久公御譜中

卷 2 正保五年戊子 正月晦日綱久婚ニ姻豫州松山城主松平隱岐

守定頼之姫一、行ニ大禮於東都芝第一、

198 御文庫式拾番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

態以飛脚令啓リ、然者 又三郎様御祝言昨日首尾能相
調、千秋萬歳之至、爰元上下大慶之段可有御察リ、御方
も可為御同前と存リ、此等之御左右為可申如此御座リ、
其元衆中より之御祝儀早々被仰上尤リ、猶期後喜候、恐
惶謹言、

朱カキ
正保五年 閏正月朔日

新納右衛門佐

久詮判

嶋津圖書

久通判

嶋津彈正様

川上因幡守様

北郷佐渡守様

山田民部少様

人々御中

封面ニ

一 閏正月朔日之御狀飛脚同十九日ニ下者、

一 御祝言相調候由、

起請文前書之事

一申上^レ二世之御奉公無偽堅固ニ仕可申上^レ外事、
一亦是常々御奉公方に付る無別心油断不仕、相動可申上^レ外事、

右之条々於偽者

牛王神文靈社上巻略 文中ニ正保五年三とアリ

閏正月吉日 恰三判

同年二月三日 上使松平伊豆守信綱・松平和泉守乘壽承ニ
將軍家 大納言家之命ニ、來報云、光久宜^ニ早歸^レ國守ニ其
任^一、恩賜從^ニ格例^一也、同十三日發^ニ江都^一自^ニ大坂^一駕^レ
舟三月七日到^ニ于日州細島津^一、同十六日歸^レ麿城^ニ、家老
島津圖書久通陪^ニ隨之^一、而差^ニ島津左近久守於東武^一奉^レ
謝^ニ賜^レ告^ニ之辱^一獻^ニ呈繡珍^一二十卷・兩種雙樽^一、

猶々表茶湯坊主之内三人替前之衆御座^レ、替罷上^レ外
様ニと被申出^レ外書付遣^レ外間、替之衆在江戶衆同前^ニ

可被召上^レ外、將又佐渡守殿御事、先書^ニ如申其元御
仕舞次第追付可被成御発足^レ外、圖書頭^{久通}事表今度御供
ニ被召列^レ外、為御心得^レ外、以上、

只今ハツ過從 兩上様為^{家光・家綱} 上使松平伊豆守殿・松平和泉

守殿ニ御暇被成御給、上意之趣老西國之儀御人少^ニ外間、
為御仕置御暇被遣由^ニ外、誠々目出度様子御屋敷
上下之大慶可被成御察^レ外、御立日限相究次第追^レ可申入
外、就其在江戶衆之儀、早々被仰付可被為召上^レ外、為御
存^レ外、恐惶謹言、

朱力半 正保五年 二月三日

新納石衛門佐 久詮判
鳴津圖書頭 久通判

鳴津彈正様
川上因幡守様
北郷佐渡守様
山田民部少輔様
人々御中

封面、名宛書等ハ略ス
二月三日ノ状同廿日ノ朝飛脚踏下候、
二月三日ニ殿様御暇御給之由候事、
一在江戶替衆早々可被召上事、

一 佐州老御上洛之事、
一 表茶湯坊主人替可被石上事、

202 光久公御譜中

今歳二月十五日改三慶安元、

203 御文庫廿番箱四拾四卷中

覚

高頭六十萬九千三百廿八石四斗四升三合六夕七才

人数壹萬八千貳百八十人但百石ニ付三人軍役として

内拾六萬貳千四百九拾七石四斗貳升四合九夕諸地頭高之

分

人数五千九百八拾貳人但百石ニ付三人六八一ニ當ル

七萬貳千卅九石三斗九升一合

諸外城高

人数貳千六百五十貳人右同外

高岡・程佐・倉岡・綾・須木・飯嶋除

拾三萬六十貳石四斗

鹿兒島地頭高之外

人数四千七百八十八人右同

拾五萬八千九百四十四石三斗三升一合四夕六才御藏入

高

人数千五百八十九人但百石ニ付夫壹人宛歟

貳千九百七十一石四升四合九夕四才

人数三十人右同

四千四百廿五石九斗五升

御私御藏入

壹萬三千八百八十八石八斗四升三合寺社并女性方高

五萬斛

不足高

壹万四千五百六十九石六升高岡・程佐・倉岡・綾・須木・飯嶋高

合高五十貳萬六千五百十四石五斗九升五合九夕

人数壹萬五千卅九人

合高八萬貳千八百十三石八斗五升三合八才 人数不懸高

外高九萬八千八百八十三石九斗一合貳夕七才 琉球高

高三萬貳千八百貳十八石七斗大島・鬼界島・徳之嶋・永良部嶋・与論嶋御藏入高

子二月十九日

慶安元年二月十九日

未ニアリ 相良助太夫殿被持上候、

204 光久公御譜中

正文在文庫

一筆令啓外、度々如被 仰出きりしたん宗門之儀領内入

念可遂穿鑿旨 上意候、將又吳国船領分之浦へ於令到来

考、可被相守去酉年二月十二日奉書之趣候、万一不義之

子細有之砌、長崎奉行人口注進之儀、移時刻於難義考、

見計之可被申付外、雖然湊は舟を不入沖に有之刻、卒尔

取懸事者無用外、自然人数不足外ハ、是又此以前如被
仰出、隣国之面々、早速人数出之様ニ被相談、無越度可
被計候、今度中國・四國衆御暇之節右之通被 仰合外之
間、為御心得如此外、恐々謹言、

宋カキ
慶安元年 二月廿六日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

205 御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

急度以飛脚令啓達外、然者昨朝留主居之者一人可致登城
旨任御觸状、相良主計罷上諸聞合衆并ニ 仰出之通承届
外、御意趣者此中之年号正保と改り無程外へ共、於
禁中被思召子細之故、慶安キヤウアンと御改元外間、其段国々へ被
仰渡外、諸大名國中にも早々可申渡之由被 仰出外、就
夫態申上外、早速被達 上聞肝要ニ存外、右之通儘ニ被
聞召届外由御老中へ以連署可被仰上外旨御奏者番衆太田
備中守殿被仰聞由外、勿論飛脚ニ早々御申上ニ存候、

恐惶謹言、

宋カキ
慶安元年 二月廿七日

町田勘解由
久則判

新納右衛門佐
久詮判

嶋津圖書様

川上因幡様

山田民部少様

人々御中

嶋津圖書様

川上因幡様

山田民部少様

参

久詮

封紙ニ

子二月廿七日ノ状三月十二日ノ夜

飛脚持下候、

新納右衛門佐

一年号慶安ト御改元ノ由候而

了二月廿六日ニ被仰出申候、

町田勘解由

206 雑抄

敬白

泰平寺薬師堂益屋勸進疏

薩陽高城郡有一精舎、號醫王山泰平寺也云々、

御文庫廿番箱四拾四卷中

光久公御譜中ニ在リ

正保五年戊子二月吉日

一 銀子卅目式分

薩摩ノ内菱刈

大口

地頭

新納加賀守殿

(念) 惣

大脇宗兵衛判

寺師半右衛門判

同 宮原 狩 野判

大口宿坊郡山寺

日向真幸ノ

加久藤

一 銀子拾六匁五分四厘

地頭 伊地知主膳正殿

噯 西 田 和 泉

同 川野與右衛門〇

同 白坂大炊左衛門判

一 銀子五分 宮内右兵衛

一 同壹匁二分 宿坊 不動寺

一 同壹匁 同 福性院

右之外多人數有之略ス、

右加久藤地頭伊地知主膳正ハ季通カ先祖ニテ実ハ新納加賀守忠清之ニ男ニ而
發子ト相成候事、

以上

追テ令啓入候、仍 又三郎様御祝言之為御祝儀、御家中

衆方惣中之為使者弟子丸幡摩被差上せり、一昨十一日

參着被申り、御祝物等之儀者於此地致談合可然様ニ相調

可申り、就其鈴木種兵衛別御使として被參りへ共、於大坂

圖書殿以御分別御兄弟衆・御家老衆・一所衆よりハ別ニ

御使無之りハと被思召被指下之由尤之至り、御言入之

為御祝儀使共被差上り御衆も御座りへ共、御祝言之時分

銘々ニ使者被成進上可然之由り、右之使者先々無披露

被差下り様ニ覚申り處、此度者無其沙汰之儀無心元存

り、併責り種兵衛人被參り間、御兄弟衆・家老衆・一

所衆方為使披露可仕り、松平河内守様・隱岐守様へ者從

其元之御祝儀入間敷由 御意之通大坂方被仰越り、乍去

去年御縁組相濟り為御祝儀河内守様より御国元迄さへ御

使被差越、御兄弟衆・家老衆へ御樽看拜領之由承り處、

此度御祝言ニ付御国中者使者被差上り儀者彼御方ニ隱有

間敷り、菟角音なしニ御座りハ成合申間敷り間、河内

守様御奥方・隱岐守様之御前様へも御樽看相調幡摩惣中

之為使差出可申由爰元以談合相極申り、右之通以御心得

御次り次第可被仰上り哉、又其篇ニ 御耳ニ者被入間

敷外哉、各任御相談ニ、猶萬端期後喜之時、恐惶謹言、

朱力半
慶安元年 三月十三日
新納右衛門佐
久詮判

鳴津圖書様

人々御中

封面左ノ如シ

鳴津圖書様

參

久詮

新納右衛門佐

一三月十三日之狀山田覺太夫卯月十八日ニ被持下候、
一又三郎様御祝言ニ付、爰元御兄弟衆・一所衆・家老
衆相中より之御祝儀として弟子丸播磨守事、河内様
奥方・隠岐様奥方へ御持持參之由、

208 御文庫拾一番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

貴札致拜見候、如仰我等儀海陸無事昨廿二日到長崎令參着、然老申様御事東目筋御下被成之由、定ゝ道中御無事於御国本御參着可被成と奉存候、被人御念是迄示被下忝存、然老琉球之内八重山御手前人数被指置、義御序御座、遠國之義ニ、上聞、不被指置様ニ我等方可申遣外之哉、松伊豆守殿・阿部豊後守殿・阿部對馬守殿も於御前被成御聞、委曲期後音之節、恐惶謹言、

朱力半
慶安元年 三月廿三日
井上筑後守
政重判

松平薩摩守様

貴報

209 光久公御譜中

慶安元年四月

家光公 家綱公參ニ詣于日光山、因、茲同二日光久奉
獻ニ白兔毛之御額二十、
家光公、馬大房五懸于、家綱公、

210 御文庫廿番箱四拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶、爰元御遣銀并去年以来之掛銀大分ニ入事ニ、自上方銀子調之儀不自由ニ罷成由、銀子無到來、何共笑止千万、京都へも折角被肝煎、此度も申越、兎角從御方銀子調之手たてを被仰外、於今分、當年中にも御行當御在江戸も難成、可有御座かと存、被差捨万事右之御相談專一ニ存、皆、御存知之前ニ、追、當分爰元へ罷有、故如此御座、以上、追、令啓達、

一 爰元 御發足以後天氣能海陸共ニ無御恙、先月七日細

嶋へ御着船之由從大坂申來り、先以目度御仕合珍重奉存り、爰元之儀も兩御屋敷皆々様御息災ニ被成御座

り、其外下々迄無替儀り間御心安可被思召り、御次り之刻御前にも可然様御披露所仰り、

一 公方様日光 御參宮之御日限表來ル十三日ニ相定候、

大納言様者五月節句過ニ可被為成様ニ承及り、

一 御進上物之儀、最前ハ大粧ニ可有之躰ニ書出共御座り

得とも、此比 仰出之御書付ニ四十万石以上之御衆者

御拾こり外御道服こりも拾、其外何にても右之賦を以

可有進上旨被仰渡りニ付、自此方者 公方様ハ白兔毛

之御鞆二十、大納言様ハ大房五掛、去二日ニ上り相濟

申り、御使ニ者伊東二右衛門被罷出候、右為御進上物

最前大房五掛從上方召寄り、其後餘之御大名衆御進上

物之書出過分之儀ニ外由對馬様任御内證、重る大房五

掛召寄、書出ニ者大房十掛と仕上置り間、此比御藏へ

致算合り處ニ、最前之大房五懸之内二掛御厩方衆御國

へ被持下之由り、就其儀ニ爰元町中相尋迷惑仕り、誰

之御下知ニ外御進上之御用ニ被調置り物を被持上り

哉、御國之於御用者上方ニ外如何程及可調り、此度之

儀者不慮ニ五懸ニ外相濟り、自然如最前拾掛上りり者

於公儀御外聞を被失儀り、笑止之至不淺り、為向後能々被成御糺明肝要ニ存り、

一 御供之御老中・御奏者番・御使番・御近習衆・大御目付衆・小御目付衆、其外物頭衆連々御知人中へ者從何

方も御音信物有之由り間、御并ニ進物相調進入申りへとも、御老中を初大形無御受用り、其内相留方表御座

り、為御意得り、

一 又三郎様御社參之儀阿部對馬様へ得御内意り、兩上様

還御之後、御并之衆承合、御老中へ申上可然之旨被仰

り間、其覚悟仕り、餘之御子様達表其分ニ見合之由承

り、猶後日相極次第御左右可申上り間不能詳り、恐惶

謹言、

朱力半
慶安元年 卯月五日

町田勘解由
久則判

新納右衛門
久詮判

山田民部少様

川上因幡様

鳴津圖書様

人々御中

封面上略ス

一子卯月五日之状第子丸曆曆五月廿九日ニ持下られ候、

一公方様日光御参宮、来ル十二日ニ相定候事、

一御願二十公方様へ、大房五掛大納言様へ御進上候、

一大房之内ニかけ御願へ被持下候、御礼明可被成由候事、

一御遣銀無之付矣止之由候事、

211 御文庫拾一番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、今度就日光 御参詣被差越使者、殊うつ
ほ廿被獻之外、遂披露候之處、入念之段御機嫌被思召
外、恐々謹言、

朱力キ
慶安元年 四月十一日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

212 御文庫拾一番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

今度日光 御参詣御祭礼御法事等首尾能御執行、可為還
御と目出度被存、被差越使者御樽看被献之外、遂披露候
之處、入念外段御機嫌被思召外、委曲使者可令演説外、
恐々謹言、

朱力キ
慶安元年 四月廿八日

阿部對馬守
重次判

213 御文庫拾一番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

今年就 東照大権現三十三回忌、輕罪之輩被成御赦免
外、然者於國々在る所々存其趣可放免旨被仰出外、雖不
及申外此節外間、大科之外者被赦之尤外、恐々謹言、

朱力キ
慶安元年 四月廿八日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

214 御文庫拾一番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、今度首尾能御暇忝被存之由尤之御事外、
去月十五日就國元到着被差越使者、殊更縞珠二十卷并二
種二荷被獻之外、右之通遂披露候之處、入念外段御機嫌
被思召外、委曲使者可令演説外、恐々謹言、

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

^{朱力年}慶安元年 四月廿九日
阿部對馬守重次判
阿部豊後守忠秋判

松平薩广守殿

松平伊豆守信綱判

215 光久公御譜中ニ在リ

御札致拜見候、兩上様弥御機嫌能被成御座之之間可御
心安外、將又今度首尾能御暇到着在所忝被存之由得其意
存外、依之被差越使者 大納言様江縹子十卷并御樽肴被
獻之、遂披露之、被入念之段御満悦之御事候、委
曲使者可為演説外、恐々謹言、

^{朱力年}慶安元年 五月朔日

松平和泉守

乘壽判

松平薩摩守殿

216 光久公御譜中

光久在レ國而聞ニ 家綱公始御中刺一、走レ价進ニ獻御樽肴、
將軍家 大納言家一奉レ賀レ之也、

217

御文庫拾ニ 番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

御状令拜見候、大納言様御中刺被遊外之儀相違、目出

度被存之由得其意存外、因茲被差越使者御紙面之通被獻
之、遂披露候之處、一段之御仕合候、委曲使者可為演
説外、恐々謹言、

^{朱力年}慶安元年 五月九日

松平和泉守

乘壽判

松平薩摩守殿

218 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、去比 大納言様始而 被遊御中刺外之儀
相違、目出度被存之由得其意外、依之被差越使者殊御樽
肴被獻之候、右之趣 遂披露候之處、入念外段御機嫌之
御事外、委曲使者可令演説外、恐々謹言、

^{朱力年}慶安元年 五月十四日

阿部對馬守重次判

阿部豊後守忠秋判

松平薩摩守殿

松平伊豆守信綱判

219 光久公御譜中

一書申入外、先以薩摩守様從早晚當年老早御下、各御満
足察存外、拙者も罷下唯今緩々として休息仕事外、然老繪圖
之儀ニ付る道程之儀御尋之由秋月又左衛門申聞外条、則

其首尾相調々様こと申付々、萬事御談合可申入々条可然様ニ頼存候、恐惶謹言、

五月十四日

秋月長門守
信春判

嶋津彈正様

人々御中

御文庫拾二番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在り

追啓松平伊豆守有御用日光山に被遣々付る不能連判

外、以上、

一筆令啓外、就南蛮人之儀書付之通得其意外、然者彼船自然琉球に於令到着者早速可追出之、萬一及吳儀者急度可行斬罪之旨 上意外、琉球之儀者勝手能様可被申付外、其外之事者去年被仰出条数之内に相見外、則其條目写進^{本マ、}之外、書面之趣可令守之外、恐々謹言、

^{朱カキ}

慶安元年

五月廿八日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平薩摩守殿

北郷忠亮弟又次郎久常譜中^始昭^忠

慶安元年戊子有^下為^ニ庶子分^ニ可^レ附^ニ與采地千石於忠昭^一之高命上、雖^レ然古來無^下配^ニ分采地於庶子^一之例、故忠能之後室並久直之後與家老等相議獻^ニ上梅北之内寄地村千石^一、忠昭拜^ニ領^一、

(表紙)

光久公	自慶安元年
綱久公	至同二年
追	
舊記雜錄	
卷三	

光久公御譜中

正文在文庫

御札令拝見候、去比當地甚雖地震レ、御城中其外無別條之通相達、目出度被存由尤之事レ、依之被差越使者レ、入念レ段、及上聴レ處、御機嫌被思召レ、恐レ謹言、

朱力半
慶安元年

六月五日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

光久公御譜中

正文在文庫

貴墨致拜見レ、如仰四月廿二日甚地震ニ御座レ得共御城内別条無之レ儀、御息又三郎殿方被仰遣目出度被思召被差越御使者レ之由、得其意御尤奉存レ、増レ御靜謐御座レ間、可安貴意レ、恐惶謹言、

朱力半
慶安元年
六月六日

松平和泉守

(兼判)

松平薩摩守様

光久公御譜中

(政重)
井上筑後守殿御口上

一兩(家光・家綱)上様御機嫌御能被成御座レ由、節レ御左右被聞召、御大慶之段、御同前ニ被思召レ事、

一八重山嶋御番手之儀、江戸へ筑後守殿より被仰上レ、左様成御礼之通、御懇懃被思召由レ事、

一おらんだ朝舟参りハ、可被尋究レ、おらんだ事ハ、權現様御代ニ参り申上レハ、南蠻人宗跡を廣め終ニ日本を取可申との心底ニ由申レ、于今不相替由被仰レ事、

一唐之兵乱も未治り、前王之末類共方々へ多御座りに付、とし軍ニ罷成、近年可治様ニ無之由、唐人共申由

り、北京・南京・福州などハたつた人取り、夏ハたつた人の弓よハミり故、唐人致合戦度存りへとも、

兵具無之故不罷成由、今度参たる唐人為申通被仰り、今度唐之兵具被召寄りて御覧りへハ用ニ可立物にて無之り、彼道具にてハ中々合戦成間敷由御物語り事、

一御領分之浦々被為御覧、甌鳴へ御渡海炎天之時分御大儀之至ニり、湊之様子細々絵圖ヲ以被仰越り、具被御覧届り、何之湊も自然之時綱はり場など荒波にて可難成やうに被及御覧り哉、御尤之御念遣にてり、被聞召

置由被仰り事、

一長崎口之いわう(伊王)・かうやき邊へ黒舟参り時之儀ハ、先

三郎左衛門尉殿(堀埜利惠)・權八郎殿(山崎正徳)・筑後守殿いかにも輕キ

使一人充通事兩人被差加、小艇にて被遣様子可被聞召り、其時訴詔ニ参たる由申りハ、早く黒舟之使者何も

陸へ上りりて南蛮よりの意趣申上りへ、被聞召りて早速江戸へ可被仰上り、若陸へ不上りハ、此方より被出

向りてハ被聞召間敷り間、左様ニ相心得りへと可被仰聞り、此上にて陸へ不上りハ、早く帰帆可仕通被

仰含、曾る御かまい有間敷由被仰り事、

一網用意之儀ハ入間敷由

公方様被成 御意り、御年寄衆ハ左様之用意仕りるもすたらさる儀り間、まゝニ可被成由り、長崎へも少々御用意共り由御物語り事、

一先年土佐へ黒舟参りニ付、可懸留由被仰付、質人ヲ一人取置綱を被張り處、質人を捨舟ヲかけ出しり、其時ハ綱もきれりて不懸留由御咄被成り事、

一近年南部へ黒舟参り条、留置り様ニ被仰付り故、質を捨人被取置り處、質十人相捨舟ヲかけ出しり、惣も南蠻人ハ捨質などもあて置り由、御物語り事、

一去年長崎へ参り黒舟も湊内へ懸引なしニ御入被成筈にて無之りへ共、其時分筑後守殿江戸へ御座り故無御存知り、去年之被成様ハ、先湊へ舟をよび入被成りるより後ニ楫・石火矢等ヲおろしりへとの下知之由り、就其彼方より存りハ、先年南蠻人七拾人被打果り、此度も左様成手立にてもやりハんなど、存り哉、舟道具を不相渡一人も陸へ不上り、御奉行衆よりの御使黒舟へ被遣り時も使者相煩り由申り、對面もなく被成にいき次第ニ成立り様ニ被聞召り由、御物語被成り事、

一 先年於長崎、南蠻人七拾人御成敗被成りぬ、舟を御焼
 け事ハ殊外巨細ナリ、 權現様御時より日本之あたこ可
 成ものハ此宗躰之由被仰置ナリ、

怠徳院様御代にも其分ニ候、就中當 公方様日本之魔
 にてナリ、次第ニあたをなすへきと被及 御覽ナリ 公
 方様御病中ニ、天草・嶋原にて起一揆候、其脇かりう
 た二艘参り時、向後日本へ御入被成間敷ナリ、早々帰
 ナリへと被 仰出、日本之なけ銀之荷物を乗せりぬ御帰
 しナリ処、其次年一艘参り、背 御下知り之間、御成敗
 被成り、早竟銀主共南蠻人をだましナリて呼寄せりハ
 と被仰り事、

一 使者舟などを伐果可被成理にてハ無之ナリ、いかにも氣
 遣無之様ニ可被仰出由ナリ通、御物語被成り事、

一 去年隣国より舟數・人数を被寄せり儀も、自最前吳國
 舟ヲ可被召果との御儀定にてハ無之ナリ、長崎湊内ノ警
 固迄ニナリ、若彼方方仕出シ日本之御ひけニ可成程之子
 細共ナリヘハ 上様之儀ハ不及申、天下あらん限ハ其難
 きへましくナリ条、うか／＼と取かけ、若可及越度儀ハ
 深く笑止ニナリ間、其時ハ人数可入り故被召寄たる由、
 御物語被成り事、

一 去年南蠻舟使者之意趣ハ、ほろとかるの王位いすはん
 やより國を被取り、其時分ほろとかるの王、年少ニナ
 リ取立、盛人ナリぬ右之ほろとかるヲ四年前ニ取返し
 ナリ、其祝言として色々捧進物ヲ、日本へ御礼申上ナリ、
 右進物之外ニ、ほろとかるの王位着用之鎧のうつし一
 領、進上申ナリ儀ハ 權現様已來為申入筋にてナリ間 公
 方様御為ニ右之本鎧ヲ着用ナリぬ一命ヲ捨御奉公可申上
 ナリ、其驗ニ差上ナリ由申り事、

一 右之意趣 上様被聞召上ナリて御返事、ほろとかる取返
 しナリ祝言を日本へ可申上子細ハ有間敷事ニ思召ナリ、又
 ほろとかるの王一命を捨日本へ御奉公可仕ナリと申儀、

是も一万里ヲ隔、吳國方左様之手筈成間敷ナリ、又 公
 方様御為ニ可成儀にて無之ナリ、併、宗門を廣め間敷
 ナリ由神文などニ申上ナリハ、御用捨もナリぬ御馳走も
 可有之ナリヘ共、左様之儀ハ一言も不申上ナリ、但今度左
 様之首尾も可有之哉之由、御尋ナリヘ共、使者として何
 分と難申上ナリ、帰國仕ナリぬ國王へ可申聞由使者御返事
 ニ申上ナリ、就其使者へ被仰聞ナリ様子ハ、黒舟之儀、日
 本へ無御入儀ニナリ處、宗門を廣め間敷との究も不申、
 又此度参りぬも役ニ不立申分無御合点ナリ間、皆々可被

打果儀ニハ共、使者舟之儀ニハ、又去年しやかたらへ寄、おらしたヲ頼、舟こしらへ仕たる由、ありのまゝニ申上ハ、此兩条ニ付る命ヲ被助け間、早々可致帰帆之旨、被仰含ハテ右進物何も被相返帰帆仕ハ、筑後守殿方ハ難被仰儀ニハ共、御心得入儀ニハ間、御物語之由ハ、此段ハ御隱蜜之様ニ被仰ハ、三郎左衛門尉殿・權八郎殿方曾ハ不被仰ハ事、

一右之舟出船之刻石火矢・小鉄炮などはなし、氣任仕ハハ、則可被打果由被仰聞ハ故、左様成如在曾ハ不仕ハ由被仰ハ事、

一不儀之子細共仕ハ時ハ見計を以可被仰付之由、御奉書写ニ相見得ハ、自然石火矢など打かけハハ、見計ニ可仕ハ哉と得御意ハハ、一万里石火矢打ニハ參間敷ハ、為訴詔參ハ、縦五百艘千艘參ハ、岡之頭などハ石火矢を打かけハ共、日本之御(舟カ)ハ成間敷ハ、又殊外造作入舟之由ハ間、舟數可遣国にてハ無之由、御物語被成ハ事、

一日之下ニ日本人程ぬき能もの無之由南蠻人申由ハ、然時ハ幾度も任之手立を可申と御咄被成ハ事、

一御國へ黒舟參ハハ、高力攝津守殿・日根織部殿へ被仰

合早速其所へ可被差越由被仰ハ事、

六月廿三日

(02)

馬場三郎左衛門尉殿御口上

一兩上様御機嫌御能被成御座ハ通、節々御左右被聞召御大慶之段、御同前ニ思召ハ、長崎何ぞ無相替儀ハ由被仰ハ事、

一御領内南方之諸浦御見廻、其上甕嶋迄御渡海被成被入御念ハ段御大儀ニハ、就其湊之様子細々絵圖を以被仰越ハ、若黒舟參ハハ刻湊口廣ク荒波之故、つななど御はらせハ事可難成様子ニ被及御覽ハニ付、御念遣之由御尤ニハ、左様成湊ハ可被成やう無御座ハ、被聞召置ハ由被仰ハ事、

一若吳國舟參ハハハ刻、万事御奉書之趣を被相守可被仰付ハ、訴詔御座ハ通申ハハ、御國本方御取次ハ不罷成ハ、早々長崎へ參ハハ可申上由、何時も被仰聞尤ニハ、其上ニても長崎へハ參ましきなど申ハハ、於其儀ハ早々帰帆可仕由被仰付、御かまひなき様ニ可被成由被仰ハ事、

一吳国人水取ニおり可申なと申ハ者如何可仕哉と得御意ハハ、其時之やうす兼る御差圖難成由被仰ハ事、

(03)

一 惣ゝ吳国舟之あたりにうかくと浦之者共寄付りゝと
らられざるやうに被入御念可被仰付置儀肝要に、か
やうの儀共難被仰事に、共為御心得被仰之由外事、

六月廿二日

山崎權八郎殿御口上
(正信)

一 兩 上様御機嫌能被成御座候、御左右節に被聞召御大
慶之由御同前ニ思召候、長崎之儀相替儀無御座由被
仰外事、

一 今度御領内浦に御見廻被成、炎天之時分御大儀之至
り、湊之様子絵圖にて被仰越り、具被御覽届り、吳國
舟之儀ハ何時も被任御奉書旨に御尤に外事、

一 諸濠荒波にて津口廣ク、御念遣之由被仰越り、左様
之湊ハ可被成様御座有間敷り、定自筑後守殿細く可被
仰達り、万事御心得可入儀ハ弥々互可被仰合り、右御
意趣具に被聞召置之由外事、

一 水を取せりゝも苦問敷外哉、事破れりゝハ可為笑止と
被仰外事、

慶安元年 六月廿三日

御使 (宗弘) 平田狩野介
同 (久徳) 川上因幡守

225

御文庫廿番箱四拾五卷中 光久公御譜中に在り

(家光男) 鶴松様御天生御弱御座り処に、五三日前より御氣色悪敷

りゝ昨夕に重罷成、今曉御遠行絶言語候、私儀別ゝ迷惑
仕り、其故御連署に不申入り、為御心得り、恐惶謹言、

朱カキ 慶安元年 六月廿四日

鳴津圖書様

鳴津筑前様

鳴津中務(レス)

久判ナシ
御譜ニ久茂トアリ

226

御文庫貳拾番箱四拾四卷中 光久公御譜中に在り

以上

追ゝ令啓入り、

一 琉球國王御跡目之儀、從御方被仰上り通無別儀相濟、
昨日於御城我々兩人被召出御返事被 仰出外、

一 琉球八重山嶋番手之儀此度被達 上聞外処、後役番手
致無用引取り様こと 上意之旨同前ニ被 仰渡り、

一 從琉球唐へ為左右聞遣り舩に鉄炮乗せ度存り由、三司
官被申出外通同前ニ申上置り、此御返事及昨日御座
外、乍去及口能外問、黒田三左衛門明日爰許罷立帰國
被仕り、此便に委細口上に可申達り、是表大形相濟躰
に得共、從先年御法度之旨為被 仰渡儀に故被入

御耳ハ所、御遠慮ハ御老中御相談を以被仰出ハ由承
ハ、為御心得先此度如此御座ハ、恐惶謹言、

朱カキ
慶安元年
六月廿六日

新納右衛門佐
久詮判

北郷 佐渡
久加判

山田民部少様

川上因幡様

鳴津圖書様

人々御中

封面ニアリ

子六月廿六日之状七月十日ニ飛脚到来、

一疏王位之儀此方より御申のこと可然由被仰出候、

一疏八重山嶋番手引取候様ニ候、

一疏より唐へ左右開舟遣候舟ニ鉄炮撃せ度存候由、三司官被申通申上置候、御返事

追而可被仰下由候、

外宛名ハ略ス

227
光久公御譜中

慶安元年七月三日、以ニ 上使大久保平四郎(忠興)、恩ニ賜御

鷹所執之雲雀一、光久謹拜三受之一、登ニ 高城一奉レ謝レ焉、

228
御文庫貳拾番箱四拾四卷中

光久公御譜中ニ在リ

今朝以 御上使御鷹之雲雀被成御拜領目出度奉存ハ、此

等之御吉左右早々為可被入 御耳、以飛脚可申上旨被仰
出ハ間如此ニ御座ハ、不及申ハへ共右之段被聞召上御大

慶之通 御老中迄追付以御状御礼被仰上肝要ニ存ハ、御

使者乘馬衆敷小荷駄衆敷之間可被仰付ハ、御上使ニ八大

久保平四郎殿(忠興)と申ハ御進物奉行之由ハ、同日ニ御并之衆

十五人へ御鷹之鳥御拜領ハ、是又為御心得申ハ間、可然

様ニ御取成被達 上聞尤ニハ、恐惶謹言、

朱カキ
慶安元年
七月三日

新納右衛門佐
久詮判

北郷 佐渡
久加判

鳴津圖書様

川上因幡様

山田民部少様

人々御中

封面ニアリ外略

子七月三日之状同七月十五日飛脚持下候、

一以御上使御鷹の雲雀被成御拜領候由候事、

一早々為御礼乘馬衆か小荷駄衆か可被為召上由候事、

229
御文庫三番箱六卷中

光久公御譜中ニ在リ

覚

一又三郎下屋敷へ召置可然思召由被入御念此度被仰下系存候事、

一娘縁組見合も御座レ者被仰調レ様ニ御校量可被成由

レ右者前ニ御内談申レ通ニ可然存候、弥首尾仕レ様

ニ御取合頼入レ事、

一上方方々借用有之レ仕置被聞召度由レ、是又忝存候

事、

已上

朱力半
慶安元年

末紙二

子八月十日

此御条書ハ不入候由候、鎌田源左衛門殿より被為渡候、

慶安元年九月朔日ニ請取、

230

光久公御譜中

音書之一緘於家老所到来御懇懃之至珍々重々、如來字去

々年以往在府江陽之處、今歳孟夏之頃幸ル給御暇于今休

息、誠我等之恐悦可過御推察耳、仍今度於江戸城犬追物

致張行之處、到其地觸貴聞大粧之儀感心由令承知、別被

為入御念趣欣然之到也、(至)猶期後音之節不能詳候、恐惶不

宣、

八月廿三日 薩摩守光久御在判

謹上 中山王

231

御文庫拾二番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在り

去月廿一日之貴札披見仕レ、如仰今度 鶴松様御早世被

遊誠以不及是非儀レ、就其伊集院右衛門方被指越之旨令

得其意レ、恐惶謹言、

朱力半
慶安元年

八月廿三日

松平薩摩守様

貴報

堀田加賀守

正盛判

232

光久公御譜中ニ在り

御札令拜見レ、鶴松殿御逝去之儀相達被驚存之由得其意

レ、依之被差越伊集院右衛門佑入念レ段及 上聴レ、恐

々謹言、

朱力半
慶安元年

八月廿四日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

233

光久公御譜中ニ在り

御狀致拜見外、如仰羈松殿御煩色、被成御養生外得共、不相叶御逝去之事外、誠不及是非儀共外、就夫老中迄以

使者被仰入之由尤外、委曲伊集院右衛門佑方可被申達外、(以下挿入)外間、不能一二外、恐惶謹言、(マ)

朱力半
慶安元年 八月廿八日 酒井讚岐守 忠勝判

松平薩摩守様

234 光久公御譜中

今度中山國先王尚賢之跡續目之儀、從各為可被窺之國頭、(琉球)

宜灣(宜野灣)為使節被差渡趣、具令得其意矣、然考度、令通信

其國之儀從往年以來被屬當家、其上御代、帶御朱印地雖

無紛冗、隔波濤依為遠邦、此節亦至當 公方家光公經

高聞之處、猶彼國者光久為領地之間、不及御口能之旨所

被 仰出也、依之中城王子為王鄉(卿力)之同姓故、令許與續世、

加之領所以下不易前代、宛行早、早速被進即位可足安堵者

必矣、誠於中城者被播生前之譽、且復各滿達令察早、重

否自是可伸嘉祥、然則國中仕置聊不違前代、堅固被申付

可抽奉公忠勤、若犯違之族在之、妨國政者、忽可行嚴

科、到王位表不異令忘件之恩願者歟、以此旨三司官其外

諸臣以下迄可被觸其間、猶自家老中可有演說之間令省略候、恐、謹言、

朱力半
慶安元年 九月二日 光久御判

金武王子 御宿所

235 全御譜中

覺

一先王尚賢不慮、御薨逝、付、繼目之儀諸王子・三司官

以談合、中城之王子、即位被成度由、國頭王子并宜灣

兩使、被仰越外、其趣薩摩守殿、具申達外、就其江(光久)

戸御三老、北郷佐渡守・新納右衛門佐、右之様子被

得御意候處、追付被達 上聞被 仰出 上意之趣者從

薩摩守入念、窺上意候、先王繼目之儀、薩摩守領國、

外へハ心次第と被 仰出候、弥以不易 上意、外間心

次第、可被申付由、就被仰出、各如被仰上、中城王子即

位、申定之由、御三老へ御返事御申候事、

一當王即位為祝儀、來春無餘儀、衆可被指渡外、尤江戸へ被

致參上儀、表可有之外間、先王繼目之御進物、以見計使者

持參可申外様、可有御心得外、大納言様(家綱)に若何、御手

遊道具、為替鳥類なども進上外の可然存外事、

一當王御若輩ニ外間、萬事金武王子御指南被申、琉球國

長久之計肝要之由被 仰出候、尤何篇先規ニ不替様各

校量專ニ外、巨細者可被相守 御書之旨事、

一八重山嶋番手之儀遠嶋ニありハ御心遣之由内々江戸

御三老迄被仰入置外候、此度達 上聞彼張番御免許之

旨被 仰出外、併御領内之嶋ニ外ハ被入御念御仕置

肝要外事、

一大明ハ左右聞船遣度各被存通此度繼目之儀被伺御意外

次有ニ御申上外ハ、従上古琉球國之儀ハ王号并冠を

も大明より相渡儀ニ外、後年渡海之障ニも罷成と被

申上外、尤被 思召外、其分ニ左右聞船可被申付外、

鉄炮之儀も式拾挺程其外ニいふり筒二三丁迄苦間

敷由、御三老より北郷佐渡守・新納右衛門佐へ被仰

聞外、其心得可被成事、

一王位御神文之儀如旧例被成外様可被為申外、檢者之儀

老鎌田左京方へ申渡外事、

一琉球國中神水之儀如前々可被仰付事、

以上

慶安元年九月二日

236

御文庫廿番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在り

今度伊集院右衛門殿為御使早々被成参着 靄松様御逝去

之御吊被仰上外趣首尾能相濟御奉書出、被成帰國外間不

及口能外、次ニ丹波之國福地山と申所へ御座外稻葉淡路

殿氣違御身躰相果外、其段老從京・大坂も定有可被申上

外、就夫昨日朔日ニ伊豆守殿・豊後守殿方 又三郎様ハ

御用之由被仰御奉書参外故、則御登 城外、諸大名御並

ニ右淡路殿御身躰之儀被仰出外、御意趣 又三郎様老細

々被聞召達間敷と存、松平能登様へ得御意外處ニ、直ニ

以御状被仰下外間、則其御状を相添致進上外、可然様ニ

被成御披露肝要ニ存外、余老期後慶之時外、恐惶謹言、

山田民部判(有朱)

川上因幡判(久國)

鳴津圖書判(久通)

三司官

金武王子

朱力キ 慶安元年 九月二日

新納右衛門 久詮判

北郷佐渡 久加判

山田民部様

川上因幡様

鳴津圖書様

人々御中

封面ニ

慶安元年九月二日之状十月十一日ニ伊集院右衛門御下ニ被為持

下候、

外名而略ス

237

御文庫拾一番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

御使札忝致拝披^レ、然者琉球八重山嶋^ハ從先年張番之者被渡置^レへ共、遠嶋故今度被達 上聞^レ之処、番之者共引取可申之旨被仰出、并琉球國王繼目之儀御手前心次第可被申付由 上意之趣忝思召旨御紙面之通承届^レ、因茲為御札之使者被指上之由得其意存^レ、猶期来音之可得御意^レ、恐惶謹言、

朱カキ 慶安元年

九月二日

堀田加賀守

(正徳) 正判

松平薩摩守様

貴報

238

光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、琉球八重山嶋ニ從先年被差置^レ張番之者

239

御文庫拾一番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

御状致拜見^レ、然者琉球八重山嶋張番之者之儀達 上聞遠嶋之儀ニ^レ之間、引取可申旨被 仰出忝思召之由尤存^レ、随^テ琉球國王繼目之儀被得御意^レ、薩^ノ守次第と被 仰出是又忝被存之由尤^レ、依之老中迄以使者被仰入^レ、御念之入^レ趣、各申談達 上聞^レ、委曲御使者可被申達^レ間不能一二^レ、恐惶謹言、

朱カキ 慶安元年

九月七日

酒井讚岐守

忠勝判

松平薩摩守様

貴報

240

光久公御譜中

正文在文庫

為重陽之佳事小袖五到来歡思召候、尚酒并讚岐守可申レ也、

宋カキ
慶安元年
九月七日
家光
墨印

薩广侍從とのへ

241 光久公御譜中

同年九月二十六日張ニ行犬追物一、光久亦射レ焉為ニ是、
代始之犬追物ニ也、是當家相ニ續家督一則カキラス爪張ニ行之ニ舊
例也、故及ニ于此一、

242 御文庫廿一番箱犬追物二卷中 光久御譜中ニ在リ

初日 一番

四角之外鬮次第

犬追物御手組之事慶安元年戊子
九月廿六戌子

殿 六正 嶋津又十郎一疋

入来院石見守一疋 吉田久兵衛尉一疋

三原遠江守一疋 村上内記一疋

嶋津又左衛門尉五疋 吉田次郎兵衛尉一疋

嶋津中務少輔三疋 山田弥九郎三疋

嶋津上野介二疋 嶋津四郎左衛門尉一疋

檢見 喚次

嶋津圖書頭 蒲池新介

初日 二番

四角之外鬮次第

犬追物御手組之事慶安元年戊子
九月廿六日

御 六正 嶋津又十郎一疋

入来院石見守一疋 吉田久兵衛尉一疋

三原遠江守一疋 村上内記一疋

嶋津又左衛門尉五疋 吉田次郎兵衛尉一疋

嶋津中務太輔三疋 山田弥九郎三疋

河上 嶋津上野守二疋 新納 嶋津四郎左衛門尉一疋

檢見 喚次

嶋津圖書頭 蒲池新介

初日 二番

四角之外鬮次第

犬追物手組之事慶安元年戊子
九月廿六戌子

嶋津大膳亮二疋 嶋津主計頭三疋

鎌田源五郎一疋 種子嶋為兵衛尉一疋

種子嶋次郎右衛門尉四疋 仁礼左近將監一疋

鳴津七兵衛尉四正

鳴津助六一正

本田六左衛門尉三正

本田甚兵衛尉二正

鳴津縫殿助一正

菊池太右衛門尉一正

鳴津又右衛門尉二正

伊勢兵部少輔四正

鳴津安藝守四正

鳴津源介二正

上井采女正一正

平田兵十郎二正

檢見

喚次

鳴津長門守一正

肝付伴兵衛尉一正

鳴津圖書頭

鳴津仲次郎

鳴津東市正

鳴津諸右衛門尉二正

初日 二番

四角之外鬮次第

鳴津又左衛門尉

岩切雅樂助

檢見

喚次

犬追物手組之事慶安元年九月廿六日

鳴津大膳亮二正

鳴津主計頭三正

初日 三番

四角之外鬮次第

鎌田源五郎一正

種子嶋為兵衛尉一正

犬追物手組之事慶安元年九月廿六日

種子嶋次郎右衛門尉四正

仁礼左近將監一正

鳴津上野守二正

鳴津弥一郎三正

鳴津七兵衛尉四正

鳴津助六一正

本田六左衛門尉三正

本田甚兵衛尉二正

鳴津縫殿祐一正

菊池太右衛門尉一正

鳴津又右衛門尉二正

伊勢兵部少輔四正

鳴津安藝守四正

鳴津源介二正

上井采女正一正

平田兵拾郎二正

檢見

喚次

鳴津長門守一正

肝付半兵衛尉一正

鳴津圖書頭

鳴津仲次郎

鳴津東市正三正

鳴津諸右衛門尉二正

初日 三番

四角之外鬮次第

鳴津又左衛門尉

岩切雅樂助

檢見

喚次

犬追物手組之事慶安元年九月廿六日

鳴津上野介二正

鳴津弥市郎三正

初日 四番

四角之外鬮次第

犬追物手組之事慶安元年戊子九月廿六戊子

二日

鳴津圖書頭三疋

鳴津作左衛門尉三疋

四角之外圍次第

鳴津東市正五疋

鎌田又七郎一疋

犬追物手組之事慶安元年九月廿七日

柏原弥太右衛門尉一疋

本田右衛門佑一疋

上手

伊集院 鳴津源介五疋

二階堂城介二疋

鳴津六郎兵衛尉二疋

本田久左衛門尉一疋

福屋助左衛門尉二疋

鳴津又右衛門尉一疋

本田久左衛門尉三疋

鳴津又十郎二疋

鳴津主計頭二疋

鳴津又左衛門尉三疋

本田甚兵衛尉一疋

檢見

喚次

鳴津又左衛門尉

鳴津十郎

仁禮左近將監本マ、

吉田次郎兵衛尉一疋

初日 四番

四角之外圍次第

犬追物手組之事慶安元年九月廿六日

御 二日

北郷 鳴津仲次郎

鳴津圖書頭三疋

鳴津作左衛門尉三疋

鳴津東市正五疋

鎌田又七郎一疋

四角之外圍次第

柏原弥太右衛門尉一疋

本田右衛門佐一疋

犬追物手組之事慶安元年九月廿七日

二階堂城介二疋

鳴津六郎兵衛尉二疋

次手

本田久左衛門尉一疋

福屋助左衛門尉二疋

鳴津東市正四疋

佐多 鳴津六郎兵衛尉二疋

鳴津又拾郎二疋

鳴津主計頭二疋

伊勢兵部少輔一疋

山田弥九郎一疋

檢見

喚次

新納 鳴津又左衛門尉

喜入 鳴津十郎

福屋助左衛門尉本マ、

柏原弥太右衛門尉本マ、

種子嶋為兵衛尉二疋 本田右衛門佐一疋

嶋津主計頭二疋 嶋津圖書頭三疋

新納 檢見 喚次

嶋津又左衛門尉 嶋津拾郎

二日

四角之外圖次第

犬追物御手組之事慶安元年九月廿七日

下手

御 四疋 嶋津諸右衛門尉二疋

入來院石見守マ、 平田兵拾郎五疋

嶋津助六三疋 鎌田又七郎一疋

村上内記マ、 平山 嶋津七兵衛尉一疋

枇杷山 嶋津長門守一疋 本田六左衛門尉四疋

嶋津四郎左衛門尉マ、 嶋津大膳亮マ、

新納 檢見 喚次

嶋津又左衛門尉 蒲池新介

三日 一番

鑷平圖次第

犬追物御手組之事慶安元年九月廿八日

御 二疋 新納 嶋津又左右衛門尉

嶋津圖書頭一疋

福屋助左衛門尉一疋

伊勢兵部少輔一疋

嶋津又右衛門尉三疋

嶋津大膳亮

檢見

嶋津中務太輔

三日 二番

鑷平圖次第

犬追物手組之事慶安元年九月廿八日

吉田次郎兵衛尉

入來院石見守

河上 嶋津助六一疋

新納 本田六左衛門尉一疋

新納 嶋津縫殿佑一疋

比志嶋 村上内記一疋

檢見

新納 嶋津又左衛門尉

三日

鑷平圖次第

二階堂城介

鎌田又七郎三疋

種子嶋為兵衛尉一疋

平山 嶋津七兵衛尉一疋

嶋津安藝守一疋

喚次

岩切雅樂助

伊十院 嶋津主計頭

嶋津源介二疋

平田兵拾郎四疋

種子嶋次郎右衛門尉四疋

嶋津六郎兵衛尉一疋

嶋津東市正

喚次

岩切雅樂助

勝負之犬手組之事慶安元年九月廿八日

吉田次郎兵衛尉二疋

入来院石見守二疋

河上 嶋津助六三疋

本田六左衛門尉三疋

新納 嶋津縫殿佑二疋

比志倫 村上内記一疋

檢見

嶋津主計頭

三日

鏑平闖次第

勝負之犬御手組之事慶安元年九月廿八日

御 七疋

嶋津圖書頭一疋

福屋助左衛門尉二疋

寺山 伊勢兵部少輔三疋

嶋津又右衛門尉二疋

嶋津大膳亮一疋

檢見

新納 嶋津又左衛門尉

嶋津諸右衛門尉一疋

伊十院 嶋津源介三疋

平田兵拾郎三疋

種子嶋次郎右衛門尉三疋

佐多 嶋津六郎兵衛尉一疋

嶋津東市正一疋

喚次

新納 嶋津仲次郎

243 光久公御譜中

一 射手奉行兩人（兼抱）すわふゑほし

新納刑部太輔
諏方左衛門尉

一 御劍之役

町田源左衛門尉
新納小右衛門尉

一 御かいそへ

伊集院久兵衛尉
三原傳左衛門尉

一 狼藉奉行五人鬨斗目ニテ長袴

平田監物
米良隼人佑

菱刈縫殿助

一 犬奉行兩人

北条善左衛門尉
村田藤左衛門尉

一 御棧敷日記兩人すわふゑほし

高野勘左衛門尉
有川喜左衛門尉

一 幣振兒兩人児装束

伊集院長右衛門尉子
伊集院鶴松
土持平左衛門尉子
土持徳介

一 犬懸衆八人但廿人衆内小すわうゑほし

一 犬放六人御小者衆右同

一笠袋・弓袋上指中間袴鏈鞭主馬小者矢取小すわふ挾箱
右者下方ハ客屋カ支度所迄中途備、上方ハ北郷作左衛
門宿カ、

244 圖書頭久通譜中

慶安元年戊子九月自レ六日至レ八日三ケ日、有ニ當代犬追
物一、久通亦有ニ射手列一、故或為レ射手或為レ檢見者也、

245 光久公御譜中

去年琉球國王尚賢承ニ光久之命一而即位、故因ニ前規一恭
欲下獻ニ使節于江府一奉レ告ニ相續之謝禮一、光久稟ニ之執
政一、執政投ニ奉書一光久來年朝覲次須レ延ニ携之一云レ爾、

246 御文庫拾貳番箱四拾貳卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以吳國船之義別紙之趣承届カ、已上、

御札令拜見カ、琉球之使者為御禮參上時分之儀并參勤之
事示預之通達 上聞カ處、吳國人ニ間、其方召列來年
六月中到江戸參府カ様一こと被 仰出カ、可被得其意カ、
若相替義カ者從是一可申入カ、委細使者可為演說カ、恐ク
謹言、

朱力子
慶安元年
十月十五日

阿部對馬守
重次判

松平薩广守殿

阿部豊後守
忠秋判

松平薩广守殿

阿部豊後守
阿部對馬守

247 御文庫拾貳番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見カ、松平大和守御死去之儀相達被驚存之由得
其意カ、依之被差越使者カ、被入念之段可及 上聽カ、
恐ク謹言、

朱力子
慶安元年
十月廿日

阿部對馬守
重次判
阿部豊後守
忠秋判

松平薩摩守殿

(挿入)

正保四年丁亥八月廿三日於江戸御死

一玄蕃様御他界ニ付、後生之御供被思召究候由昨日預御
(久重)

248

書中、殊以最期之御哥迄二首拜見、扱々驚存、御心底之程感入計り、誠ニ浮世如夢醒安キ世なから、頓ニ身命を捨(マ)たられり事無比類、勇者ハ不恐、智者は不惑之御心中、尤連々之御思慮顕然之至と存り、且御名譽を致感慨、且生来之別離を歎、落涙難留愁腸之餘、愚哥三首短冊ニ書付令進獻り、生別之暇乞追薦之寸志云本ノマ云恰、御存生之内之御一覽可為本懐也、先呈一翰り、拙者事去夏以来相煩養生最中ニハ間、愚息新兵衛尉近日指越御見舞可申り、恐惶、

正保四年

丁亥十月晦日

長崎助左衛門

貞義

垂水衆坂元九郎左入道

將安尊老

人々御中

命をは捨て其名をのこすこそまとハぬ世々の道しるへなれ

君と共に捨立國のをのつから眞の道をゆくへならまし命をハ軽く捨てし心こそ安く樂む後の世ならめ

(以上挿入)

十二番箱四十六卷中

光久公御譜中ニ在り

御札致拜見り、兩上様御機嫌之御様躰被承度旨被差越御使者り、弥御氣色能被成御座り之間可御心安り、将又大納言様口琉球綿百把并蝦拾被獻り、遂披露候之処被入念之段御満悦之御事り、委細御使者可為演説り、恐々謹言、

朱力十

慶安元年

十一月朔日

松平和泉守

乘壽判

松平薩广守殿

御文庫拾一番箱四拾六卷中

光久公御譜中ニ在り

御札令拜見り、兩上様御機嫌之御様躰承度被存之由得其意り、因茲被差越使者琉球綿式百把・干鯛一箱・河苔一箱被獻り、遂披露り之處、念之入り之段御満悦之御事り、委曲使者可為演述り、恐々謹言、

朱力十

慶安元年

十一月五日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平薩摩守殿

光久公御譜中

猶以繪圖様躰存知之者申付持參可仕り間、御下知可

忝ハ、已上、

御飛札令拜見ハ、然者薩サツ廣・大隅并程近嶋々之繪圖大形
出来申之由、琉球八重山嶋之儀者其後御到来無御座之
間、先々出来ハ之分次第首尾御調被成度之旨、就夫来
十五六日之時分其御地（伊東祐久）へ此方繪圖差越ハ様こと被仰下得
其意ハ、御書面之趣則大和守へ申聞ハ、被入御念忝ハ之由
申ハ、猶期後音之時ハ、恐惶謹言、

朱力キ
慶安元年
霜月九日

肥田木主水佑
スリキレ
□□判
長倉三左衛門尉
祐秀判

伊東勘解由
祐乘判

嶋津彈正様
参貴報

253 光久公御譜中ニ在リ

一筆令啓達ハ、琉球國王為續目御禮使者差上ハ時分ハ之儀
承ハ、右之趣及上聴ハ處、来年七月到江戸致参府ハ之
様其方迄可相傳旨被仰出ハ、次道中樂人之事可為如先
年之由上意ハ間、可被得其意候、恐々謹言、

朱力キ
慶安元年
十一月十一日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩サツ廣守殿

254 光久公御譜中

同年十一月十三日

家光公拜ニ惠御應之鶴ニ、執政以レ書令ニ驛路ニ、令ニ之贈ニ
薩府ニ、光久恭拜戴、馳ニ鎌田又七郎政由于江府ニ拜謝焉ス、

255 御文庫拾二番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御應之鶴被遺之ハ、委細從又三郎方可被申ハ、恐々謹言、

朱力キ
慶安元年
十一月十三日

阿部豊後守
忠秋判
松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

256 全上 光久公御譜中ニ在リ

此齋從江戸薩廣國かこ嶋にいたりて急度可相屈者也、

慶安元年

十一月十三日

(阿部忠秋) 豊後(印)
(松平信綱) 伊豆(印)

右宿中

257 御文庫廿番箱四拾三卷中

猶、御礼之御使者不及申、共かろき衆、成合申間敷、前々ノ御覚も可有御座、御吟味を以被仰付尤ニ存、彼作左衛門事俄ニ御使被仰付衣掌(袋カ)等此元ニ召置かろく申付、其御心得早々被召上、外、以上、

急度令啓入、然者昨晚御鷹之竊被成御拝領、御奉書相添差下申、當年ハ例年ニ相替松平伊豆殿御宿留守居之もの一人可致参上由被仰渡、右衛門佐伺候仕、同前ニ松平新太郎殿・毛利長門守殿・細川肥後守殿・鍋嶋信濃守殿・松平筑前守殿へ表被成拝領、先以目出度奉存、於爰許又三郎様今日四ツ時分被成御登、城御禮被仰上可然由伊豆守殿御指圖ニ、従其元之使者ハ余之急ニ無之、亦不苦、御国之遠近御座、間夜を日に次急、ハ不入儀之由被仰、此度之竊持せ送等も従御公儀被仰付、此方ハ宰領計可相付旨被仰渡

間、児玉作左衛門御道具之者一人相付、右之留守居衆申合如此、是又為御心得御座、恐惶謹言、

十一月十四日

新納右衛門 久詮判

北郷佐渡 久加判

山田民部様

川上因幡様

嶋津圖書様

人々御中

封函ニ

十一月十四日ノ状十二月二日夜半児玉作左衛門被持下候、

一御鷹之竊御拝領之事、

一右御礼ニ御使可有進上事、

一児玉作左衛門追付可被召上由候事、

外宛名面略

258 御文庫廿番箱四拾五卷中

琉球人之事写 長崎通事衆手前ニ有之候、書写申候、

建國府内ニ琉球人上下十二人扶持人ニ罷成、此中迄石火矢葉之奉行仕罷在、然処四月之時分江西を取返、金昇榎甥郭天方と申者、福州ニ罷在、達旦人共、大明方ニ被責、籠城仕兵糧ニ飢申、由聞、合力のため川舟ニ兵糧を積式

百艘程にて福州に参りて福州の様子を見計り、達旦人
よかり外を見、建國府に降参可仕由申遣り、建國府承引
被仕り外共、若謀る哉可有之と存、然る取合も無之
處、達旦人城之内に打テ出申外故、郭天方モ小船に有
之故かなわしと思、小船を乗捨陸に陣をはり、其後上四
府に上り申外、鄭彩ハ狼崎(A.D.)と申所に引取り外、右之琉球
人達旦人に取卷レ降人に成、達旦人同前ニ城之内に参
り、又始より琉球人二十人卷合こあひ、福州之根城に罷
在り者と一所に成、都合三十二人于今城に罷在り、内一
人ハ琉球之王之むこ、但大鬢之男に御座り由申り、又
一人ハ琉球之王之こじうとに御座り由申り、然る今度
琉球人御尋に付鄭彩手前よりしのびを城之内に入、日本
より各之事を御尋に御座り間、降参仕り此方落ち
へのよし云遣り外共、琉球人存り外、達旦人に隨籠城仕
り故、若たはかりにて可有御座かと存承引不仕り、併、日
本より御尋におゐてハ日本より之御状并我々妻子之名共
を書付被遣り者夫を證據に仕、城を出可申由申り外、于
今城内に罷在り由申り、其後又鄭彩手前より銀子壹貫目
しのひのものへ持せ、頭二人之琉球人に被送り由申り、
以上、

子ノ十一月六日

建國府鄭彩仕立之唐船三艘之船主申分

一當年六月十三日福州致出船外、其時分迄者琉球人十二
人右船頭之主人建國府へ受扶持被致奉公外故、同船に
罷在朝夕参會為仕由申り事、

一右唐船當九月十八日長崎出船致帰唐外、七月比にあり
はん、達旦人取合之砌琉球人達旦人より被卷取、福州
之根城へ籠り、前々城内へ罷居り琉球人合卅二人之外
之人数も定る城内へ罷在りはん由申り、日本より御状
なと御遣り外、城を出り儀者口能有間敷由申り事、

通事衆申分

一右唐船来ル十二月中旬比、長崎出船可申り、彼舟便に
御状御遣り者正月上旬にハ必福州へ可相届り、三艘に
三通被遣可然り、右之船明年ハ早く可参り、其舟便に
無吳儀可有帰朝り、鄭彩之儀ハ数年日本へ船を遣り、
御馳走不申り外不叶事り、御奉行所より被仰遣り者態
船を仕立りても可遣由被申り事、
一鄭彩ハ泉州之者にてり、平戸一官之子(鄭子憲)森官と申合、魯
王を可取立志に福州に來、大かた手三付、大明方に
罷成り外共致用心船に罷在り由り、鄭彩ハ平戸一官之い

とこのよし、一官ハ達人ヨリ謀ニあひ達且方へ降参
仕北京之城内へ罷在由事、

子十一月廿五日

右者於長崎馬場三郎左衛門尉様御意ニ由通事所ニテ承
届、但通事衆四人相揃、已上、

丑二月十九日

堀弥右衛門

此丑ハ慶安二年己丑ニ当レリ、子ハ元年也、

御文庫廿番箱四拾五卷中

十三番南京船七月廿九日入津大明兵乱風説之事

一大明ヲ改名大清國年号順治、年十四才即位三年ナリ、

一大清國之所属北京・南京・浙江・山東・山西・河南・

湖廣ハ半分此分也、

一明之代中興之處廣東・廣西ハ萬曆之孫、桂王ト申、

去年即位被成、年号永曆ト申、其大將軍ハ陳邦富ト

申、

一福建・福州ニハ曾ノ國ノ潞王ト申中興之主、其大將軍

ハ鄭彩ト申、又ハ泉州・漳州ニハ曾子森官ト申平戸之

生ニテ、七歳ヨリ此方ヨリ御渡シ被成、日本人ニテ

外、此人数五萬ホド有之由承、是ハ福州ヨリ下也、

福州ヨリ上ニハ所之義兵ヲ挙申、守之者也、江西ニ

ハ金昇(榎トモ)ト申大將是ハ韃靼人ヨリ守護之為ニ申付、

元ヨリ大明之時ノ官ニ由、か変シ申、此正月方之事

ニ御座、承、湖廣之國半分ハ何騰蛟ト申大將右ヨ

リ守之、雲南ヨリ貴州ハ沐國公ト申大將軍元守之

外、四川陝西ニハ張現忠ト申大將又ハ李公子ノ弟トモ

合持守之、

右者明方之様ニ承、

一大清國ノ内ニ少ク乱處山東ノ内臨清・齊南ニ山賊有之

由申、

一浙江ノ内處州金華ニハ義兵力作乱仕、餘處ニモ皆少

ク乱申由承、

一前任山海関大將軍吳三桂ト申、自央北京在遼東近任元

職ヲ仕、此関ノ北ハ韃靼人ノ國ニ由、有帰家ノ韃

靼人トモ見合打害シ申、陝西ノ様ニ被召遣、カ、

又人衆ヲ屯万付本ノ人衆相副三四十万ニ由陝西ノ様ニ

参、又此中南京ニ洪承疇ト申軍門、是モ吳三桂同心

ニ由参、承、

一此韃靼人ハ元之末孫ト申、スリキレ□韃靼人廿万程有之由

承、

吉書

一神社佛閣修理興行之事、

一可專勸農事、

一可徵納國々之年貢事、

右任三ヶ条之旨可有沙汰之状如件、

慶安二年正月十一日 光久(花押No4)

慶安三年御吉書略御同文

同 四年御吉書御同文略

御札致拜見外、旧冬、從 公方様御鷹之鶴拜領之儀忝被存

之由得其意存外、依之被差越使者 大納言様ハ砂糖漬之

御菓子一箱被獻之外、右之通遂披露外處一段之首尾外、

委細使者可爲演説外、恐々謹言、

朱力キ

慶安二年

正月廿日

松平和泉守

乘壽判

松平薩摩守殿

御状令拜見外、舊冬御鷹之鶴拜領之儀忝被存之旨得其意

外、因之為御札被差越鎌田又七郎、并御菓子御看被獻之

外、右之趣遂披露之処、念之入外段被思召御機嫌外、猶

使者可爲演説外、恐々謹言、

朱力キ

慶安二年

正月廿三日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩广守殿

慶安二己丑歲正月二十六日、光久爲參觀發三鷹城、同

三月二十日著三江都、家老島津圖書久通・伊勢兵部貞昭

俱奉矣、同月二十五日登レ城遂レ拜謁、

敬白 天罰靈社起請文之事

一此邦相續之儀我等為若輩之處被仰付、御芳恩生々世々

不可有忘却之事、

一琉球之儀自古爲 薩州之附庸之条、諸事可相隨 御

下知候、若球國之輩奉忘右之御芳恩、企惡逆者有之

亦、縦國中雖致其旨同心候、於愚拙屬薩州之御幕下、毛頭不可相隨逆心之無道之事、

一此靈社起請文之草案寫置讓与子々孫々、對薩州不可存不忠之旨可令相傳之事、

右之旨若於偽申上者

謹請散供再拜々々、夫惟當來慶安二年己丑二月七日月並者十二箇月、日数凡三百六十四箇日、撰定吉日良辰致信心、謹奉勸請掛糸百億須弥山百億鐵圍山云々、神名等略、

仍靈社上卷起請文状如件

于時慶安貳年己丑二月七日

琉球國司尚質判

265

御文庫拾二番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

為年頭之御祝儀被差越使者、殊御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外之処、念之入外之段御機嫌之御事外、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱力年
慶安二年 二月十二日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

266

御文庫廿番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

松平薩广守殿

松平伊豆守
信綱判

猶々ケ様ニ書状相認申外処ニ明日ハ日から悪外由出

合申ニ付、致談合明後日ニ被成御延外様ニ事申上、

其ことく相延申外、為御存外、以上、

一書令啓入外、

一太守様去ル晦日大坂へ御入津外、昨日當地へ御着座

御機嫌能外、明日此地可被遊御發足御用意ニ外、為御

存外、

一鎌田又七郎殿御使之首尾相濟外、御下向日出度外、

何様江戸之儀御口上之旨可被聞召外間無申迄外、

一此比大野主馬子息江州澤山(佐新山)へ被罷居之由、同所之者訴

人ニ出外ニ付、從井伊軋負殿捕方勢被指出外、其ニ付

一類方々へ御尋させ被成外由申之由外、長崎へ主馬

子老入罷居由外、若長崎へ不罷居外ハ、醫者仕、金山

などへ行廻之由訴人申外条、御家中へ罷在儀も外ハ

との御状從板倉周防殿被遣外得共中途にて相違外、然

處彼主馬子長崎ニ捕外由申来外間、御心安外旨

殿様へ可申上由周防殿へ誦方左右御使に被遣り、御返事に被仰進り、最早御心遣無御座儀に外へ共、向後様子不知者御國へ居付之儀無之様、各校量可入由被仰出外事、

一六条(東 西本論等)兩御門跡様方

昨晚御使者被参り、東御門之使少はやくり付、御進物等請取り時分、西御門之使方先我等先可罷出外なと、互二位争に我先と口論之様被申り付、我々談合仕玄養ちやんふ了惠此兩人へ申付あいしらせ申り趣ハ、去々年此表被罷通り時分も此方へ兩御門跡様使者被成儀り、御位之争共御座りつる、其時分も椽躰被聞り為被致迷惑儀に外、又哉此度右之御様子に御座り、御位之儀不存り間、いつれの御使者跡先ことの取次罷成ましくり旨家老共申り間、とても承引仕間舖り、御帰宅尤に存り由兩人前方申させり付、無是非被罷帰り、左り右翌四日之朝西御門跡之使被参り、平田(宗徳)豊前二途、昨日之出合に付使者指上り儀、殿様御耳にも不被聞召入使之者迷惑仕り、今朝日を替申り罷出り間、御取次頼存之由被申り得共、豊前申ハ、昨日御兩使同前御断申り付り被為帰り、今朝日を御替りとハ申ながら西御門

之御方計り取次申、年寄共へ申聞り共、合点仕ましく外と不通に被申放り、又東御門方ハ御亭主五郎兵衛所へ参り、内意利屈被申り得共、是も不罷成旨申切り、殿様も彼宗之儀むつかしく、思召り處に能仕合御座り取次不申り間、向後不通に罷成りハんと心安存外、重り御上下之時節御使者被参り共御取次被成ましくり間、為御存申り外事、

一此方御借銀弥成かね申り御行迫之儀に外、以後この儀不及申り、先當時之御用相達間敷と千萬致念遣り、其元御藏入方其外萬事被入御念尤に御座り、猶期後喜之時り、恐惶謹言、

朱カキ 慶安二年 三月三日 伊勢兵部 貞昭判

嶋津圖書 久通判

鎌 源左衛門殿
山 民部殿
嶋 筑前殿(人觸カ)
参り御中

267 島津中務久茂日記

今度地頭所御くり替に付、志布志之地頭職被仰付之旨奉

明廿五日 御目見有之ハ間四時分 登城候ニ參勤之御礼

可被申上ハ、恐ク謹言、

朱力年

慶安二年

三月廿四日

信綱

松平伊豆守

信綱

松平薩广守殿

奉存ハ、就其某存ハ者、彼地国境ニ別ル被入御念所ニ

ハ故、前々方功者衆相續ル地頭職被申来ハ間、拙者式可

致下知儀不似合儀ハ、題目内存之通口上ニ兩度迄御内

證申承ハ、是以遮ル御代言ニ存ハ、少々辞退申儀ニ無

御座ハ間、必別人ハ被仰付、某ハ者内場之外城被仰付ハ

様江戸ハ被仰上被下度ハ、此等之旨可然様ニ御披露頼存

ハ、已上、

右之通平野丹後殿便ニ江戸ハ被仰上ハ由候、

慶安貳年三月十日

新納刑部殿 (忠道)

追テ申ハ、

一琉球國へ被差越ハ御条書、先年被仰出ハ通ニ今度於長

崎被得御内證ハ通、相替ハ所ハ被成御改被仰渡ハ段尤

ニ存ハ、

一琉球諸嶋へ南蛮使者船など致着岸、楫柱を損せハハ間、

材木申請船造作可仕なと、申ハ陸へをりハ者、能仕

合ニいたし其船を留置御国迄早く被申上ハ様ニ可被仰

付ハ、其上ニ氣任をも申ハ者如何様ニ召扱ハても苦間

敷ハ存ハ、若又彼船方構虚言海上方ハいつ方へ参ハとも

何とも可仕様有間敷ハ、ケ様之儀者御奉行衆へも得御

内意ハ儀不能成ハ、殊ニ琉球國之儀者薩州様へ万事被

仰付置ハ条、御置目等御心次第ニ可被仰付之旨連テ承

置ハ、遠嶋之儀と申、目ニ見得さる御沙汰ハハ間、其

時々之奉行見計次第能様ニ被申付ハやうこと被仰付可

然存ハ、右兩条御仕合御法ハハ間則達 上聞候、為我々

申上ハ通尤ニ被思召ハ、早々此等之分可申下由被仰聞

ハ間如此ハハ、

一奈須五左衛門跡目之儀奈須主膳子三左衛門と申人安藤

右京殿御家中ニ被罷居ハ、彼人へ被仰付可被下旨去々

年方主膳被申出、此度相濟跡職無吳儀被仰付ハ、此等

之段五左衛門後家へ可被仰渡り、猶期後喜時り、恐惶

謹言、

慶安二年 四月三日

新納右衛門

久詮判

北郷佐渡

久加判

伊勢兵部

貞昭判

鳴津圖書

久通判

鎌田源左衛門殿

山田民部殿

鳴津筑前殿

人々御中

封面ニ左ノ如ク、名略

慶安二、四月三日ノ状同廿九日ニ四本内蔵助持参、

一琉球へ前ニ被遣候御条書之事、

一南蛮舟之事、

一奈須五左衛門跡之事、

一八月二日ニ本マ、

一琉球諸嶋へ南蛮船之儀木上筑右衛門歴命ニ被仰渡候、

(挿入) 光久公御譜中ニ在り

御譜ニハナリ
光久公御袖判

(花押 No.4)

覺

一夫為治国之臣者、物之施善懲惡举直之政可為專用、士有悦志高節以為氣勢、外交諸候候カ不重其主者傷主之威云々、萬事ニ付老中衆寄合談合之刻不殘心底細碎之詞を盡し於被出真実者敬其威之基たらん歟、或脇を見合致用捨、或老若之考を合談合ニも打合す大形之通迄ニ其席も延引になし、不念廬相之儀依有之事之起りり時者、謀敷躰ニ見得り間、後日之儀を專ニ被心得うかくしく無之様可為專一、ケ様之儀共於不被存合者、若吳国船来着りハ、國中調問敷と見及びり間、能く談合致しをかれ諸役人用段之儀者、一言にて先後も相濟り様可被申付儀肝要ニり、何篇大形ニて或事ケ間敷、或間敷、或疑敷ニ付諸邊之儀表むすひ兼、時にいたりて被驚之故、難調躰ニ相見得り間、内々之分別可為肝要事、一異国船来着之刻以相談可被申付り、何そ様子も不相見得り処諫敷成立り儀共不可然り間、左様之砌者他国・隣国之物沙汰被承、縦隣国衆つゝき勢雖有之、當国之衆者守置目、少々不諫罷居、下々以下不断之躰ニて罷居りやうに法度を可被申付り、自然從 公儀人数など可差出之通被仰付りハ、家老中能く被入念、隣国衆な

と相操りとの風聞有之共、国中之諸士以下不致動頼りやうに内々被申付置、新儀雖出来り不改其趣家老衆以相談萬事可被申付儀可為肝要事、

- 一 自国・他国によらず吳国船参り共、諸所之濱付などへ火をたかせられ儀無用たるへし、又諸所之浦濱へ為番衆浦傳二人を付置り儀入ましくり、但浦濱海上之差圖長崎奉行衆より被仰渡儀共りハ、可為各別、其外餘念を入種々事かましき行之儀共者被申付間敷り、浦濱に人数不差出りぬ不叶様子りハ、此方より為奉行可参り、是も多人数ハ可悪り、一兩人つゝも番手之やうにて罷在儀者苦間敷り、別各ニ番手とりて濱へ多人数番屋など作罷居り事可為無用り、
- 付 ため火之儀者如此中不相替諸所へ可被申付事、
- 一 隣国又国中へ異国船来着り共船数并人数相催騒動之躰曾有ましき事、

付 便船等之儀者不苦、用心之ためなどりて不断浦

濱へ番船被付置儀者入ましくり、自然異国船来着

りハ、隣国に飛脚、領分内者次飛脚を以不移時

刻様子可被承り、内々諸所へも此通可被申付置

り、并甕島之儀者ため火を以鹿兒島へ注進可申旨

可被申付事、

一 石火矢常にうち儀堅可為停止、其外卅目以上之鉄炮相揃為稽古つゝかすうたせられ儀曾有間敷事、

一 異国船之儀ニ付、或竹木、或糠・藁・綱・碇之類其外にも吳国方之用意としてこと／＼しく被申付儀曾以入ましき事、

一 長崎よりおらんだ船出船并其外之儀ニ付ても長崎表より書状などにて申来事りハ、早速領内中之津浦へ書状之趣以廻文堅可被申渡事、

付 此方より被申付儀ニ目ニ立り儀共曾有被申付ましき事、

一 使船・上洛船又者番船異国船之方へ入用にて被申付り共、船之取仕立加子賦并船道具等之細成儀船奉行次第可被申付事、

一 不断之船作有之儀者船奉行より漸々ニ相調り間、異国船用意として別各ニ船作と申付間敷り、若又船など可入儀共りハ、船奉行に致相談りぬ船如何程入り通可被申渡事、

一 鉄炮・石火矢・玉くすり并弓・鎗・具足・旗其外武具之類者兵具奉行存儀ニり間、入用之時分ハ如何程可入

通兵具奉行へ被申付りハ、以見合可相調事、

一 吳國船之儀ニ付、奉行衆御越可被成なと被存、其所ク
ハ御假屋被相立儀留る入ましく付、諸道具以下連ク
被遣置儀可為無用外、尤其所クニ假屋ニ可成家など
を見せをかれ外儀者不苦外、其外前かとの用心にて種
々不入儀共申付、造作共外儀曾以被まじき事、

一 異國船之儀ニ付、長崎奉行又者豊後横目衆、其外にも
異國船方之儀御あたり外衆など注進可被申儀共於有
之者、家老衆より無油断早ク可被申入事、若於延引者
異國方承外奉行可為曲事事、

一 吳國船之儀ニ付、佐渡守前より家老中へ相談可被申
外、自然延引之儀於有之者異國方奉行可為曲事旨堅中
渡り間、佐渡前より家老中へ相談可被申時分、何かと
外て被相延談合之儀大形ニ有之者不相濟外旨、佐渡守
より直可致披露之通申付置候間、各其心得可為肝要
外、吳國方之談合題目ニ可被相濟外、随其諸役人も無
油断可致相談外、萬一談合之儀共遠慮ケ間敷致され、
とやかくも被相延外ハ、家老中并惣奉行越度ニ綱可中
付外之間、毛頭疎略有まじき事、

一 きりしたん宗躰之改、年中ニ一度程ツ、可被申付事、

一 一向宗之儀右同前之事、

一分國中へころひりきりしたん者其邊にかもハれましく
外、乍去不審成儀共有之又者訴人申出儀共外ハ、遂穿
撃りて、ころふへきものハ其邊ニ、又宗躰ニ相究りも
のハ籠舎・遠嶋或死罪之變たるへく外間、不死やうニ
申付をかるへく外、又水せめ・すねはさみ・木馬など
にのせられりとも不死やうニ被申付置りて家老衆・使
衆以談合吳國方承外奉行より言上可被申外間、其咎之
御仕置共有之事外、此趣内ク不被忘存儀可為肝要事、
一 萬一長崎へ人数可差越り由御奉行所より申来りハ、
先人数式千程も物頭召列可罷立外、其次ニ又式千敷三
千敷以見合物頭召列長崎へ可參、物頭人数之行并法度
書別紙有之外、如此人数長崎へ差渡りハ、船奉行一人・
兵具奉行式人、是者玉くすり為可相渡、惣奉行一人・
物奉行一人此兩人者兵糧渡奉行として可罷越外、此等
之段者自然長崎へ人数など可參時之兼定ニ如此外事、
右條々堅可被相守、雖然或公儀より之仰出相替、或
時之仕合ニより奉行并物頭以相談相替儀者可有之外
条、其時節ハ以見合可然之様可被相調者也、

慶安二年卯月廿六日

光久公御譜中

一慶安二年己丑四月十日、於江戸從 光久公御使新納右衛門久詮（挿入）の久加へ被仰渡り、異國方の儀嶋津彈正久慶被仰付置り、病氣付る御断被申出り、因茲久加御家老役如本の吳國方并宗旨改方被仰付り間宜相勤り、且 光久公御參府被成り間、久加ハ帰國可仕之旨被仰下之、翌十一日以久詮奉領掌焉、夫ニ付る慶安二年己丑四月廿六日 光久公御袖判数ヶ条之御證書賜之、御使新納久詮也、久加謹（挿入）頂戴焉、

274

光久公御譜中
正文在文庫

為端午之嘉儀帷子単物数十到來歛思召り、猶酒并讚岐守

272

北郷久加譜中

慶安元年戊子四月、奉 貴命赴レ武陽、代ニ島津圖書久通、翌年賜レ暇歸國矣、賜レ暇之時奉下宜（挿入）司ニ異國方及宗門之事 貴命上、翌年四月二十六日頂ニ戴御袖判之御掟書ニ、此行亦長井主水利典從レ之、同二年己丑四月二十六日轉レ高岡賜ニ薩州千臺（挿入）・高城地頭職ニ、

一書申入り、仍奈須主膳子三左衛門事、奈須五左衛門存生之時分養生ニ可仕由申置り、就其三左衛門事、此中安藤右京殿家中へ罷居りニ付る御断被仰入、從彼方無吳儀暇被成御出、五左衛門跡職ニ此度被仰付、則名をも五左衛門ニ被召成、主從六人之御賦被下小荷駄衆並ニ於此方被召仕り、此等之段五左衛門後室方へ被仰渡り、猶期後喜入り、恐惶謹言、

朱カキ
慶安二年 五月ノ二日

新納右衛門
久詮

伊勢兵部
貞昭

嶋津圖書
久通

鎌田源左衛門殿

山田民部殿

嶋津筑前殿

人々御中

可述候也、

朱力年
慶安二年 五月三日

家光
墨印

薩摩侍從とのへ

275 光久公御譜中

同五月十五日

將軍家降レ命、聽下以三光久之女一、為三島津右馬頭久雄之配一、結中婿家之縁上焉、是因下就三執政一訟上レ之也、

276 御文庫式拾番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

一書申入り、其已來者御無音之至リ、其地可為御無事リ、爰許上下替儀無御座リ、可易御心リ、仍御姫様御事嶋津右馬頭殿へ御縁組之儀御老中まで御内證共被仰入り處、早速被達 上聴、一昨十五日ニ於御城右馬頭殿御同前ニ縁組之儀可然之由御承ニるリ、誠以首尾能事濟千秋萬歳之御仕合殘所無御座リ、御方可為御同胸リ、早々此等之御祝言為可申入如此ニ御座リ、猶期後慶リ、恐惶謹言、

朱力年
慶安二年 五月十七日

新納右衛門

久詮判

伊勢兵部

貞昭判

嶋津圖書
久通判

嶋津 筑前殿

山田 民部殿

鎌田源左衛門殿

人、御中

封面ニ名略ス

五月十七日ノ状六月二日龜山主馬殿被持下リ、御姫様嶋津右馬殿へ御縁与之儀被仰出リ由外事、

277 御文庫拾二番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

御状令拜見リ、公方様従日光被遊 還御、弥御氣色能被成御座リ儀日出度被存之旨得其意リ、因茲被差越使者并琉球酒二壺・御看一種被獻之候、遂披露リ之處、念之入外段御機嫌之御事リ、猶使者可令演説リ、恐々謹言、

朱力年
慶安二年 六月十二日

阿部對馬守重次判

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

松平薩摩守殿

278 全上 光久公御譜中ニ在リ

御札致拜見リ、今度従日光 公方様御機嫌能被遊 還御

御文庫廿番箱四拾五卷中

外之儀相達目出度被存之由得其意存外、依之被差越使者
(家綱)
大納言様江琉球酒并御肴・御菓子被献之候、右之通首尾
能遂披露外、委曲使者可為演説外、恐々謹言、

宋カキ
慶安二年 六月十四日

松平和泉守 乘壽判

松平薩摩守殿

御文庫廿番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

切紙ニ由申外、今月九日之晚京御藏本道正庵より火起り
る御藏屋敷不残焼申之由外、土蔵之道具等も不出悉滅却
仕之由笑止千萬之儀共ニ外、隣家ニハかまひ不申由外、
以上、

宋カキ
慶安二年 六月十九日

(新納久詮)
新 右衛門

(伊勢貞昭)
伊 兵 部

(島津久通)
嶋 圖 書

(北郷久伯)
佐渡殿

(島津久頼)
筑前殿

(山田有榮)
民部殿

天罰靈社起請文前書事

一奉對 光久様御奉公無別心可申上外事、

一來世迄御奉公之御供可申上外事、

一御前方之儀少も他言申上問敷外、

付 吾等身上ニ被聞召掠儀共外ハ、何時も被遂御糺

明可被下外事奉頼上外事、

右之條々於偽申上者

牛王神文略ス

慶安二年六月吉辰日

渡邊一用

綱判

末ニ
天罰靈社起請文

渡邊一用

敬白

281 光久公御譜中

頃日、光久養レ病在三牀褥一、辱達ニ

家光公之聽、同七月六日以三眞田長兵衛ニ問レ病、恩命慇

懃也、

282 御文庫貳拾番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

以飛脚令啓達外、仍 太守様先月廿六日より少々御不例

ニ御座外、此五六日以前より御瘡病と相見得申外、龜庵

法印毎日被為見舞御葉被遊御腹用外間、近日可為御本腹(復)

と存外、其上御立願御祈念等無御油断外間、可易御心
 外、於其地も相應之御祈念とも被仰付肝要存外、右御氣
 色之通達 上聞、昨日為 上使真田長兵殿御出外、誠以御
 外聞可然御仕合共ニ御座外、各可為御同前と致推察外、
 隨而先書を以如申外、若御前様被遊御懷妊来月御誕生月
 ニ由外、就夫大乗院へ被成御相談一廉之御祈念被仰付、
 御札守早く被為差上尤ニ外、河内様・京極殿御方之聞得
 も可然存外間、御家中衆よりも御祈念之御札など進上外
 り能外ハんかと存外、右之段為可申入如此ニ外、追而御
 吉左右可申通外、恐惶謹言、

朱力半
 慶安二年 七月七日

新納右衛門
 久詮判

伊勢兵部
 貞昭判

嶋津圖書
 久通判

山田民部殿

北郷佐渡殿

嶋津筑前殿

人々御中

七月十三日付末紙封面ニ左之如シ、表紙調之節間違候ハんと考ラル、

慶安二年七月七 嶋津筑前殿
 日之状七月廿八 北郷佐渡殿
 日之夜八ツ時分
 二飛脚持下候、 山田民部殿

一 六月廿六日より太守様御不例之由候、
 一 七月初より御ぎやく班之由候付、御祈念之事、 嶋津圖書
 一 龜庵法印之御葉御用之由候、
 一 七月六日上使真田長兵衛殿 伊勢兵部
 御給之由候、 新納右衛門
 一 若御前様御懷妊ニ付御祈念之事、

283 御文庫廿番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

追而申外、今度其元へ韃鞮より琉球國へ之勅使并琉球人
 共之儀御公儀御口能可有之物音ニ聞得外間、自然長崎よ
 り早速琉球へ被差遣外様こと被仰外共、重而此御地へ被
 得御意御返事次第被仰付尤ニ外、韃人致同心日本へ参外
 儀殊外御不審相立外間、能く其分被成御分別專一ニ存
 外、為御心得如此外、恐惶謹言、

朱力半
 慶安二年 七月九日

伊勢兵部
 貞昭判

新納右衛門
 久詮判

嶋津圖書
 久通判

山田民部殿

北郷佐渡殿

嶋津筑前殿

人々御中

新納大藏死去之由笑止ニテ、其ニ付臺所役之儀先便

ニ申進ケ間、可相達ケ間無申迄テ、以上、

封面ニアリ

慶安二年七月九日之状七月廿一日之夜八ツ時分飛脚持下候、

一韃毘より琉球へ之勅使御公儀より口能有之由候、

外名而略ス

御文庫式拾番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々 殿様御瘡夜前老いつもの時分ニもおこり不申

ケ、はや落申ケ敷と悦申ケ、是又為御心得ケ、追々

御吉左右可申入ケ、以上、

急度以飛脚申入ケ、仍今度從韃毘琉球へ渡ケ使者并成之

年より唐へ致逗留ケ琉球人五十人乗合ケ船、山川之湊へ

来着之由被仰越ケ、則御老中へ御断被仰上ケ處、明日阿

部對馬様為 上使被成御出ケ、御意趣之内ニ右之船韃毘

人廿六人、琉球人五十人并船中之荷物迄一色も不残早く

長崎へ可差上之由 上意之由被仰ケ、其元方も長崎へ被

得御意由御書面ニ見得ケ間、彼御地より右之通ニ被仰越

最早被差遣ケ儀も可有之ケヘとも、自然韃毘人計被差越

ケヘなと、御座ケル琉球人之分ハ其地へ被残置儀ともケ

ハ、此度之 上意ニ可致相違ケ條、跡よりなりとも追

付被召上肝要ニケ、於爰元殊之外御口能とも有之儀ニ

ケ、乍不申能ケ可被入御念ケ、惣ケ韃毘人之前ニケ琉球

人と日本人知人かましき躰可悪ケ、乍去着船之刻より定

ル其無遠慮懇切ふり仕ケハん笑止ニケヘとも無是非ケ、

此状參着迄右之船其元へ逗留ケハ、可入御心得ケ、將又

此船人ともニ長崎へ□ケル一着相知ケハ、琉球へ其段々

便次第委被仰越ケ尤ケ、為其如此ニケ、恐惶謹言、

朱力、慶安二年 七月十三日

新納右衛門 久詮判

伊勢兵部 貞昭判

嶋津 圖書 久通判

山田民部少殿

北郷佐渡殿

嶋津筑前殿

人々御中

封面ニ名前略

七月十三日之状同廿八日ニ道具衆持參、

一琉球人同船之難難人長崎へ可被遣由候事、

一殿様御不例之事、

御文庫廿番箱四拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

追申申、仍今度之難難人・琉球人長崎へ被召寄自然日本之地ニケ様之異国人之不被成許容旨被仰出、右之人數并船荷物等其儘にて被成追放ハ、定琉球へ可致着船ハ、於其儀者琉球之國司・三司官など談合次第ニ被申付可然ハ、勿論其元ハ被付置ハ奉行右相談之所ニ少も構被申間敷ハ、其故者琉球國之儀自古來唐と日本ニ相隨罷居ハ、當時御當家ニ被成拝領ハとも日本國之内にて無之の間、如此沙汰ハ從此方御指圖可難成ハ、殊琉球へ使者船相着其地迄尋ニ参ハても善ニ合間敷候、兼ハ被仰付置ハ共不可合時宜ハ、菟角向後琉球國之為能様ニ相談を以可有挨拶之段、御國ハ被付置ハ諷方甚左衛門方迄急度被仰渡、右之意趣之口上にて三司官迄被申渡肝要ニハ、直ニ三司官へ以書状被仰越ハ儀者必御無用ニハ、此等之通從我々可申下由任御内證如此ハ、恐惶謹言、

朱力キ
慶安二年 七月十三日

伊勢兵部
貞昭判

新納右衛門
久詮判

嶋津圖書
久通判

山田民部殿

北郷佐渡殿

嶋津筑前殿

人々御中

封面

慶安二年七月七日之状七月廿一日之夜八ツ時分ニ飛脚持下候、

一六月廿六日より太守様御不例之由候、外略、

此封面ハ表紙懸ノ節間違しものなるヘシ、

御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶く右之条ハ佐州御一人ニ可申入りへとも、いつれ

も御相談可被成儀も可有之の間連署ニ申遣ハ、乍不

申南蛮舟相見得於申者長崎へ早々被仰断尤ハ、將又

此度新敷番屋など被申付ハと被仰出儀にてハ無之

由伊豆守様被仰ハ、為御存ハ、以上、

態令啓入候、然ハ今朝松平伊豆守様ハ被 仰出ハ、去

十四日おらした舟長崎へ入津仕ハ、彼船於洋中南蛮船ニ

逢申ハ、何方へ参ハ哉之由尋ハハ、ごわと申國へ商

287

未紙封面名略
八月廿九日之日付九月十三日ニ牧七右衛門被持下候、
一南蛮船之事、

(挿入)

態令啓入り、然者今朝松平伊豆守様より被仰出りハ、去
十四日おらむた船長崎へ入津仕り、彼船於洋中南蛮舟ニ

賣ニ参由ニハ、はてれんも兩人乗たる船ニありと申り、
尤ごわニ社可参りへとも若日本を心懸参りぬ偽ニ如右為
申儀も可有之の間、此中番手被申付り津浦無油断覚悟可
仕り、万一南蛮人参りハ、此中被仰渡り様陸地へ上ケ不
申様心得可申との仰出ニハ、此旨早々可申越之由 太守
様被仰出り間如此ニハ、猶替儀於有之ハ可申入り、恐惶
謹言、

朱力本
慶安二年 八月廿九日

新納右衛門判
久詮判

伊勢兵部
貞昭判

嶋津圖書
久通判

嶋津筑前殿

北郷佐渡殿

山田民部殿

人々御中

288

(挿入)

已上

一筆申入り、然者吳国船共近日追々帰帆申り間、於浦々
飛乗之もの無之様ニ、又者船中之者不残置様ニ御領分堅
可被申付り、自然風悪りて陸近く参り者如例番船を被付
置、日和次第出船仕り様尤ニハ、恐々謹言、

逢申りぬ何方へ参り哉之旨尋りへハ、ごわと申国へ商賣
ニ参由り、はてれん之兩人乗たる船ニてりと申り、尤こ
わニこそ可参りへ共若日本を心掛参りて偽如右為申儀も
可有之の間、此中番手被申付り津浦無油断覚悟可仕り、
万一南蛮人参り者此中被仰渡り様ニ陸地へ上ケ不申様ニ
心得可申との仰出ニハ、此旨早々可申越之由 太守様被
仰出り間如此ハ、猶替儀於有之ハ可申入り、恐惶謹言、

慶安 二年 八月廿九日

新納右衛門判

伊勢兵部判

嶋津圖書判

嶋津筑前殿

北郷佐渡殿

山田民部殿

人々御中

慶安^二 九月十一日
丑年

山崎^{權八}郎判

馬場^{三郎左衛門尉}判

松平藤摩守殿

家老中

289 急度申越^レひ、仍去月十四日阿蘭陀船長崎へ入津^レひ、彼舟

於洋中南蛮船ニ逢^レひ、ばてれんも兩人為乘之由^レひ、若日
本へ来着之儀も可有之^レひ間、如此中番手申付無油断其覺
悟仕、南蛮人来^レり者陸地へ不上様ニ心得可申由從江戸被
仰下^レひ条、津々浦々番衆連々之御置目堅相守無懈怠相勤
外之様ニ可被申付^レひ、南蛮船相見得^レひハ、不移時刻鹿府
へ可申越^レひ、聊緩有間敷^レひ、恐々謹言、

慶安^二 九月十四日

山 民部印

北 佐渡印

嶋 筑前印

山川^右秋目迄

慶衆中

290 光久公御譜中

中山王尚質謝^レ即位^ヲ之使具志川按司慶安二年五月上旬著^ニ

船藤府^ニ、同七月光久使^下家臣等携^レ之詔^申于江府上矣、

光久奉^レ命延^ニ具志川^ニ登^ニ柳營^ニ拜^ニ詔

家光公^ニ、具志川進^ニ獻尚質之捧物^ニ、奉^レ伸^レ拜謝^ヲ、且自

己亦上^ニ奉品物^ニ、拜^ニ詔

將軍家^ニ、同奉^レ詔^ニ

亞相家綱公^ニ、兩公各尚質及具志川有^レ錫、且至^ニ于從僕^ニ

拜^ニ給白銀・衣服^ニ矣、球人奏^ニ音樂^ニ、齋^レ先例而后參^ニ

詣日光山^ニ、捧^ニ尚質之所^ニ獻上之品物^ニ、神前^ニ、具志川積

類敬拜、歸^ニ于江戸邸^ニ也、九月二十五日給^レ奉書也、是

僉光久受^レ之而後授^レ球人也、十月上旬具志川辭^ニ武城^ニ

到^レ薩州、

291 圖書頭久通譜中

琉球王告^ニ即位賀^ニ之使价具志川王司、慶安二年秋謁^ニ武

州江城^ニ見^ニ

將軍家^ニ、而後奉^レ命赴^ニ野州日光山^ニ時、太守光久主痛^ニ

惱于瘡疾^ニ、由^レ是代^レ太守携^レ琉使到^レ其地、鎌田政有

亦警固焉、九月十五日拜^レ尊廟之日

將軍家大老對州阿部朝臣重次在^ニ于茲^ニ指南也、同十月三

日琉使辭^レ江戸之時、久通・鎌田政有警固焉、

御文庫廿三番箱廿二卷中 光久公御譜中ニ在リ

使者具志川遠到芳翰披見怡悅、抑去冬自薩州太守就申遣琉球國繼目之儀、為案堵之御礼進獻之土宜如目錄使者持參登

城奉備

台覽之處、則 御前ニ被召出御機嫌誠宜、且自分之贈物如紙面領之、厚情欣然之至也、然者從是雖為輕少越前綿二百把投之聊表寸志耳、猶使者口上申含者也、不宣、

慶安二年九月廿五日

酒井讚岐守

忠勝在判

回報 中山國王

館前

封面二

回報 中山王

酒井讚岐守

忠勝

御文庫廿三番箱廿二卷中 写 光久公御譜中ニ在リ

芳墨披覽欣然之至也、琉球國繼目案堵之事、去年冬從薩摩守光久就申遣之、使者具志川到着、為謝詞之祝儀進獻之土產如目錄、令披露于

大君幕下之處、

御前ニ具志川被召出御機嫌不斜候、委細申含于使者口

上者也、不具、

慶安二年九月廿五日

阿部對馬守

重次在判

阿部豊後守

忠秋在判

松平伊豆守

信綱在判

回答 中山王

館前

封面左ノ如シ

回答 中山王

松平伊豆守

阿部豊後守

阿部對馬守

御文庫廿三番箱廿二卷中 光久公御譜中ニ在リ

芳簡披閱欣幸之至也、琉球國繼目案堵之旨去冬從薩摩守光久就申遣之、為其謝礼使者具志川參向、祝儀之進物如目錄令披露于

巫相君之處、

御前ニ具志川被召出御機嫌快然、委曲使者可有演說者也、不悉、

慶安二年九月廿五日

松平和泉守

乘壽在判

回復 中山王

館前

封面左ノ如シ

回復 中山王

松平和泉守

295

御文庫廿三番箱廿二卷中

光久公御譜中ニ在リ

今度 日光山

東照宮大權現 寶前_レ以使者具志川令參宮、捧物如目錄

被奉納之儀敬崇之深志、御感被思召者也、不備、

慶安二年九月廿五日

阿部對馬守

重次在判

阿部豊後守

忠秋在判

松平伊豆守

信綱在判

中山王

館前

封面左ノ如シ

松平伊豆守

中山王

館前

阿部豊後守

阿部對馬守

右全案同年同日宛同断酒井叢岐守忠勝在判略ス、

写正文在文庫

今度 日光山

東照宮大權現寶前_レ以使者具志川、捧物如目錄被奉納之儀敬崇之深志、御感被思召者也、不備、

慶安二年九月廿五日

酒井讚岐守

忠勝在判

中山國王

館前

297

御文庫廿三番箱廿二卷中

光久公御譜中ニ在リ

白銀

五千兩

屏風

五雙

右從

_(家光)公方様于中山王被遣之者也、

丑九月廿五日

上封ニ

目錄

右一通

光久公御譜中ニ在リ

白銀

三千兩

綿衣

二十領

296

光久公御譜中

右從

（家傳）
垂相君於中山王被遣之者也、

丑九月廿五日

上封二

目錄

右一通

298
光久公御譜中

中山國相續之儀去秋貴翁に申定之處、為安堵之御祝詞當
夏之頃被差渡具志川王子欣然々々、從往古琉球之儀雖當
家之領國、依為吳邦之使价任先規參謁于關東江府之城、
則達 上聽不日仍具志川王子拜見

大樹家光公 垂相公、以述嘉祥御機嫌不斜、貴公殊使者
具志川且復到從僕賜白銀・衣服先授于光久以与之早、誠
以貴國之誉於予亦恐悦不少、弥國中政道可被無驕奢用
儉約、若緩怠之意於有之者不可然者也、此旨親戚之諸王
子并三司官等令承知可專國政、仍為即位之壽所賜之土産
如目錄到來、御慰勸之至多幸々々、猶委曲從家老可相伸
之間不能詳、恐惶不宣、

朱力キ

慶安二年

九月晦日

薩摩守光久在判

謹上 中山王

299
御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

一書令啓上、仍 又三郎様奥方今月朔日ニ御姫様被成
御誕生候、千秋萬歳目出度奉存、殊 御前様御息災ニ
被成御座、各御大慶之儀令察、此等之旨以飛脚被仰
越之条書中如此御座、恐惶謹言、

朱力キ

慶安二年

十月朔日

町田勘解由

久則判

山田民部様

嶋津筑前様

北郷佐渡様

人々御中

末ニアリ名ハ略ス

十月朔日ノ状同廿三日ノ曉飛脚到來、

又三郎様御奥方御誕生之事、

此書中十月朔日御誕生之御女子ハ翌三年六月廿八日御夭亡、御死骸奥岳寺へ取置
云々ノ事見ヘタリ、初テノ御生子ナレトモ御系図ニハ不相見得候、後人ノ考拠ニ
供ス、

300
綱久公御譜中

芳墨落手多幸々々、然去秋貴翁へ中山國續目之儀被成
安堵^{症カ}□以御満悦珍重々々、為此等之御祝祠所賜之土宜如

(録脱カ)
目到来御慰懃過當之至也、猶委曲使者可為演說之間不能
詳、恐懼不宣、

朱力キ
慶安二年 十月三日 又三郎久平御判

謹上 中山王

301 御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

以兒玉作左衛門被仰上ハ御書面具ニ令披見ハ、然者種子
嶋ニ御座ハ榮春様先月八日俄ニ御遠行之由絶言語ハ、則

達 上聞ハ、此中種子嶋へ御座ハ子細前、公儀へも御
存之儀ニハ聞、可被成御披露由 御意候之条、一昨朝酒

讚岐様其外御三老へ為御使右衛門罷出委細申上置ハ、為
御心得如斯ハ、恐惶謹言、

朱力キ
慶安二年 十月廿三日 町田勘解由 久則判

新納右衛門 久詮判

伊勢兵部 貞昭判

鳴津圖書様

鳴津筑前様

北郷佐渡様

山田民部様
鎌田源左衛門様

人々御中

封面ニ

慶安二年十月廿三日之状十一月四日ニ兒玉作左衛門被持下候、
一榮春様御連行之由被達 上聞之由候、

外名略ス

302 御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

以一書令啓入ハ、仍鳴津兵庫殿より於此地被仰上ハ、先
年北郷式部殿・嶋津玄番殿御同前ニ私領之山御給ハ處

ニ、其後又從 公儀御刀木等被召上ハ處ニ、玄番殿より
御侘言被 仰上、于今万千代殿御領分之山ハ被為給ハ間、

兵庫殿御事當分御一人ニの爰元へ御詰罷成ハ付、御手
迫ニハ領内之山御刀木迄被下ハ様ニと被為仰上ハ得ハ万

千世殿同前ニ可被仰付之由 上意ハ、此等之段山奉行方
へ被仰渡尤存ハ、猶期後慶ハ、恐惶謹言、

朱力キ
慶安二年 十一月朔日 町田勘解由 久則判

新納右衛門 久詮判

伊勢兵部 貞昭判

嶋津 圖書殿

嶋津 筑前殿

北郷 佐渡殿

山田 民部殿

鎌田源 左衛門殿

人々御中

封函ノ名略ス、左之通

嶋津兵庫殿山之儀、

御文庫廿番箱四拾六卷中

天罰靈社起請文前書之事

一奉對 光久様無別心御奉公可申上外事、

一今生之事者不及申上、来世迄之御奉公之御供可申上外

事、

一身躰之儀ニ付聞召被掠儀外ハ、被逐御糺明可被下外

事、

右之條々於偽申上者

牛王靈社上卷神文略

慶安二曆十一月吉日

末紙ニアリ

座主門前之三右衛門事

田中主税之助

田中主税之助
國長判

天罰靈社起請文

敬 スリキレ(白カ)

光久公御譜中

先是寛永二十一年所レ命之領國薩・隅・日・琉球國之
圖、並日州伊東大和守祐久・有馬藏人康純・秋月長門
守種春・島津但馬守久雄之領土以ニ四家所レ獻之地圖ニ
淨ニ書焉、以ニ今茲慶安二年十一月五日、獻ニ呈ヌ兩
奉行井上筑後守政清・曾我源左衛門于江府ニ矣、

○同年十二月六日

家光公以ニ下曾根三十郎(信也)、拜ニ惠御鷹所レ擊之鶴一隻、

御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

追而申入外、爰元上下之御屋敷中相替儀無御座外、

一大守様弥御機嫌能今月朔日ニ 御登城可被成之由御老

中方へ被仰入外處、

公方様少御口中御痛ニ付而不被遊 出御候故相延申

外、近日中ニ可有御差出由外間、目出度奉存外、

一同朔日下曾根三十郎殿 上使 スリハケ御鷹之鶴御拜領外、目

出度御仕合其元迄可為御同意と存外、

一若御前様就御誕生從其元為使寺山又右衛門被為差上

外、同三日ニ爰元へ参着外、御進上物等之儀ハ於此地致相談相調申外、

一各御一門中右御祝儀として使者被成進上外、近日致披露御返事相濟次第差下可申外、

一毎度如申外、上方御借銀一圓無之、其上此中借上置外借銀も達功こひ申外ニ付、大坂へ上着候八木代銀も

過半京都之返銀ニ罷成、爰元之拂方年内分八百五十貫目程御座外分惣別手明ニ成申外、千兩式千兩之儀ハいか様ニも可調外得共、壹万二三千兩ニ外間何とも不

及分別候、笑止之至無申計外、いか様ニ可相調外哉、其地も折角可有御相談と存外へとも餘之事ニ追々申下

外、能々様子も替御談合專要ニ存外、猶期後喜外、恐惶謹言、

朱カキ

慶安二年 十二月七日

新納右衛門

久詮判

伊勢兵部

貞昭判

鎌田源左衛門殿

山田民部殿

北郷佐渡殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

人々御中

封面ニアリ、名ハ略ス

十二月七日ノ状飛脚到来、

一太守様御機嫌之事、一十二月朔日御廣之館御拜候之事、

一若御前様御誕生ニ付寺山又右衛門殿来着之事、

一御借銀無之私方銀子年内分八百五十貫程之由候、

306

御文庫廿番箱四拾六卷中

光久公御譜中ニ在リ

一書令啓達外、然者 又三郎様へ御姫様被為出来外、為御祝儀之使其元從衆中寺山又右衛門被差上外、爰元以御

仕合致披露外之處ニ一段御満足ニ被 思召之旨 上意候、此等之通各より可被申渡外、委細嶋津安藝殿可被仰

渡外之間不能審外、恐惶謹言、

朱カキ

慶安二年 十二月廿三日

町田勘解由

久則判

新納右衛門

久詮判

伊勢兵部

貞昭判

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

北郷佐渡殿

山田民部殿

鎌田源左衛門殿

人々御中

封面ニ左ノ如シ

慶安二年十二月廿三日状同三年二月廿一日晚ニ寺山四郎左衛門殿持下ニ而候、

一又三郎様御誕生御祝儀之使御返事也、

外名略ス

307

御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

十月廿五日御状令拜見リ、仍 又三郎様奥方御誕生被成
外ニ付、御祝儀為可被仰上寺山又右衛門殿被指越外、鹿
兒嶋衆中より御樽代青銅千足進上被申外、此等之旨致御
披露外、早々御慶被申上御大慶ニ思召之旨 御意ニ有外、
并御前様へ御樽代青銅五百足進上之通柴田安右衛門を以
御祝儀申上外、御祝着ニ思召之由外、委素安右衛門より
可被申外、於様子素又右衛門殿可被申達外間不能詳外、
猶期後慶時外、恐惶謹言、

朱力半

慶安二年

十二月廿三日

町田勘解由

久則判

山田民部様

北郷佐渡様

嶋津筑前様

参御報

封面左ノ如シ、宛名等略ス

慶安二年十二月廿三日之状同三年二月廿一日晚ニ寺山^{シレス(四郎)}左衛門殿持下リ、

一又三郎様へ御誕生御祝儀^{シレス}御返事也、

308

御文庫廿番箱四拾六卷中

天罰靈社起請文前書之事

一奉對 光久様無別心御奉公可申上外事、

一今生之事素不及申上、来世迄之御奉公之御供可申上外事、

一身躰之儀ニ付被掠聞食儀外ハ、被遂御糺明可被下外事、

右之條々於偽申上素

牛王神文略ス

慶安二年十二月吉日

細江内膳正

吉昌判

末紙ニ

天罰靈社起請文

本々、
細井内膳正

吉昌敬白

御文庫廿番箱四拾六卷中

天爵靈社起請文前書之事

一奉對 光久様無別心御奉公可申上外事、

一今生之事者不及申上、来世迄之御奉公之御供可申上外

事、

一身躰之儀ニ付被聞食掠儀外ハ、被遂御糺明可被下外

事、

右之條々於偽申上者

牛王神文略ス

慶安二曆十二月吉日

二見二左衛門尉

家嘉判